
Fate/after

聖場陸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e / a f t e r

【Nコード】

N 6 7 3 8 W

【作者名】

聖場陸

【あらすじ】

第五次聖杯戦争から約二十年後――。
士郎と凜の娘である衛宮麗奈は帰り道に槍を持った謎の男に追われる。

これが聖杯戦争なのだと理解した彼女は、自身もサーヴァント・ライダーを召喚する。
こうして彼女は終わったはずの聖杯戦争に巻き込まれる――。

プロローグ（前書き）

F a t eのアンソロ小説です

時間軸的には凜ルートのTrue End後から20年後ぐらいです
ね

原作キャラは少なく、オリジナルキャラ多めです

まだ未完ですがそれなりに話は進んでいるのでに書いた話は
ぐに載せる様にします

一応なるべく原作を知らなくても読めるように書いてはみるので
原作を知らなくても興味がある方は是非読んでみてください

また作者は原作を一通りプレイしましたが設定に矛盾が生じるかも
しれません

その時は優しく指摘してください

ものすごい長編です

頑張って完成するように書くので気長に読んでみてください

プロローグ

——青空が大地を覆い、木々の草が風に吹かれて飛んでいた。
その大地を一頭の馬が駆けている。その騎馬の背中に一人の男が
乗っていた。

彼は若々しく、また猛々しい顔と長い黒髪がバカみたいに似合う男
だった。

長い黒髪を風になびかせながら彼の騎馬が走る先には大量の兵士が
待ち構えている。

間違いなくそれは彼の敵である『軍』だった。

男は右手に大振りの剣を構え、躊躇なく軍に飛び込んだ。
敵の兵士たちは彼を取り囲むように襲う。

彼はそれを剣の一振りでなぎ払い、さらなる一振りで敵を追いつめ
る。

彼は敵の前線を一人でなぎ倒したあと、大声で雄叫びをあげる。
すると彼の従える軍が彼の背後から一気に敵軍に襲いかかった。
そして彼は戦に勝利した。

その姿はまさに英雄にふさわしきものだった。

——そんな彼の死は理不尽だった——。

男は床に横たわり、彼の配下や民は涙を流しながら彼を見守ってい
た。

彼は自分の弟と親友に国の全てを託し、最後に残念そうに——。

「悪いな、公こうきん謹……お前との約束、果たせなくて……」

その場にいなかった親友にゆっくりと呟いた。

そして私は夢から覚める。

私の瞳には涙が流れていた。

バカバカしかった。

どうせ涙を流したところで、何も変わるはずがないのに……。

——そして終わったはずの戦いは始まる——。

——消えたはずの聖杯を賭けて——。

一日目 戦いの始まり（１）

部屋には眩しい朝日が差し込んでいた。

冬木市の冬は他の場所より長いかわりに少し暖かい。

かといって早朝の冬はやっぱり寒くて布団から出たくないものである。

「麗奈ちゃん、もう起きないと朝ご飯冷めちゃいますよ」

重いまぶたを開けるとエプロン姿の桜姉さんが笑顔で起こしに来てくれた。

桜姉さんこと間桐桜は私の母さんの妹で私の叔母にあたる。

「今日は麗奈ちゃんのお好きなあさりのお味噌汁ですよ」

むむ、あさりの味噌汁は温度差で味がメチャクチャ変わるから、一刻も早く起きなければ。

布団から抜けだし、とりあえず制服に着替える。

「桜姉さん、お母さんはもう起きた？」

「ううん、今日も朝ご飯は食べずに行くみたい。ほんと、昔からそういうところは変わってないんだから……」

桜姉さんが苦笑しながら呟く。

まあ私も寝起きの母は何回か見たことがあるけどあれには恐怖を覚えるわね。我が母ながら恐ろしい。

布団を片付け、部屋を出て居間に向かう。

「あつ、おつはよう麗奈ちゃん」

元気よく迎えてくれたのは藤村大河先生、私の通う学校の先生だ。

母さんが在学の頃から教師をやっていたからパワフルなものだ。

余談だがこれでも四十代だ。なんというタイガー。

その隣には先生の夫である藤村健悟のおじさんが「やあ、おはよう」と気弱、もとい穏やかに挨拶する。

「あ、おじさん出張は終わったんですか？」

「まあね、またしばらく家に腰を置けるよ」

にこつとおじさんが笑みを浮かべる。

健悟のおじさんは薬品会社に勤めていて、あまり家にいないのだ。けっこう見た目はひ弱そうなのだが、これがけっこう肝がすわっている。

藤村先生の家はヤクザで今は先生のお父さんが親分なのだが、その父親に直接娘をくれ——ってお願いしにいったというからすごい。二人とも朝食と夕飯はここに食べに来る。藤村先生いわくご飯を食べに来るのは昔からの習慣らしい。

朝食が終わり、桜姉さんと健悟さんが食器の用意をしている間に我が母——衛宮凛^{えみやりん}が居間に現れた。

「おはよう、麗奈に藤村先生」

母はだるそうに桜姉さんの淹れたお茶をすすする。

「もうだめよ凛ちゃん、朝ご飯ぐらい食べなきゃ」

母さんと藤村先生は同業者である。しかも母さんは私のクラスの担任だ。誰かの陰謀だろうか。

「大丈夫ですよ、藤村先生。私は昔から朝食は取らない主義なので」

「母さんが朝食が取らなくなったのは父さんが出てからでしょ」

私の鋭い指摘に母は苦虫を潰した顔をする。

「なによ別にいいじゃない。ていうかあなたも痛いところくわね」

「痛いところくのは母親ゆずりです」

私は目の前の赤い悪魔にとどめを刺しておいた。

母に口でまともにやりあえるのが朝方だけなのは口惜しいが、これ以上弄ると昼以降に思わぬ反撃を受けかねないのでこの程度にしておいてやろう。私ってとても謙虚。

十数年前、私の父——衛宮士郎^{えみや しろう}はこの家を出た。

それを見送ったのは私だけだった——。

暗い闇が立ち込めていた深夜の衛宮邸。私はたまたまトイレに行くとして、玄関に手を掛ける父親を見つける。

父も私の存在に気付くと笑顔を浮かべて、私の頭を優しく撫でてく

れた。

それはいつものような優しさに満ちた撫で方で、でもその時の父は薄暗闇の中、とても悲しそうな表情をしていたのを覚えている。

「お父さん、どこ行くの？」

「うん、お父さんはこれからいろんな人を助けに行くんだ。だから麗奈はお母さんのことを守ってくれるかな」

父親の表情が優しい笑顔に変わり、そして彼は衛宮邸を去って行った。

私は父親としての父さんは好きだったが、正義の味方になろうとする父が嫌いだ。

そんなことしても救われるものなど何もないし、それだけのために私と母を置き去りにした父親を私は決して許せないだろう。

「どうしたの、麗奈？ 今日も朝練行くんでしょ」

母さんがお茶を飲み終わり、すでに出かける準備をしていた。さて、私も邪念を取り払ってそろそろ出る準備をしないと。

玄関に私と母さんと藤村先生が揃う。

健悟おじさんは少し前に仕事で家を出ていた。

「じゃあ、行つてきます桜姉さん」

「じゃあ桜、あとよろしくね」

「今日の晩ご飯も期待してるねえ、桜ちゃん」

それぞれの挨拶をして玄関を開き、私たちは学校に向かった。

変わらぬ日常——現在の衛宮麗奈が歩む日常が今日を境に変わっていくことを、今の私はまだ知らない。

一日目 戦いの始まり(2)

学校に着き、二人の教師と別れて弓道場に向かう。

学校とは離れたところにある弓道場はもう何十年も使われているため、年季の入った重厚な雰囲気をかもしだす。

弓道場の中に入るとすでに一人の生徒が胴着を着て弦の調節をしていた。その人物はこちらの存在を確認すると手を振りながらこちらに近づく。

「よつ、麗奈。今日も早いな」

我が部の副将、美綴想子^{みつづり せうこ}は屈託のない笑みで挨拶をする。

想子のお母さんの美綴綾子^{みつづり あやこ}は私の母親の親友であり、私と想子も似たような仲である。

「今日も早いねえ、麗奈は。昔は練習時間になっても来ないのがほとんどだったのに」

「まあ、最近は藤村先生がうるさいからね」

「あはは、天下の麗奈さまも魔獣タイガーには勝てないってか」

「今の言葉、そっくりそのまま藤村先生に伝えておくから」

「あう、それはやめて。生まれてから十五年、まだ死ぬには早いよう。おいしいケーキ屋さんに放課後連れてってあげるからあ」

「あら、もちろんオゴリよね」

私は天使の微笑みを浮かべ、想子は涙目で「悪魔の娘え!!」と叫んでいた。

そんな感じで私たちがじゃれあっている間に弓道場は三人目の来訪者を迎えた。

「やあ、おはよう」

弓道部主将である少年——来栖正宗^{くるい まさむね}はさわやかな笑みを浮かべて挨拶する。

「あつ、主将。おはようございます」

「……おはようございます」

想子が瞬速の早さで反応し、私も遅れて挨拶する。

「うん、他の子たちが来るのにまだ時間はあるし、準備運動がわりに二、三本引いておこうか」

来栖先輩はそう言って自分の弓の準備を始める。

「しかし、あんたああいうのがタイプなの？」

私が小声で想子にたずねると。

「なっ、なななななに言ってるのよ！わっ、わわ私はそそんなじゃないわよ！」

慌てて否定している。なかなか可愛いもんだ。

「まあ成績優秀、スポーツ万能なうえにかなりのイケメンなものね、わからなくはないわよ」

事実、来栖正宗は学校ではファンクラブができるほどの人気者である。

来栖先輩は弓を構えてしばらくの沈黙後、矢を放つ。矢は何の迷いもないかのごとく的確の真ん中を的中した。

その鮮やかさに一瞬見惚れてしまう。

「しかしなぜだろう……一瞬その姿が虚ろと思えてしまったのは。

「うん、ダメだな。まだまだ姉さんには追いつけそうにないや」

周りから見れば十分な成果をあげたにも関わらず、彼は不満げな言葉をこぼす。

「いいんじゃないですか？来栖先輩らしくて。追い越せないものを無理に追い越そうとするのは見てて滑稽ですよ」

困ったような笑みを浮かべる先輩。

「はは、相変わらず麗奈ちゃんの手厳しいな。でも麗奈ちゃんも僕と同じ口じゃないのかい？」

「一緒にしないでください。反吐が出ます。私は追い越そうとしたのではなく、追いつけたかったです。できればずっと……」

「れーれーな」

想子がいきなり恨めしそうな顔で横に入る。

「てめえ一人で勝手に主将とイチヤイチヤしてんじゃないぞ」

「どこをどう見ればイチャイチャしてるように見えるのよ。まあいいや、そろそろ私も準備しないと」

私も自分の弓の弦を確認する。

深呼吸一つ。ゆっくりと射位に立ち、弓を構える。

瞳に写るのは白黒の円状。

射法八節の内、会までを終え、あとは矢を放つだけ。

一瞬——一人の女性が私の脳内に過ぎる。

放たれる矢。

その軌道はずかの外れ、的の横に突き刺さる。

「あー惜しい」

想子が悔しそうに唸る。

私は息を大きく吐いて射位から離れる。

「囚われているのは君も同じだよ、麗奈ちゃん」

私は彼の言葉に何も返さない。

否定なんてできない。だって、私にとってあの人は——。

弓道場の扉が開かれる。

朝練の通常の時間帯になっていた。弓道部員たちがぞくぞくと弓道

場に入ってくる。

「ってあたしだけまだ撃ってないじゃない。一番最初に来たのに——」

！

想子のテンションの高さのおかげで少し自分の心が落ち着いていた。

「さて、それじゃあちゃんとした朝練、始めちゃおっか」

来栖先輩は笑みを変わらず浮かべて後輩たちの準備を手伝い始める。

日常は未だ変わらず——。その裏で着々と変貌は起き始めていた。

一日目 戦いの始まり（2）（後書き）

初掲載時の文がやはり気に入らなかったなので大幅改変しました（ついでに前話も少し改変）

少しは読める文章になったかと思えます

一日目 戦いの始まり(3)

——女は不幸だった。

大学を卒業し、OLになつてから二年、普通に生きてきた彼女に今ある状況を理解できるはずがなかった。

——男はそれを幸運とは思わなかった。

否——生物にとって『食事』を取ることは当たり前前の行為なのだ。そして男がこの行為に快楽を得るのなら、それは逃げる獲物を追いかけるという行為にあるう。

「さて、人間とは面白い物だ。死ぬのは理解できても心は生きようとあがき続ける。どうせ死ぬのなら、黙って受け入れる方が楽であるうに」

男は微笑を浮かべながら一定の距離を保ちつつ女を追いかける。

「まあ、それではこちらがとてもつまらぬがな」

男は右手に持つ槍を女に放ち、彼女の膝を貫通する。

「あああああつつつ——！」

女の叫びが誰もいない路地裏にこだまする。

「飽きてしまつてな。それにもう喉が渴いた」

男は笑みを浮かべ、槍を彼女の膝から引き剥すと今度はその槍を彼女の胸に向ける。

女は喉が裂き破られかねないほど叫ぶ。

「ふふ、よいぞ。コオロギの鳴き声は心地がいい……が、そろそろ終いにしよう」

男はなごり惜しそうな顔で槍を彼女の胸に突き刺す。女は一瞬で絶命し、その血を槍に『吸い取られる』。

その血を男は時間をかけて愛しそくに飲み干す。

「ふむ、今回は少し早く終わってしまった」

男はなごり惜しそくに槍をなでる。

「まあ、今日はもう一人ぐらい捕食しても構わぬだろう」

男は笑みを浮かべ、次の獲物を捜し始めた。

○

「吸血鬼？」

平和な世の中に似つかわしくない単語に私はケーキ——もちろん想子のおごり——に夢中の顔を上げる。

「そつ。最近この街で血を吸われた死体がよく発見されるんだって。しかも被害者はもう十人以上、それも女性ばかり。その全員が何かに串刺しされた跡があるらしいよ」

「串刺し？」

「うん、なんでもかかわらないけど、その傷口から血を吸われた跡があるらしいの」

あまりの奇異な話題に、赤く輝くベリーベリータルトを食べようとした手を止める。

「あんだ、それ嫌がらせ？」

「もちろん」

屈託のない笑顔の想子に本気で殴ろうかと心の中で思案するが一応理不尽な理由でおこらせているのだから、ここは我慢するのが大人である。

「ていうか、あんだのお父さんいい加減警察やめた方がいいわよ。

普通自分の娘にそういうこと教えない」

「いいじゃない、面白いだから」

「そついうふうに片付ける普通？」

まあ、想子のこういうお気楽なところは今に始まったことじゃない。

私はため息をつきながら、この店一番といわれるエスプレッソコーヒーを口にすすする。

店を出て想子と別れる頃には空はすでに茜色に染まっていた。

私は自宅への道を歩きながら、想子の言葉を頭の中で反芻する。

別に見たことがあるわけじゃないが、本当に吸血鬼という存在がいたとしても私はそのことに何の疑問も抱かないだろう。

私はそれに近い——とまでは言わないが少なくとも普通の人間ではないからだ。

——私は魔術師と呼ばれる存在だ。

魔術師とは魔力と呼ばれるものを代償に奇跡を行う者たちのことだ。

魔術師の体には魔術回路と呼ばれる、いわゆる魔力を通す管のようなものがあり、それを使って魔術を行う。

また、ほとんどの魔術師は全ての理の源『根源の渦』と呼ばれるものにたどり着くことを至上の目的としている。

しかし、一人の人間の一生でこれにたどり着くことは不可能であり、魔術師は死ぬ前に自分の子供に己が魔術の全てを受け継がせ、受け継いだ者はさらに自分の子に魔術を受け継がせることで『根源の渦』にたどり着こうとするのである。

でも、私はそういう普通の魔術師ではない。

私の両親は魔術師であるはずだが、そのことを私に語ったことは一度もない。

私自身魔術を知ったのは、きまぐれで母の実家の書斎に忍び込んだ時なのだ。

その後も何度か忍び込んだ母の魔術書を読み漁り、ある程度の魔術なら扱えるようになった。

ここで一つ疑問が残る。なぜ私の両親は私に魔術を教えなかったのか。

母親である衛宮凜、旧姓遠坂の家系は間違いなく『根源の渦』に到達することを目的としていた。

ならば私に魔術を習わせるのは当然であり、むしろ自分の子に魔術を受け継がせないということはそれまでに自らの一生をかけて蓄積した魔術を受け継がせた先祖に対する冒瀆に他ならない。

「まあ、別にどうでもいいっちゃあどうでもいいんだけどね」
今の私はあくまで趣味で魔術の鍛練をしているのであって、もちろんそのことを知っているのは私のみである。
まあ、いずれ母親にはバレるかもしれないが、その時はその時と割り切っておこう。

○

「ふむ、そろそろうら若き少女の血も味わいたくなってきた」
吸血鬼と呼ばれた男は獲物を物色しながら一人呟いていた。
今まで彼は成熟した女性しかターゲットとして選ばなかった。
それは単に大人の女の血が子供に比べて濃厚で味の濃い血を有しているからである。

しかしもう十人近くの女の血を吸った彼はその血の味に飽きてきたのだ。

「たまには少女のさっぱりとした血の味も悪くはあるまい」
そして男は塀の上に隠れながら、夜道を歩く一人の少女に目をつけた。

「ほう、なかなかの上玉」
空はすでに闇が支配し、蛍光灯の光が夜道を弱々しく照らす。
周りに人はおらず、狩りにはちょうどいい。

「さて、もう時間がない。つまらぬが一撃で仕留めるか」
そして男——ランサーは槍を構え、一人自宅に向かう少女——衛宮麗奈に襲いかかった。

一日目 戦いの始まり（４）

背後から恐ろしいほどの殺気を感じ、私はすぐさまその場から飛びのく。

あとコンマ一秒でも反応が遅かったら、私は目の前の槍に間違いく腹部を貫かれていた。そうイメージしただけで吐き気がしてくるが、今はなんとか堪える。

私の目の前に『それ』はいた。

男は見た目初老で黒のマントを羽織り、その姿はさながら中世の吸血鬼を思い浮かばせる。

その右手には銀色の槍、というより巨大な『串』を握っている。

男は微笑を浮かべながらこちらを見つめている。

「今の攻撃をかわすとは予想だになかったぞ、少女。なかなかの心得があるようだ、何者だ？」

男が槍をこちらに向けながら問う。

「あなたこそ何者よ。いきなり人に槍振りかざすなんて！それにあんたまるで……」

——まるで人間ではない。

その存在感、強烈な殺気、見た目どうこの問題ではない。男の持つ異様な雰囲気はすでに人間のそれを逸脱している。

「ふん、まあよい。そろそろ君を殺そう。本来ならすでに帰らなければならぬのでね。あまり時間をかけられないのが実に惜しい……」

……

男はそう言いながら一步一步私に近づく。

このままでは私は男に殺される。

普通の抵抗ではする間さえ与えてくれないだろう。

「それなら……」

私は両手の親指を噛む。親指からにじんだ血を使って足首にすばやく『印』を結ぶ。

男は私の行動に一瞬虚をつかれた。

——この一瞬が重要。

狙いは正確に——確実に——。

フォース
フィフス
アリア
ブレイク
第四、第五詠唱破棄。

私の魔術は単純なる肉体強化。

両腕を第二、第三、両足を第四、第五の器官と基準し、それぞれに血文字を刻むことにより擬似的な魔術回路を造り、そこに魔力を注ぎ込むことによってそれぞれの器官の人間限界運動能力を超えた強化を施す。

詠唱を破棄することにより効果は半減——しかし速時行動に移れる。

私は地面を蹴り上げ、男に飛び掛かる。

足にまるで羽が生えたように身体は瞬間的に男の頭上にまで移動する。

男はすぐさまこちらに反応し、槍をこちらに向けた。

しかし——わずかながらこちらの方が早い。

私は男の頭を全力で蹴り飛ばす。

男はそのまま数メートル先の壁を破壊して倒れた。

私はそれを見送ることなくその場を走り去る。

今の一撃、並の人間なら頭蓋骨折は免れないがあの男にはたいしてダメージを与えていないだろう。

それでもここから離れる時間は稼げる。

全力を出しても私はアレを倒せない。　おそらく逃げることも不可能だろう。

それでも私の考えが正しければ、対抗手段はなくてはならない。　ただ成功する確率はほぼゼロに等しい。

それでも、やらなければ殺される。

私は路地裏に入り、その先の少し狭めの敷地に入る。
先の尖った石を拾い、アスファルトに魔法陣を描く。

「……っ」

私の母さんの実家に侵入してはいろいろな本を読み漁ったけど、その中でも特に私の興味を深く抱かせたものがあつた。

『聖杯戦争』

過去冬木市で五回にわたって開催された魔術士同士の戦いである。七人の魔術士がそれぞれサーヴァントと呼ばれる使い魔を召喚し、最後の一人になるまで戦い、残った者がどんな願望をも叶える聖杯を手に入れるのである。

母さんと父さんは前回の聖杯戦争の参加者だった。

さっきの男はもしかしたらサーヴァントかもしれない。

それほど彼の魔力はとてつもなく大きかったのだ。

サーヴァントとはさまざまな時代の英雄が英霊となったものを現代に使い魔として呼び出したものである。

魔術士が強大な力を持つ英霊を現代に召喚するというのは不可能に近いことだけど、聖杯はそんな奇跡すら可能にする。

もし彼がサーヴァントなら今聖杯戦争が始まっている。

なら私もサーヴァントを呼び出す。

我流とはいえ、これでも一端の魔術士。

サーヴァント召喚の方法は頭の中に入っている。

しかしあの男はサーヴァントではないかもしれないし、仮にサーヴァントだとしても、もう七人の枠がすでに埋まっているかもしれない。

どちらかだとしたら奇跡が起きない限り、私は確実にあの男に殺される。

いや——奇跡なんてものに頼るな。

今は自分の行動を信じるしかない。

魔法陣を刻み、そこに血を一滴垂らして呪文をつぐむ。

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。祖には我が大師シュバインオーグ。降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国

そのまま倒れそうな身体をなんとか支える。

そうとう深く斬られたのか右腕がまったく機能しない。

左手で右腕の傷をおさえる。それでもしないと痛みで気を失ってしまいそうだ。

「今のもかわされるとはな……殺気はわりと殺したつもりではあったが……」

壊れた壁からさっきの男が出てくる。

その手に持っていた槍はなぜか銀色から深紅に染まっていた。

そして私はある違和感に気づく。

右肩は深く斬られたはずなのに、傷口から流れる血の量があまりにも少ない。

「まさか……」

私は深紅に染まった槍を凝視する。

「ほう、気づいたか」

そう言つて男は自分の槍から『私』の血液を取り出し、それを愛おしそくに飲み始める。

「ふむ、この芳醇な香り。熟れる前にしてはなかなかの美味だぞ、少女」

男が血を飲み干すと槍は元の銀色に戻っていた。

「我が槍はちと特殊でな、血液に触れるとその血液を吸い上げるようにできている」

「最近起こってる吸血事件の犯人はあなたなのね」

「いかにも。我が魔力には人間の血液が必要なのでね」

「血液から——他の人から魔力を得る……あなたやっぱりサーヴァントなの？」

「ふむ、冬木にいる魔術士なら聖杯戦争を知っていて当然か。その通り、我はランサーのサーヴァントとして聖杯戦争に参加している。ということはある魔法陣はサーヴァントを呼び出そうとしたものか」

「ランサーは私が作った魔法陣を見て邪悪な笑みを浮かべた。だがその様子ではサーヴァントは現れなかったようだ。聖杯に

選ばれなかったか、七人目がすでに揃っていたか。いずれにせよ悲運だなあ、少女よ」

突如、ランサーは私を睨み上げる。

「あつ、うつ……」

巨大な殺気と恐怖に尻餅をついてしまう。

殺される――。

明確な死が私の目の前にあった。

「称賛しよう。一端の魔術士ながら、我にここまで抗えたことを」

ランサーはそう言って槍を向けながら私にゆっくりと近づく。

もはや立つ気力すら出ない。

どうあがいたところで私は目の前の男に殺される。

こんなところで死ぬ――？

「安らかに眠れ、哀れな少女よ」

嫌だ私はまだ――。

死にたくない！

その時、唐突に現れた光が私とランサーを遮る

光は私が儀式に失敗したはずの魔法陣から放たれていた。

「――っ！」

私もランサーもいきなりの事に声を出せずにいた。

「あつっ！」

突然手の甲が燃えるように熱くなる。

「これってもしかして……令呪？」

サーヴァントを使役する者、すなわちマスターと呼ばれる者には身

体のどこかに令呪と言われるマスターの証となるものが浮き出てくるのだ。

そして魔法陣から黒い影が現れ、一瞬でランサーの懷に移動する。
「なっ！」

ランサーは驚きで一瞬の隙を作り、影はランサーをそのまま蹴り飛ばす。ランサーは再び壁に激突して倒れた。
そして影は私の側に立ち、深呼吸する。

「ん〜ん。久々のシャバだが、なかなかいい空気じゃねえか」
月明かりが影をゆつくりと照らす。

長い黒髪、整った顔立ち、蒼い鎧、背中には大剣をしょっていて、その姿は古き時代の戦士を思い浮かばせる。

なにより驚いたのは目の前にいる男は私の夢に出てきた男そのものなのだ。

「あつ、あなたは……」

男は私に向かって爽やかな笑みを浮かべた。

「俺はサーヴァント、ライダーだ」

風が吹く。冷たいけど、どこか温かみのある風が。

「問おう、お前が俺のマスターか？」

こうして私とライダーは月明かりが照らす静かな夜に出会ったのだ。
った。

一日目 戦いの始まり（4）（後書き）

詠唱部分追加しました

一日目 戦いの始まり(5)

「私が……マスター……」

失敗したと思ったことが実現するも、さすがにいきなり過ぎて言葉が見つからない。

そんな私を見てライダーは苦笑する。

「まあ、聞くまでもないか。そんなじゃ契約は完了。ではマスター、指示を——っていつでもこれも聞くまでもないか」

そう言ってライダーはランサーを吹っ飛ばした方向を一瞥する。

ランサーは壁から立ち上がり、こちらをつまらなそうに眺めている。「ふむ、よもや一日に二度も壁に放り込まれるとは、生前ですら経験がないぞ」

そう言ってランサーはこちらにゆっくりと近づく。それに呼応するかのようにライダーもゆっくりとランサーに近づいた。

「そうか。あんたみたいなオッサン、壁の中にいたほうがよっぽど似合うぞ」

「減らず口を……」

二人は立ち止まる。

両者の間合いは数メートル、近すぎず遠すぎず。空気がまるで鉄を含まんだかのように重い。

一秒が長く感じる。

——気づいた時には二人はその場にいなかった。

外灯と月明かりが照らす敷地に剣と槍が弾き合う音が激しく響く。

ライダーはその重たそうな大剣を棒のように振り回し、一方のランサーも重たい剣撃をもとめせずに、槍で捌きながら応対する。

「騎乗者風情が、馬も乗らずに剣のみで槍兵に向かうとはあまりにも愚か！」

大剣をかわしたランサーは低い体制から槍をライダーに突き出す。槍の持つ圧倒的なリーチから繰り出す技は、しかしライダーの身体を貫くことなく、すぐさまライダーは剣を振り上げる。

「チィッ——！」

ランサーはそれを槍を地面に突き下げることでかわす。互いに一歩間合いを作り、次の攻撃に移るまで数瞬。

二撃、三撃打ち合い、再び間合いを作る。

互いの額に汗はなく、呼吸に一寸の乱れもない。

一方の私は数分にも満たないその闘いに肩の傷の痛みすら忘れてしまっただけで、見惚れていた。

——これがサーヴァントの闘い。人を超越した英雄たちの闘い。

当人達にとってはわずかな打ち合い。しかしそのわずかは互いの実力を知るには十分だった。

「なんとも憎たらしいな、騎乗者が馬にも乗らず白兵において我と互角とはな」

ライダーを強く睨み上げるランサー。

一方のライダーは心底闘いを楽しむように笑っていた。

「へっ、馬に乗ることだけが騎乗者の仕事じゃねえよ。剣の腕ならセイバー以外に負ける気はないぜ」

確かにライダーの白兵術は剣の英霊であるセイバーにも匹敵するものがあるだろう。

しかし彼らの実力を縮めている最大の要因は互いの武器の相性にあった。

ランサーの槍はまさに巨大な串そのものである。その形状ゆえに『突き』の威力は相当なものが予想される。

しかしそれは同時に『斬る』ということに関しては全くと言っていいほど無力に値する。

事実、ランサーは『斬る』という行為の一切を捨てている。

一方のライダーの武器は自身とほとんど大きさの変わらない大剣。その特製は破壊力しかり、そのリーチにある。

ランサーの槍とライダーの大剣の長さはさほど変わらない。

もしランサーの鋭い突きがかわされれば、ライダーに一気に間合いを詰まれ、大剣をかわす術をなくしてしまう。

ランサーはそれを既に理解しており、だからこそ小出しの攻撃しかできない。

それはライダーももちろん理解していた。

だからこそライダーも大振りの攻撃ができない。少しでも隙を作ればランサーの槍は容赦なくライダーの身体を貫く。

互いに大きな行動ができない。

故に睨み合うこと数瞬、ランサーは何か諦めたかのようにため息をつく。

「ふむ、あまり好ましくないことではあるが仕方あるまいか」

瞬間——空気が変わった。

ただでさえ重い空気がさらに密度を増したかのように重くなる。

「認めてやろう、貴様が『コレ』を使わなければならぬ敵であることを」

ランサーはゆつくりと右手に持っている銀色の串を振り上げる。

「感じる、我が『宝具』を目の当たりにする喜びを！」

宝具——サーヴァントそれぞれが持つ英雄の証にして、最強の武器。一人が持つ宝具の数は定められておらず、その形状も固体であるとは限らない。

共通するのはそれぞれがとてつもない破壊力、もしくは効果をもたらすということ。

もちろんそれ相応のリスクは存在する。

一つは大量の魔力を消費するということ。

そして自分の真名がバレてしまうことだ。

サーヴァントは7つのクラスがあり、サーヴァントは普段クラス名

で呼ばれる。

真名が知られば、そのサーヴァントの弱点を知られてしまうからだ。

つまりサーヴァントが宝具を使うということはその場で決着を着けることと同義。

○

ランサーの強大な魔力が槍一本に集まる。

やはりランサーの宝具はあの槍。

「へっ、テメエがその気なら俺も……」

そう言っただけライダーはふと後ろを振り返る。

彼のマスターは今だに肩の傷を抑えて座っている。

今ここで宝具同士のぶつかり合いになれば周りに甚大な被害をもたらしてしまう。

今ここで自身のマスターまで巻き込むわけにはいかない。

そんな彼の瞬間の躊躇をランサーはすぐに感じ取った。

「はっ、躊躇ったな！ 愚か者め」

ランサーの魔力がさらに増大する。

「これで終いだ。ツエ——」

○

「——そこまでにしる、ランサー」

ランサーの宝具が放たれる直前、それを遮ったのは全く知らない男の声だった。

暗闇から現れた声の主である男は金髪で眼鏡を掛け、白のスーツを着込んでいる。

歳はおそらく三十代。眉間に寄せられたシワが彼の小難しそうな性格を表しているかのようだ。

「誰が勝手にサーヴァント同士の戦闘を許可した？ましてや己が宝具をさらけ出すとは、ここににいる使い魔に己が正体を教えるようなものだぞ」

そういつて男は空に手をかざすと突然小爆発が起こり、おそらく他のマスターの使い魔であろうもののかけらが飛び散る。

「私には聖杯を手に入れる前に果たさなければならぬことがある。それまでお前に余計な魔力を使ってもらっては困るのだよ」

ランサーはため息を吐く。

「申し訳ない。なに我にも気まぐれの一つや二つはあるものさ」

「気まぐれごときに私の計画が潰れるのは困るのだよ、ランサー」
静かな怒号をまとわすランサーのマスター。

ランサーは再びため息について槍をしまう。そしてそのまま立ち去ろうとする。

「おい、待てよ」

ライダーがそう言つて二人を引き止める。

「まさかこのままで終わらす気じゃねえよな」

ライダーが二人に剣を向けた。

眼鏡を抑えながら男が振り返る。

「私は実に君達に興味がなくてね。それに——」
男が視線を私に向ける。

確かにその目に私達に対する興味の色は見えないものの、そんな視線にさえ威圧感を感じる。

「その娘をそのケガで放っておけばそれなりの後遺症を残すぞ」
そう言い残してランサーとそのマスターは私達の前から立ち去った。

「——っあ！」

肩の痛みが再び蘇る。肩の傷から血が滴っている。

痛みで意識が飛んでしまいそうだった。

「大丈夫かマスター？」

ライダーが私のそばに駆け寄り、自分のマントを私の肩に巻いて止血する。

「こりや早く治療しないと本当に後遺症になりそうだ。ここの近くに病院はねえか？」

私は頭を横に振る。

「私の家がいい。桜姉さんならこれぐらい治せると思うから」

私は立ち上がろうとするものの、激痛に体がよろけてしまう。つと思ったらいきなり体軽くなった――。

「――ってええ！ なっ、何やってるのよ！？」

「何って抱えてやってるんだが」

確かに間違っではないけどこれじゃまるで――。

「お姫様だっこじゃない……」

「マスターの家はどこだ？」

「えっ？ えつとあそこ……」

私は自宅の方角を指差す。

「よしっ。マスター、しっかり捕まってるよ」

「ふえ？」

ライダーはその体制のまま大きく跳躍する。

近くにあるビルの屋上に着地し、私の家の方角に向かってビル伝いに跳び回る。

「きれい……」

夜空から見上げる冬木市。

多くの高層ビルが並び立つ新都と古き町並みを残す深山町。

光と闇のコントラストが一つの絵画と成していた。

「マスター、これからの方針についてなんだが」

今更ながらライダーの私への呼び方への違和感を感じた。

「あのライダー、一応私にも衛宮麗奈っていう名前があるんだけど

……」

「そうか、ならこれからはレイナと呼ばせてもらうがそれでいいか？」

私はゆっくり頷く。

「俺も真名は明かしておこう、俺は――」

「あつ！いいよ別に」

私が慌て彼の口を止め、彼は首を傾げる。

「いや、その……私、魔術耐性がまだ低いから、暗示にかかってあなたの正体がバレかねないから……」

「……まあ、レイナが俺を呼び出す時も変に身動きができない形で召喚されたからなあ」

「うう、ごめん」

私もライダーも思わず笑みがこぼれる。

しかし私がライダーの真名を聞かなかったのは他にも理由があった。多分私はライダーの真名を知っている。

そしてそれを聞いたら私は多分ライダーとうまくやっていけない。そんな気がする――。

しばらくして私の屋敷についた。ライダーと私は中庭に着地する。

時刻は深夜を過ぎてないものの、辺りは何もないかのように静まっていた。

「へえ、ここがレイナの家かあ。なかなか大きいじゃねえか」

ライダーは私の家を興味深く眺める。

「母さんには内緒にしなきゃ。ねえライダー、ひとまず霊体化――ってどうしたの？」

ライダーが屋根の方を睨んでいた。

「レイナ、俺の後ろに隠れてろ」

「えっ？」

突如屋根の方から光がこちらに向かって飛んでくる。

ライダーは大剣を取り出し、光をたたき落とす。

「剣？」

光の正体は一本の剣だった。

でもなんで屋根の上から剣が？

「おい！そこにいる奴。不意打ちなんて卑怯な真似してねえで出て

きやがれ」

ライダーがそう言うと同時に屋根から一人の男が飛び降りる。

男は白髪で赤いマントを羽織っていた。どう見ても現代にいる服装には見えない。

「てめえ、サーヴァントか」

相手はライダーの言葉に耳を貸さず、突如その両手から剣が出現する。

「なっ!？」

こつちが驚いてる間に男がこちらに突撃してくる。

ライダーも大剣で応対する。

「テメー、ナニモンだ!？」

「侵入者に名乗る必要などあるまい」

衛宮亭に剣の弾き合う音が鳴り響く。

なぜ私の家にサーヴァントが？

母さん達は？

そんな疑問が一人の人物の登場により、一気に解ける。

「やめなさい、アーチャー!」

家から現れたのは私の母、衛宮凜だった。

母さんの言葉と同時に赤マントの男の動きが止まる。

「凜、知り合いか？」

男が母さんに振り返る。

「アタシの娘よ、そこにいる男は彼女のサーヴァントと見ていいよね」

瞬間——背筋が凍る。

母さんは邪悪な笑みを浮かべながらこちらに近づく。

「か、母さん……?」

私は思わず後ずさる。

「さて、どういうことか説明してもらおうかしら、レ・イ・ナちゃん」

一日目 戦いの始まり（6）

「いいわねえ、わかってるじゃない。正直飲み仲間が少ないから一人でも増えるのは嬉しいことね」

「ふむ、俺の国でも酒は盛んだったが、日本の酒もなかなか奥深い味わいがあるな」

「あつ、わかるう。これ八海山っていう酒でね、新潟の米で造られてるのよ。味の深みが段違いなのよ」

「ほう、米の酒かあ。俺の故郷でも酒は盛んだが、このなんとも言えないコクは極東の国ならではの味か。ふむ、いいものを飲ませてもらって、感謝するぞ、凜殿」

「うーん……」

私が先程ランサーから受けた傷を桜姉さんに治してもらってる横でライダーと母さんは酒でもものすごく盛り上がっていた。

「どうしたの麗奈？飲みたいなら飲ましてあげてもいいわよう」

「教師が自分の娘に酒を勧めない」

ちえー、と母さんは少しむくれておちよこに新たに酒を注ぐ。

私は母さんの酒豪っぷりに呆れざるを得なかった。

○

三十分前——ライダーとアーチャーの戦いを止めに入った母さんと一緒に母さんの部屋までついていく。

母さんの部屋は中庭の離れにある。少し洋風がかった部屋は小綺麗な母さんの性格を表しているかのようだ。

父さんがいた頃は父さんと和室を二人で使っていたけど、父さんが家を出て以来その部屋は私が使っている。

私は床に正座させられ、ライダーはその横の壁に背を預けている。アーチャーは反対側の壁にやはり背を預け、私の前で母さんは腕組

みをしながらかちらを睨み、ドアの近くで桜姉さんが心配そうにこちらを見つめている。

「さて、なぜアンタにサーヴァントがいるのか……その怪我はいつたい何なのか……そもそも魔術を教えてないはずのアンタがなぜ魔術を使えるのか……洗いざらい喋ってもらおうかしら」

再び母さんの表情が邪悪な笑顔に変わる。

少しでもごまかせば本気で死にかねないので私は今まであつたこと——母さんの実家に時々侵入しては魔術の本を読みあさつたこと、それによつて多少の魔術が扱えるようになったこと、先程ランサーに襲われたこと、それをきっかけにライダーを呼び出したことなど全てを話す。

母さんは私の話を静かに聞いていた。

私が話し終わると、母さんはゆっくりと息を吸って――。

「こんのバカむすめええええええ！！！」

母さんの怒号が屋敷中に響く。

「あんだ、逃げてる時になんで私に連絡しなかったのよ！ たまたまサーヴァントが出てきてくれたからいいけど、死んでたかもしれないのよ。だいたい私とあんだのお父さんがどんな想いであんだに魔術を教えなかったと思うてるのよ！」

母さんの言葉はもつともだ。反論する余地すらない。

「ごめんなさい、母さん」

謝る私を見て母さんは安堵のため息を吐き、私を優しく抱きしめる。

「たくっ、こんな怪我して……本当に心配したんだからね」

母さんはそう言って私の傷を優しく撫でる。

「ごめんなさい……」

一段落した後、私は昔から抱いていた疑問を投げてみる。

「ねえ母さん、なんで私に魔術を教えられなかったの？遠坂は元来『根元の渦』に到達することを目的とした家系のはずよ。なら、そ

の末裔である私に魔術を教えないのはあまりにおかしいことじゃない」

母さんもこの質問を予期していたのか少しため息をついてから答える。

「そうね、確かに遠坂家は『根元の渦』に達することを悲願とし、そのために幾度も聖杯戦争に挑んできたわ。その家系の末裔であるあなたに魔術を教えないことは先祖への侮辱に他ならないわね」

「だったらなんで？」

「あんたの父さんがそう決めたからよ」

私は予想していなかった答えに思わず首を傾げる。

「前回の聖杯戦争で聖杯はあんたの父さんのサーヴァント、セイバーによって壊れたからね、聖杯がない以上、遠坂家の悲願は潰えたのよ」

「ちよつと待て」

声をあげたのは私の隣で立っていたライダーだった。

「前回の聖杯戦争で聖杯が壊れたのなら、なぜ今聖杯戦争が始まっているんだ？俺はたしかに聖杯に呼び出されはずだ」

「そのことについてはアタシとアーチャーで調査中。アインツベルンが新たに聖杯を造った形跡もなくて原因不明、おかげで昨日から寝不足よ」

母さんは頭を抱えながら何度目かのため息をつく。

「ともかくあんたのお父さんはあんたに魔術を教えずに一人の普通の人間として育てるつもりだったのよ」

「……っ」

「私は最初反対したけどね。あなたの魔術回路は普通の魔術士よりも明らかに多い。まっとうに育てれば時計塔でも名を馳せるくらいにはできたでしょうね。その証拠に、私の魔術書籍を読んだだけで肉体強化の魔術を扱えている。肉体強化は物質強化と違って、やわな人間の体に直接魔力を注ぎ込むから肉体への負担はあまりにも大きく、力の加減を間違えればたやすく壊れてしまふ。その肉体強化

魔術を本を読んだだけで扱えるんだもの」

正直言うと母さんに褒められてもあまり実感はなかった。私はただ単に魔術に興味を持つて、自分で特訓をしたただけだから。

母さんはライダーの方に顔を向ける。

「ライダーだったけ、あなたに娘を頼んでも大丈夫かしら？」

ライダーは爽やかな笑顔でを浮かべる。

「任してくれ。レイナは俺のマスター、マスターを護るのはサーヴァントとして当たり前のことだからな」

「うん、あなたなら安心して任せられるわね。このとおり、少しやんちゃが過ぎるけどよろしく頼むわね」

「母さん一言余計」

私は苦笑する。

「アーチャーも彼らに手出ししないように」

先程まで沈黙を守っていたアーチャーは、嫌味めいた笑顔を浮かべる。

「了承した。まああくまであつちが手を出さなければの話だが」

アーチャーはまっすぐライダーを睨みつけ、ライダーもアーチャーを睨み返す。

さっきの戦いを見ても思ったけど、多分この二人は相入れないタイプなのかもしれない。

「そうそう、彼はアーチャー。アタシのサーヴァントよ。昨日魔術協会から聖杯が復活したかもしれないって連絡を受けてすぐに召喚したのよ。性格がきついけど、まあ仲良くしてやって」

そういえばアーチャーとは初対面のはずなのに、私はなぜか懐かしさを抱いてしまっている。

この妙な違和感は何なのだろう。

「ああ、もうお腹空いた。そろそろ晩御飯にしましょう。さくらあ、お酒一本開けといてくれるかしら」

母さんの説教が終わり、私も痺れた足を耐えながら立ち上がる。

「酒かあ、俺も少し飲んでいいか？」

ライダーがそう母さんに尋ねると、母さんは嬉しそうに目を輝かせる。

「あら、サーヴァントでもお酒が飲めるの？」

「なに、酒を飲んだところで魔力に影響は起きないさ」

「あらそう。桜、酒棚の奥にある八海山引つ張り出せる？」

「大丈夫ですよ姉さん、今から取りに行きます」

桜姉さんはそう言つて笑顔で酒棚に向かう。

「ようし、今日は飲むわよう！」

○

そして今この現状に至る。

目の前ではなぜか宴会が繰り広げられ、私はそれにただ呆れていた。

「はい、治療終了。あとはしばらく派手な運動さえしなければ治るわ」

桜姉さんが満面の笑みで告げる。

肩の痛みは完全になくなってはいないけど、ある程度動かせるぐらいには治っている。

「ありがとう桜姉さん。でも桜姉さんも魔術士だったてのは驚いたなあ」

桜姉さんは少し苦笑する。

「ふふ、私もいろいろあつたからねえ……」

「そういえば藤村先生は？」

いつも晩御飯を食べに来る藤村先生がいないことに今更ながら気づく。

「藤村先生は健悟さんが帰ってきたから今日は家でゆっくりするつて言つてたわ」

健悟のおじさんは仕事の都合上滅多に家にいないためか、彼が家にいる場合は藤村先生も彼とゆっくり家で過ごすのだ。

「あつ、そうそう麗奈。明日は学校休むわよ」

突然母さんが言い出す。

「なんでさ？」

「聖杯戦争のことを知ってるなら毎回聖堂教会の方から監督役が派遣されるのは知ってるわよね。明日はそいつに会いに行くのよ」

聖杯戦争にはいくつかのルールがある。それを監視する役目のための監督役。

聖杯戦争による周りへの被害を最小限に抑えるため、彼らは聖堂教会という組織から派遣されるのだ。

「とりあえず少しでも情報を得たいからね。今回の聖杯戦争は今までは明らかに何かが違う。監督役になら少しは手掛かりを掴めるでしょ。あんたも聞いという損はないわよ。学校の方は私がなんとかするから」

確かに情報は多いことに越したことはない。私は特に断る理由もないので頷くことにした。

「じゃあ私もう寝るね、今日はもう疲れた」

今日一日にあれだけのことがあったのだ。体力には自信のある私でもさすがにつらいものがある。

多分今日で寿命が二、三年は縮んだ自信はある。

私はそのまま自身の和室へと向かう。襖を開け、いつも放置している布団に倒れる。

こんなに疲れたのは何ヶ月ぶりだろう。

そういえば久しく新都の裏通りにも行っていないなあ。今度久しぶりに貯まったストレスぶちまけに行こうかしら——なんて……。

「へえ、ここがレイナの部屋か。女とは思えぬ散らかりようだな」いきなりの声に私は思わず飛び上がる。

「ラ、ライダー！？」

開けっ放しの襖に黒髪的美青年が呆れた表情で立っていた。

「なっ、何であんたがここにいるのよ！？」

「なにつて、他のサーヴァントがいつ襲撃にくるかわからないからな。レイナにゆつくり休んでもらうために身辺警護にきたんだが…

……」

確かにライダーの言っていることはもつともだった。他のサーヴァントがいつどこで襲いかかったとしてもまったく不思議ではない。

「でも、曲がりなりにも私とあなたは男と女よ！それが一緒の部屋つてのもいろいろ問題があるじゃない……」

ライダーは納得いかない顔で首を傾げる。

「レイナの言っていることはようわからんなあ。それにしてもなるほど、凜殿に聞いた通り、本がこれほどあるとは……」

私の部屋の何割かを占める本の数々にライダーは興味を抱いた。

私は少しでも興味のあった本はすぐに買って読み尽くす癖がある。

そのため、私の部屋には大型の本棚があり、そこに入りきれない本が床に山を作っている。

「俺も生前はいくつかの蔵書を読み漁っていたっけなあ」

そう言つてライダーは楽しげに本棚を眺めている。

「おっ！これは……」

彼は本棚から一冊の本を取り出す。

「あつ……」

ライダーが手にした本を見た瞬間、私は思わず声を漏らしてしまう。

「そういえばまだ真名を名乗っていなかったな。俺は『孫策^{そんさく}』この本に載っている通り、三国時代の英雄だ」

そう言つてライダーは『三国志』と書かれた本を私に見せる。

私自身——気付かぬ内にライダーの手から本を奪い取っていた。

私のいきなりの行動にライダーもわずかながら動揺する。

「レ、レイナ……？」

「私を警護するなら隣の部屋で充分でしょう。さっさと行つて」
自分でも驚くほど冷ややかな声で告げる。

「どうしたんだいきなり？何か俺が阻喪な行いをしたなら言うてく

——」

「うるさい！さっさと行きなさいよ！」

手の甲が熱くなる。

「レイナ、まさか令呪を！」

令呪——サーヴァントの証であると同時にサーヴァントをどんな命令にも三回まで従わせる絶対命令権。

聖杯戦争における切り札の令呪の一部私の手から欠けた。

さらなる疲労がのしかかり、私の呼吸が荒くなる。

「……っ！」

ライダーは渋々隣の部屋に通じる襖に向かう。

「レイナ……なぜこんなことに令呪を？」

私は彼の質問を無言で返す。

ライダーは諦めたように目を伏せて隣の部屋に入った。

私は本を握ったまま部屋の電気を消し、布団の中に入る。

「先輩……」

本を抱きしめた私の頬にはいつのまにか涙が流れていた。

F a t e / a f t e r

F i r s t d a y s f i n i s h a n d

g o t o s e c o n d d a y s .

一日目 戦いの始まり（6）（後書き）

ということまで一日目終了です

ここまでのいかがでしたでしょうか？

これを書き始めたのがもう3年前ぐらいになるので、掲載の際に文章の一部を修正して、前よりは読めるようにはなったかと思います

いやあ、改めて昔の文章読むといろいろと酷いwww

現在は五日目まで進んでますが、そこまではすぐに載せるようにはしておきます

—— 現陣営状況

衛宮陣営

- ・衛宮麗奈&ライダー（孫策）
- ・衛宮凜&アーチャー

敵陣営

- ・????&ランサー

二日目　ありえない聖杯戦争（1）

——夢を見る。昨日とは違う夢。

もう何度も見た、忘れようとする度にでてくる映像。

もう見たくないと願いながらも夢はそんな希望^{ゆめ}に応えてくれない。

降り続ける雨。何も知らなかった私。

迎え入れてくれたのは、雨水と同化しようとする紅い液体と憧れた人のカタチをした容レ物——。

○

目覚めは最悪。吐き気と頭痛のおまけ付き。

正直慣れてはいる。

あの夢を見る度に起きていたことだ。今さら慌てるほどのことでもない。

桜姉さんから朝食の準備ができたと報告がきたのでとりあえず布団を片付ける。

その過程、私は隣の部屋の襖ごしに声をかける。

「ライダー、入ってきていいわよ」

襖を開けたライダーは、しかし中に入りはしない。

「昨日の令呪の命令により、俺はこの部屋に入れない」

ライダーは特になんの感情もでない表情でそう告げる。

「昨日のことについては謝るわ。あんたは間違ったことをしたわけでもないからね。ほら元気出して、なんか調子狂うじゃない」

私がそう言つとライダーは困った表情を浮かべる。

「いや、俺はレイナの指示に従つてただだし、謝られることなんかないぞ」

ライダーの慌てぶりに私は思わず苦笑する。

「あつ、そつだ。そろそろ聖杯戦争に全く関係ない人が来るから霊

体化してもらえるかな」

私がそういうと、ライダーは突如冷やかな表情になる。

「すまないがたとえ主の命であろうと、それには従えない」

予想していなかった答えに私は驚く。

「えっ、何でよ？」

「もし、どうしても俺を霊体化させたいのなら令呪を使ってくれ、いつになく真剣にそう告げるライダー。」

私は右手の甲を見つめる。

サーヴァントにどんな指示にも従わせる絶対命令権。

三回しか使えない令呪の一部は既に欠けている。

ただでさえ昨日馬鹿な理由で令呪を使ったのだ。これ以上くだらないことで切り札を使用するわけにもいかない。

「わかったわ、昨日のこともあるし、多少のわがまは聞いてあげる。ただし、あまり怪しまれないように振る舞ってね」

ライダーは申し訳なさそうな表情で「すまない」と告げる。

確かに令呪を使いたくないというのもあるが、多分私はこいつとあまり仲を悪くしたくないのもあるのかもしれない。

「はい、シリアスな雰囲気はもう終わり。さつさと朝飯食べに行きましょう」

私は笑顔でそう告げ、ライダーもそれを笑顔で返す。

○

「むむ、桜また腕上げたわね」

「少しダシを変えたんですよ。褒めてもらえて嬉しいですよ」

「うむ、昨日のもそうだが桜殿の料理には感嘆を覚える」

「当たり前よ、桜姉さんは父さんの一番弟子よ。特に洋食に関しては何となく父さん以上ね。母さんも中華に関しては一番上手いし」

「あんたはその料理の上手い父親と母親の遺伝子を見事に受け継がなかったけどね」

「うつ、母さんそれは言わない約束……」

「桜ちゃん！この鳥の煮付け、すっごくおいしいわあ！」

「うん、僕も桜ちゃんの料理が食べれて嬉しいよ」

「ありがとうございます、藤村先生に健吾さん」

「あつ、そうそう凜ちゃん」

「どうしました藤村先生？」

「この横で爽やかに朝食を食べている長髪の青年は誰じゃあああ！」

はい、藤村先生が朝食食べに部屋に来てから、約四分十三秒。見事なノリツツコミありがとうございました。

「紹介が遅れましたね、彼は私の親戚で冬木の大学に入るために居候してるんです」

「どうも、ライダーと言います。藤村殿に関しては凜殿からよく聞かされていますよ」

キラキラ――。

ライダーの爽やかな笑顔は藤村先生の心も見事にキャッチしたようだ。

「で、でも凜ちゃん、この家には麗奈ちゃんという可憐な女子高生もいるわけだし、あまり若い男の人を泊めるのは……」

「うん、まずないから」

間髪入れない私のツツコミに藤村先生は戸惑う。

「こうなったら……」

おもむろに立ち上がる藤村先生。

「あなたがこの家に相応しいか勝負よ」

猛々しくライダーを指差すタイガー。

対するライダーは藤村先生の手を優しく掴む。

「ごめんなさい、私はあなたのような『美しい』人と戦うことなん

てできません」

ライダー選手、タイガー選手に対して見事なクロスカウンター。

「ななな、うっ、美しいって……」

「しかし、私には衛宮麗奈を守らなければならないという使命があります。どうかあなたの泉のように広い心で受け入れてもらえないでしょうか？」

ライダー選手、間髪入れずのサイドブロー。

「まっ、まあ、考えてやらないわけでもないわよ」

思わずよろめくタイガー選手。

「ありがとうございます。あなたのような美しきお方に出会えてよかった」

ライダーはそのまま握りしめた手に口づけをする。

ライダー選手、とどめのアッパーでKO勝ち。

藤村先生は壊れて頭から湯気が出ている。というかライダー、あんなキヤラ変わりすぎ。

「いやあ、面白い人が来てさらに賑やかになりそうだね、麗奈ちゃん」

健吾さん、そこは怒っていいですよ。

「あら、じゃあ今日は二人とも休むんだ」

朝食後、母さんは私と一緒に学校を休むことを藤村先生に伝える。

「はい、理事長の方には既に伝えてあるので、そこらへんはご心配なく」

「あらそう、あんまり危ないことに巻き込まれるんじゃないわよ」

そう言っただけ藤村先生は衛宮邸をあとにする。

夫である健吾さんは既に自身の仕事場に向かっていった。

藤村先生がいきなり休む私たちに何の不信感も持たなかったのは、母さんへの信頼の証ゆえのものであるう。

「さて、今から行くから麗奈も支度しなさい」

今日は今回の聖杯戦争の情報を掴むために教会行くことになってい

る。

それなりに歩くとはいえ特に用意するのもないので手っ取り早く着替えて外で母さんを待つことにする。

「ふうむ……」

外には既にライダーが出ていて、玄関のそばに置いてあるバイクに興味深く眺めていた。

ハーレーダビットソンVRS C A W。重厚感の漂う私のバイクだ。

「どうしたの、私のバイク睨んで？」

「えっ……？あ、いやなんでもないぞ」

ライダーはこちらに気付いてなかったのか、慌てたそぶりを見せる。「もしかして乗りたいの？」

「い、いや、別にそんなことは……」

どう考えても乗りたそうである。

私はため息をついてポケットからバイクのキーを取り出し、ライダーに投げ渡す。

「レイナ？」

「勘違いしないでね、昨日の詫びも含めてよ。別に使ってないし、ライダーのあなたなら乗りこなせるでしょ」

キーを受け取ったライダーは複雑な顔もちをする。

「しかしこれから教会に行くのだから。サーヴァントである俺がマスターの側にいないのはいくらなんでも……」

「別に大丈夫よ、母さんとそのサーヴァントのアーチャーもいるし、それに私自身もそんなやわじゃないわ」

ライダーはしばらく私の顔を見つめるが何か悟ったような笑顔を浮かべる。

「感謝する、レイナ」

そう言ってライダーは私のバイクにまたがり、けたたましいエンジン音を鳴らしながら走り去った。

マニュアルなしにぶつつけで乗れるのはライダーたるゆえんだろう。「いいの？あのバイク、あんたの大切な人の『形見』なんですよ」

「母さん……」

母さんはすでに準備を終え、一部始終を見ていたようだ。姿は見えないけど母さんの隣にアーチャーの気配もする。

「あんた今までのバイク、アタシにすら触らせなかったじゃない」

「いやまあ、ライダーなら様になるかな、なんて……」

そう——あのバイクは元々私ではない。

今はもういない、あの人の形見。

私の罪の証——。

「ほら、早く行こう」

これ以上母さんに尋問されないように先を歩く私。

なぜライダーにバイクを貸したか私は自覚している。

だからこそ、去り際のライダーの笑顔が私の心に突き刺さる。

○

「あの子、多分ライダーを遠ざけるためにバイクを貸したわね」

凜が小声で姿の見えない彼女のサーヴァントに話し掛ける。

「それにあのライダーの表情、どことなく悲しみが混じってた。多分麗奈の気持ちをわかったうえでバイクに乗ったんだと思うわ」

「なぜまたそんなことを。私がいるとはいえ、二人を守りきれるとは限らんぞ」

姿を消しているアーチャーも思念を送ることによって凜に対応する。

「さあね、なんかトラブルが起きてあまりいい関係になっていないのかもね」

『ふむ……』

「なんにしる前途多難ね……」

『そうだな。気付いたら他のサーヴァントが出てきて殺された——
なんてことにもなりかねない』

麗奈に気付かれないように凜はそつとため息をつく。
しばしの無言。

「考えてみればアンタの娘でもあるのよね、あの子……」
アーチャーの正体は凜の夫、士朗の一つの可能性の未来。
正義の味方に憧れ、その末に絶望した姿。

そんな自分から逃れるために前回の聖杯戦争でアーチャーは士朗の命を奪おうとした。

しかし、士朗の硬い意志の前に敗れ去った。

『私の娘か……』

アーチャーは遠くを見るような目で麗奈を見つめる。

「あの愚か者め……家族を捨て、オレと同じ道を歩むつもりか？」
二人に聞こえない小さな声で、アーチャーは自分が認めた一人の青年を罵倒した。

二日目　ありえない聖杯戦争（2）

——教会では独特の静寂なる空気が漂う。

建築から数十年経った今でも内装がほとんど崩れないのはバックにある組織の支援ゆえのものであるう。

前回の聖杯戦争で教会自体がほぼ崩れたものの、今ではほとんど元通りに戻っていた。

その教会の中に二人の人物がいる。

一人は黒い礼装に身を包み、長い白髪をたなびかせる不思議な雰囲気を持つ少女。

もう一人はジーパンにTシャツとラフな服装の長身の女性。

「私が語れるのは以上です。あなたのご友人については私は存じえません」

少女の淡々とした言葉に女性は苦笑を浮かべる。

「ううん、やっぱ教会の人間でもわからへんかあ……まあ今回の聖杯戦争の概要がわかっただけでもええか」

そう言う女性立ちは去ろうとする。

寸前、思い出したかのように少女に振り返る。

「そや、士郎はんに会おうたら、ワイのことよろしく言うと言ってや」
少女はいぶかしむ。

「あの情犬のお知り合いですか？」

その質問に女性は答えに困ったのか、頭をポリポリとかく。

「ううん、実際にワイも会おうとは一度だけやけど……」

言いながら扉に手をかける。

「まあ、いわゆる腐れ縁ってやつやな」

○

正直言うと教会に入るのは私が認識しているなかでも今回が初めて

だ。

宗教関連の本を読むことはあるものの、神などはあまり信じない。用もなければ寄ることのない場所だ。

重く神聖なる雰囲気は教会ならではの威厳を感じさせる。

「ふう……あんまり乗り気じゃないけど、行きますか」

母さんがそう言うて先に歩きだす。母さんもこの場所が苦手なようだ。

教会の扉の前まで来たところで突如扉が開く。

出てきたのはラフな服装の長身の女性だ。

先客みたいだけど帰るところなのか、こちらに一礼して通り過ぎる。

「今のもマスター？」

私の質問に母さんは女性を見つめながら答える。

「一応サーヴァントの気配は感じられないわね。まあ少なくとも今襲うって感じじゃないし大丈夫なんじゃない」

そう言うて母さんは教会に入り、私もあとに続く。

教会内の静寂で重い空気が私たちを迎える。まるで外の世界から断絶された別世界に入ったかのようなうだ。

教会の中心に一人の少女が立っていた。

黒い礼装で身を包み、無表情で長い白髪をたなびかせるその姿はお伽話に出て来る幻想的な少女を思わせる。

その少女を母さんは驚愕の表情で見つめていた。

「やはり貴方も今回の聖杯戦争に参加していたんですね、衛宮凜」

「一応あなたとははじめましてになるのかしら？、カレン・オルテンシア」

母さんの言葉に黒い礼装の少女は表情を崩さずに返す。

「まあそういうことになりますね。あの事件は私も存じていますが、あの時の私は情報としての存在でしたから。しかし私としたことが不可抗力とはいえ、あんな情犬と体と体を――」

「はい、ストップ。言いたいことわかったから、それよりあなたが今回の聖杯戦争の監督と見ていいのかしら？」

母さんが慌てて言い遮ったことが不満なのか、少女はため息を吐く
「そうですね。まあ多少ニュアンスが違いますが、それについても
今から説明いたしましょう。そのために来たのでしょうか？現冬木の
管理人、衛宮凜」

「まず簡単な説明から入りますが我々教会としては今回の戦いは聖
杯戦争とは同一のものとしては扱っていません。従来の聖杯戦争は
既に終わったはずなのです。前回の聖杯は完全に破棄された以上、
次の聖杯が生成されるのは早くておよそ六十年後。にも関わらず、
冬木市は巨大な魔力に包まれ、新たなサーヴァントとマスターがい
る。我々教会もこの異常事態にすぐに気付き、調査を開始しました。
我々はまず、おそらく今回の事態に関わっているであろう御三家を
調査することにしました。とはいえ、間桐は既に滅び、聖杯を手に入
れることに固執した遠坂もその目的を失い、貴方自身その名を捨て
た。そして我々が調査する対象となったのが――」

「――アインツベルン」

母さんの言葉にカレンさんは頷く。

聖杯戦争御三家――。

遠坂、間桐、アインツベルン、聖杯を手に入れるために手を組んだ
三つの魔術師の家系。

しかし、間桐は頭首の臓硯が死亡し、孫である慎二と桜姉さんはそ
れを引き継かず、間桐家は滅んだ。

聖杯を手に入れることを究極の目的とした遠坂家は母さんの代で同
じく滅んだ。

そしてもう一つの家系、アインツベルンは滅んではないけど聖杯
が造れない以上、その動きは全くついていいほど見なくなった。

「今回の戦いにはアインツベルンが関わっているってこと？」

母さんの言葉にカレンさんは首を横に振る。

「全く関わりがないわけではありません。しかし、今回の戦いに直
接的に参加しているわけではないようです」

「どついつこと?」

「今回の聖杯を造りだしたのはアインツベルンではなく、全くの第三者なのです」

母さんも私もその言葉に驚愕する。

アインツベルンは聖杯の器を造ることに長けた一族だ。

その器を完成するために彼らはあらゆる手段をもって聖杯戦争に参加してきた。

私の祖父である衛宮切嗣もアインツベルンに雇われ、聖杯戦争に参加した魔術師だった。

「いったいその第三者って何者よ?」

「アインツベルンに問い質したところ、今の事件が起きる数ヶ月前にアインツベルン家に一人の男が訪れました。その男は仮面と漆黒のマントに覆われ、正体は不明です。男はアインツベルンの頭首に聖杯の器の作り方を教わりに来ました。しかし、元来他者を嫌ったアインツベルン一族が見ず知らずの男にそれを伝えるはずがありません。しかし、男は何度もアインツベルン家を訪問しました。それが数ヶ月にもわたり、アインツベルンもそのしつこさに折れ、その男に聖杯の器の造り方を伝授しました。そして数日後、その男は彼らの目の前で聖杯を作りだし、さらにサーヴァント『バーサーカー』の召喚に成功しました」

「——っ!」

「この事実にあインツベルンも彼に期待を委ねることにしたようです。しかし仮面の男とバーサーカーの正体、そして聖杯の器の場所については彼ら自身聞かされてないのか、我々もわからずじまいです。この聖杯は大元である大聖——いえ、この冬木の霊脈の力なしで造り上げたもので本来の聖杯とは力の在り方が違うようです。我々はこの聖杯を『擬似聖杯』と呼ぶことにしました」

「つまり今回の戦いは従来の聖杯戦争とは全く違う『擬似聖杯戦争』

ってことね」

カレンさんは頷く。

「我々が掴んだ情報については以上です。本来ならマスターはサーヴァントの召喚時、そのことを監督である私に伝える義務がありますが、今回はその必要がないので他のサーヴァントとマスターについては我々も知り得ません。私自身、今回の事件を監視するために、緊急で派遣された監督に過ぎないのでから」

母さんは少し考え込み、多少納得した顔を浮かべる。

「うん、それだけわかれば十分。黒幕がバーサーカーのマスターならそいつを倒して取っ捕まえるだけね。ありがとうカレン。このお礼はいつか返すわ」

そう言って立ち上がる母さんをカレンさんが引き止め、なぜか私の方に振り向く。

「ここからは凜にだけ話しておきたいことなので衛宮麗奈は席をはずしてもらえると助かるのですが……」

私は少しきよんとする。

「どうということカレン？」

母さんが訝しながら問うもカレンさんは沈黙する。

「いいよ、母さん。私先帰ってる」

私はそう言って立ち上がる。

「ちよっと、せめてアーチャーを連れて行きなさい」

「できればアーチャーにもこの場に残ってもらえると助かるのですが」

カレンさんの言葉に怒り、母さんは彼女を睨みつける。

「大丈夫よ母さん、まっすぐ家に帰るだけだし、いざとなったなら令呪でライダーを呼ぶから」

私はそう言って母さんが止めるのを無視して教会を後にした。

○

「たくつ、あのバカ娘」

呆れ果てる凜にカレンはクスクスと笑う。

「いい娘じゃないですか。情犬と強欲女の間にも生まれたわりにはしつかりしていて」

「あなたのその口も相変わらずね。もう慣れてるからいいけど」

「あら、初対面なのに？」

カレンの茶化しを凜は無視し、真剣な表情を浮かべる。

「でっ、アタシの娘を追い出してまで話したいことって何よ？」

凜の態度にカレンも真剣な表情に変わる。

「そうだな、俺をこの場に残した意味についても聞きたいところだ」
そう言つてアーチャーは実体化する。

カレンは静かに小さな口を開く。

「今から話すことはあなたの娘には少し酷だと思い、彼女には退散させてもらいました」

教会内にカレンの声は透き通るように響く。それ故に彼女の言葉の重さが増す感覚を感じる。

「実を言うと先程の仮面の男の正体については多少なり手掛かりがあります」

「手掛かり？」

訝しむ凜にカレンは静かに口を開く。

「我々教会は仮面の男の正体として『衛宮士朗』の行方を調査しています」

○

教会を出て外の空気を体に取り込む。

昔、父さんが教会の空気は嫌いと言つてたけどなるほど、あの教会は何か神聖とは違ったある種の嫌悪感を感じさせる空気に満たされている。

先に出るのは多少気が引けたが、きつかけとなったカレンさんには

感謝している。

「でも、私あの人嫌いかも」

あの人の瞳にはどこか人形めいた虚ろさがある。その虚ろさに思わず不気味なものを感じてしまった。

「おつ、さっきの嬢ちゃんやないか」

突如声をかけたのは先程教会の扉の前ですれ違った長身の女性だった。

「いやあ、なんとなくあんたらのことが気になって、ちょい待ち伏せさせてもらったわ」

明るい声でものすごいことを言う人だ。

「気になったって何がですか？」

「ああ、さっきの女性もそやけど何で二人とも令呪らしきモンはあるのにサーヴァントの気配は一つだけやのかなって思ってたな」

女性の言葉に私は思わず後ずさる。彼女の笑顔が不気味に感じてくる。

「あなたいったい何者？」

女性はきよとんした表情になる。

「ああ、ワイ？」

突如、女性の背後に黒い影らしきものが現れる。

それは明らかにこの世ものではない気配を感じさせた。

「ワイの名前は千堂襖馬^{せんどうあづま}。今回の擬似聖杯戦争の参加者で後ろにいる『アサシン』のマスターや」

二日目　ありえない聖杯戦争（3）

関西弁を喋る女性——千堂襖馬は黒い影を後ろに控えながら、私を品定めするように見つめる。

「どうもサーヴァントの気配が全く感じられへんけど、もしかしてサーヴァント連れてへんのちゃう？」

千堂の底が見えない笑顔に寒気を感じる。

「……っ」

私は沈黙は貫く。

少しでも口を割った瞬間、この人のサーヴァントは私を殺しにかかる。そうなれば私に抵抗する手段などありえない。

どうすればここから逃げ出せるか。静かな沈黙の中、必死に考えるも時間をただ無駄にするだけだった。

「だめやでえ、マスターなんやからちゃんとサーヴァントを横に置かんと……」

しばらくの沈黙の後、千堂が口を開く。

その表情は恐怖すら感じさせるほど穏やかだ。

「——ワイみたいな性悪マスターに殺されるで」

そう言った瞬間、黒い影が一瞬で私の目の前に降り——。

○

「どういうことか説明してもらおうかしら」

凜の顔は険しくカレンを睨みつける。

カレンは気にせずコーヒーに砂糖をスプーン十杯ぐらいとミルクをコーヒーより多めに入れて、それを優雅に口に啜る。

「あなたも飲む？」

「遠慮するわ。そんなの飲んだら甘さで頭イカれそう」

カレンは少し残念そうな表情でコーヒーを再び啜る。落ち着いた表情のままカレンはゆっくりと口を開く。

「私たちの調査の結果、アインツベルンは仮面の男の正体を何度も尋ねたらしいのですが、男は全く口を開こうとしなかったらしいです。しかしバーサーカー召喚後、彼が去り際に自分が『衛宮士朗』と名乗ったらしいですよ」

凜はつとめて冷静になるものの、瞳には静かな怒りが宿る。

「あなたたちはそれを信じてるの？」

カレンは顔色を変えずに続ける。

「もちろん嘘だとは思っています。ミステリーでわざわざ自分で正体を告げる犯人なんていません。おそらく私たちを攪乱するためでしょう」

カレンは飲み終えたコーヒーをゆっくりとテーブルに置く。

「とはいえ、彼が衛宮士朗の名を名乗った以上、衛宮士朗もこの戦いに少なからず関わっていると判断しました」

「……っ」

「衛宮士朗はそれほど名の渡った魔術士ではありません。前回の聖杯戦争の生き残りであり、元遠坂のあなたの夫として一部の魔術士に知られている程度です。わざわざそんな彼の名をかたつたぐらいですからおそらく仮面の男と関わりがあるとは思われます」

「つまり、数少ない手掛かりとして衛宮士朗を捕まえるのが今のあなたの目的とみなしていいのかしら？」

凜の声にはやり場のない怒りが混じっている。

当たり前だ。自分の愛する夫が事件の容疑者として捜査されてるのだ。凜にとってはこれ以上ない屈辱である。

「理解しろとは言いません。この事態は我々教会にとってもあまりにも異常。その異常を終わらすためなら、我々はどんな手段をもちいしません」

「その手段とやらの私を利用するというのも含まれているのかな？」

横から会話に入っただのはアーチャーだった。先程から会話を聞いていたアーチャーは呆れ顔を浮かべている。

「アーチャー、前回の聖杯戦争とどこか違う感じがありませんか？例えば前回の記憶が残っていたり」

「……っ」

「やはり。あなたの口調からだいたい想像できていました。普通、サーヴァントは聖杯戦争が終われば、その戦いの記憶は消滅します。前回のセイバーのような例外を除いて。なのにあなたには記憶がある。これもおそらく擬似聖杯による事象のズレというものでしょう。そして、衛宮士郎の可能性の存在であるあなたが再び呼ばれた。これが偶然だと思いますか？」

カレンの言葉にアーチャーはやれやれと首を振る。

「そんなことはどうでもいい。しかし、あの時の戦いで私はあの男の可能性を見いだした。その結果がこれだ。やはりあの時、俺は奴を殺すべきだったんだ」

「アーチャー！」

凜がアーチャーを睨みつける。

「奴がお前と娘を捨てたのは事実だろ」

「うっ……」

凜は思わず口ごもる。

「殺すのは構いませんが、その前にこちらに情報が入るために喋れるように生け捕りにしてもらわないと困りますね」

「ふん、知ったことではないよ」

「あああああもおおおお！いい加減にしなさい！」

教会内に凜の怒号が響き渡る。

「いい、アーチャー、あいつをひっぱたくのはアタシの役目よ。手出しは無用だからね！」

アーチャーとカレンは凜の勢いに啞然とする。

「たくつ、二人してアタシの夫を悪者扱いして……いいわよ、アイツの無実はアタシが証明してやるわよ！カレン、その仮面の男はバーサーカーのマスターでいいのよね？」

「……まあ、一応そう聞いていますが」

凜はそれを聞くと決意の表情を浮かべる。

「オツケー、それがわかれば十分。行くわよ、アーチャー」

そう言つてコートを羽織り、出口へ向かう。

「仮面の男を倒すつもりですか？凜」

カレンの問いに凜は振り返る。

「当たり前じゃない。アタシの夫の名前を勝手に使つたんだもの。ぶち殺すだけじゃ済ましてやらないんだから」

○

カキンと弾く音が聞こえる。同時にけたたましいエンジン音が鳴り響いている。

殺される恐怖で閉じていた瞳をゆっくり開く。

目の前にはバイクにまたがり、大剣を構えたライダーがアサシンの前に立ちはだかっていた。

「ラ、ライダー！？」

予想していなかったライダーの出現に私は戸惑っていた。

アサシンは攻撃を防がれるとすぐさま千堂の傍まで降り立つ。

千堂の表情は変わらず笑みを浮かべている。

動揺が見えない。まるでライダーが助けに来るのを予測していたかのように。

「今の攻撃、俺をあぶり出すためか？」

たしかにアサシンのサーヴァントならわざわざこんな回りくどいことしなくても、気配を消して私自身が気付く間もなく殺せるはず。ライダーの問いに千堂は感心しながら答える。

「あつたりい。あんさんが彼女を横から見ていたのはすぐにわかつ

たさかい。せやからわざわざ派手に登場したわけや」

じゃあライダーはでかけてたと見せかけてずっと私の跡についてた
ってこと？

「ほな観客も増えたし、そろそろ行こか」

ライダーは臨戦体制に入る。

そしてアサシンが一步前に出た瞬間――。

「ふとんがふつとんだ」

「えっ……」

あまりの予想外すぎるアサシンの言葉に私もライダーも呆然となる。

「まるつきりすべつとるやんけ！」

千堂がアサシンの頭をおもいつきり叩く。

「ワイが教えたものはそんなちやうやろ

も、申し訳ありません」

「だがワイは許す、許すで。お笑いの道は厳しいんや。せやけどそ
の道を越えた先に真の笑いが待ってるんやで」

そう言つて二人は夕日を見上げる。まだ昼なので夕日はないが。

そしておもむろに手の平を出す千堂。

「ほい、見物料千円」

「つて、金取るんかい！」

私は耐え切れずツツコンでしまう。

「おつ、ええな今のツツコミ。一緒にお笑い目指せへん？」

「目指さない」

私の反応に千堂は大笑いしている。

こんな奴らにさっきまで襲われていたと思うと自分が情けなくなっ
てしまう。

「いやあすまへん。冗談や、冗談」

そう言つて千堂は咳ばらいする。

「嬢ちゃん、さっきはすまへんな。あんたのサーヴァントに興味が

あつたさかいに。あんた自身を襲えばサーヴァントを釣れる思うてな。いやあ不器用さかいに、こういうやり方しか思いつかへんのや。勘忍な」

手を合わせて謝るポーズをとる千堂。

私の先程までの恐怖や怒りもバカバカしくなつてどこかに消えた。

「しかし、なんで私のサーヴァントに興味を？」

「名前」

「えっ？」

「名前教えてや。ワイはさつき名乗ったから次はそっちの番やろ？」
いきなりの問い返しに少し戸惑うが一応名を名乗る。

「衛宮麗奈です……」

私の名を聞いた千堂さんは驚いた表情を見せる。

「衛宮……まさか、士朗はんの娘か？」

「父さんを知ってるんですか！？」

彼女が口にした名に、思わず身を乗り出してしまう。

「まあ、ちよつとした腐れ縁や。せやけど衛宮はんの娘か……」

千堂さんはいきなり考え込み、何か閃いたのか手をポンと叩く。

「うん決めた。なあ、お二人さん。明日の夜、サーヴァント同士のガチバトルせえへん？」

突然の千堂さんの提案に私とライダーも驚きを隠せない。

「うちのアサシンは暗殺者のくせに正面での喧嘩が好きなんや。こいつの望みは互いに小細工なしの闘いや」

アサシンの全身黒い布に覆われたその姿からは想像できない。

「っていうても聖杯戦争のルール上、そんな闘いはまず望めへん。せやからワイがサーヴァントとマスターを選別してやろつかな思ってたんやけど——」

千堂さんの視線がライダーの方に向く。

「ワイ、あんたのごつつファンになったさかい。あんたならワイのアサシンと正々堂々とやりあえるん思うんやけど……」

千堂さんはアサシンの方に振り向く。

「ワイはある目的のためにこいつを酷使していかなきゃあかん。だからせめて、こいつの望んでいることを叶えたいんよ。だから頼めへんかな？」

千堂さんが言いたいことはわからなくもない。

しかし、相手は直接戦闘が苦手なあのアサシン。これが罠である可能性が高い以上、ここは断るべきである。

「申し訳ないですが、私は――」

「俺は構わないぜ」

ライダーが私の言葉を遮った。

千堂さんは彼の答えに満足げな笑みを浮かべる。

「ほんまか！嬉しいいわ。じゃあ一般人に迷惑かけとぅないから明日の深夜零時に新都近くの公園でええか？」

「おう、大丈夫だ」

私を置いてけぼりにして勝手に話が進む。

「ほな、ワイはこれから用事があるからまた明日。待つとるから絶対来てや」

そう言つて千堂さんとアサシンはその場から立ち去った。

いきなりいろんなことがありすぎて、しばらく混乱する思考を整理する。

「ライダー、あんた――」

「行くぞ、レイナ」

再び私の言葉を遮るライダー。

「行くつてどこに？」

私が聞き返すとライダーは爽やかな笑みを浮かべた。

「新都」

○

「いやあ、まさかこんなところで衛宮はんの娘に会えるなんてビックリやわ。っていうことはさっき一緒にあった女性は衛宮はんの嫁か

あ
」

一人納得する襖馬。

その横には霊体化したアサシンが着いている。

『よろしかったのですか？あなたは探し人に集中したほうがいいのでは』

「っっていうても手掛かりなきやどうしようもあらへんやろ。まっ、これも一種の息抜きや。それにあのライダーと闘いたいゆうたのはあんたやんけ」

『……かたじけない』

「いいっていいって。そんなかりみつちり働いてもらうで」

『御意に』

襖馬はジープンのポケットから煙草を取り出し、吸い始める。その表情は先程までの微笑はなく、射抜くように鋭く真剣なものだった。
「待つとれ、必ず見つけてやつからな、咲夜^{さくや}」

二日目 ありえない聖杯戦争(4) (前書き)

今回から残酷描写が若干入ります

二日目　ありえない聖杯戦争（４）

二人新都を歩く。

ライダーは無言でハーレーを引き、私もまた無言でその隣を歩く。

――沈黙。

周りの喧騒が耳に嫌に響く。まるで世界から取り残される錯覚に陥ってしまう。

新都に来たのは何ヶ月ぶりだろうか。

私が『アレ』をやめてから何ヶ月経つのだろうか。

重い沈黙が続く中、ライダーは唐突に足を止める。

「ここなら、二人つきりで話せるだろ」

着いたのは公園だった。

公園と言っても辺りには草しかない何も無い公園。

かつてここは団地だったらしいが、前々回の聖杯戦争で私の祖父――衛宮切継が宿敵との戦いによって、全てを壊してしまった場所だ。

ひとまず近くのベンチに座る。

わずかな沈黙の中、先に口を開いたのはライダーだ。

「ここさつき見つけてよ。なかなかいい場所だなあって思ってたさ、しばらく眺めてたらお前のが気になってきてな。命令違反ってのはわかってるが、やっぱりお前んとこに行かなきゃって思ってたさ」
ライダーの表情が真剣になる。

「これでわかったら？マスターが一人になったらどれだけ危ないか」
反論する言葉はない。

「さっきのはああいう奴らだったからよかったものの、もし別のマスターなら死にかななかったぞ」

ライダーの言葉が胸に刺さる。あの時ハーレーをライダーに渡した理由はやはりわかっていたらしい。

「……そうね、今回は私の不注意が招いたこと。謝るわ」

風が吹く。再び舞い降りる沈黙。

しばらくして沈黙を破ったのは再びライダーだ。

「ここが明日、あのアサシンとの戦場か……」

そうだ、アサシンのマスター——千堂襖馬が指定したのはこの公園だったはず。

「ライダー、明日のアサシンとは——」

「戦うな——だろ？」

私の言葉を予期していたライダー。

「あなたの気持ちもわからなくはないわ。孫策は一勢力の主ながら、自ら戦場に飛び込み、戦いの中で生きてきた英雄。そんなあなたが敵との戦いを拒否するのが嫌なのもわかる。だけど相手はアサシン。その名の通り、彼は暗殺者なのよ。暗殺者が敵に正々堂々挑むわけがないじゃない！」

気づかず声を荒げていた。感情的になった自分が気恥ずかしくなる。しかし自分が間違ったとも思っていない。

あの誘いが罠の可能性がある以上、むやみに行く必要もないのだ。

ふと、ライダーの方を向くとどう言ったらいいか悩むような表情で黙っていた。

「麗奈、お前が言いたいこともわかる。だけど何て言うかあ……俺にはわかるんだ」

私は思わず訝げになる。

「わかるって何が？」

「……俺のいた時代はな、まあ今でもそうかもしれないが、戦ってきた相手の目は誰もがどんな策で俺を嵌めるかなんてもんばかった。当たり前のことっちゃあ当たり前なんだがな。でも俺は、そんな連中の目を見る度に怒りが沸いた。だけど太史慈^{たしじ}、あの男だけは違った」

太史慈——孫策との戦いの末、彼の配下になった呉の勇将。孫策との一騎打ちはその壮絶さの余りに一騎打ちがほとんどない正史にさえ記述が残るほどだ。

「あいつの目は、ただ純粹に戦いを楽しみたい。誰の邪魔も入らない一対一の戦いを望む、そんな目をしていた。アサシンは彼と同じ目をしていたんだ」

「……っ」

「あくまで憶測だが、あいつは生前暗殺者としてずっと戦ってきたと思う。だがあいつは暗殺ではない、小細工なしの本当の戦いがしたかったんだ。それをあいつはこの聖杯戦争で叶えたい——そう思ってるんじゃないかな」

ライダーの瞳に熱いものが宿る。その言葉は何よりも戦いを楽しんだ男らしい言葉だった。

羨ましい——。

まるで『あの人』が生きてた頃の自分を見るようで。

苦しい——。

隣にいる男を『あの人』と重ねてしまって。

「バカみたい」

無意識に口走っていた。

「麗奈……？」

「相手はアサシンよ。正々堂々とした戦いを望むなんて考えるほうがどうかしてるわ」

違う——。

「だいたいその慎重さのなさで早死にしたのはどこのどいつよ」

こんなこと言いたくないのに――。

「正直私って呉が嫌いなよね」

「なっ……」

「あなたとあなたの父、そんけん孫堅は猪突猛進故に戦場で敵の罠に嵌まり死亡。あなたの弟の孫権もそんけん慎重ながら晩年はただの暗君に成り下がるし」

私は何を言ってるんだろう？

「あなたの部下たちだって――」

パン――。

渴いた音と同時に私の頬に痛みが走る。

ライダーが悲しみの混じった怒りの形相で私の頬を叩いた。

「俺を侮辱するのは構わない。だが俺の家族や仲間たちは――」

そこまで言ってライダーはハッと正気に戻る。

「すっ、すまない！サーヴァントがマスターを殴るなんて……」

必死に謝るライダー。

私は痛みだす頬を手で抑える。

「ゴメン、私先に帰る」

それだけ言っただけで立ち上がる。

「あっ、まっ――」

「ついてこないで」

ライダーを残したまま、私は公園をあとにする。

「何やってるんだよ、俺……」

○

人々が行き交う新都の中を私はさまようように歩く。頬の痛みがどうでも良くなるぐらい心臓が痛い。

多分これで四度目。そして頬を叩かれたのは二度目。幼い頃、家を出た父さんを侮辱して母さんに思いっきり叩かれて以来。

感情的になると他人を侮辱してしまう。言いたくないこと、思ってもないことを言ってしまう。

だから母さんに叩かれたあの日以来、他人に上辺を装うことを覚えた。そのおかげで友達も少なくなかった。

でもそんな自分がいつしか嫌いになっていた。

だから一時期、私はとても荒れた。他人を傷つける毎日を送っていた。

だけど『あの人』だけは違った。

思わず侮辱した時も、怒りのあまりに殴ってしまった時もあの子の笑顔は崩れなかった。

あの最後の夜も――。

道をそれ、路地裏に入る。まるで別世界のように先程までの喧騒が消える。

ふと空を見上げた。

「今日は一雨来そうかな」

そう呟きながらしばらく歩くと予想通り、柄の悪い連中が四人ほどたむろっていた。

四人はこっちに気づくと下品な笑みを浮かべてこちらに近づく。

「お嬢ちゃんかわいいねえ」

「迷子にでもなったかい？」

「今うちら暇なんだけど一緒に遊ばない？」

「もちろん工口的な意味で、あひゃひゃ」

お決まりのような下劣なセリフ。

「数ヶ月も経つと意外と忘れられているものね……」

「なんか言ったかい？」

今日は久しぶりだ。少しばかり派手にやろうかな。

「いいよ、遊ぼう」

○

雨の中、誰もいない道をライダーはハーレーで走る。

衛宮亭に着き、ハーレーを庭に停めて中に入る。

「お帰りなさいライダー。タオル用意しましたよ」

家に入ると掃除中だった桜が既に用意されていたタオルをライダーに差し出す。

「忝ない、桜殿」

「いえいえ、突然の雨ですもの。いくらサーヴァントとはいえ、ずぶ濡れはいけませんよ」

差し出されたタオルで体を拭くライダー。

居間に入るも無人。凜は台所で料理中だった。

「あら、お帰りライダー。あれ、麗奈は一緒じゃないか」

凜もライダーに気づく。

「えっ、麗奈はもう帰ってるはずじゃあ……」

「あの子、途中で抜けちゃって先帰ったはずなんだけど、アタシが帰った時には家にいなかったからてっきりあんたのこと探しに行ってたと思ったんだけど」

たしかにライダーと麗奈は先程まで一緒にいた。

しかし麗奈は先に帰ると言ってそのまま別れたはずだ。

だから彼女は既に帰ったものだとしてライダーは認識していた。

「その様子だとマスターに逃げられたな、ライダー」

誰もいなかった居間に、いつの間にかアーチャーが壁際に背中を預けながら立っていた。正確には最初から居間にいたのが実体化したというべきか。

「大方、マスターと一悶着起こして逃げられたのだろう」

挑発的な笑みを浮かべるアーチャー。

「ちよつとアーチャー、喧嘩売るのはやめなさいって言ったでしょ」

「私は思ったことを言っているだけだよ、凜」

「アーチャー、てめえ……」

居間に不穏な空気が流れ始める。

「君のマスターにはほとほと同情するよ、ライダー。我々がいるとはいえ、マスターを放置するような屑を引き当て——」

アーチャーに向けてタオルをぶん投げるライダー。アーチャーの頭に濡れたタオルがたれかかる。

「これは何のつもりかな？」

「表に出ろや、アーチャー」

ライダーの体が怒りで震えている。

「ほう、自ら大義名分を作るとは恐れ入る」

アーチャーも頭にかかったタオルを投げ捨て、鋭い瞳でライダーを睨みつける。

「おっ、落ちついてください、ライダー」

「アーチャー、あんた！」

桜と凜の制止の声も二人には届かない。

「アーチャー、てめえは俺が潰す」

「君のマスターには悪いが、いずれ敗れるなら早い方がよろう」

○

地面や壁に赤い液体が所々付着する。その液体も降りしきる雨に混じって流される。

私の前には四人の男が倒れている。

骨が折れた者、目が潰れた者、喉が潰れた者様々。

そのうち一人が私を見上げる。

「てめえ……まさ……か……あの……不良狩り……」

私は何の感慨もない冷たい目で男を見下す。

「気づくの遅すぎだよ、バアカ」

私は男の腹を蹴り上げる。

「あうぐ！」

男は吐瀉物を地面に撒き散らし、他の三人と同様に気を失う。
空を見上げる――。

雨は私をただひたすらと冷たく濡らしていく。

「アハ……ハハハ……ハハ」

力なき笑いが込み上げる。

数ヶ月ぶりの不良狩り。私の復讐――。

雨音。

血に染まる私の拳。

何もかも流されればどんなに幸せなことが。

「先輩……」

あらゆる感情が私の中でないまぜになり、笑いとともに込み上げる
涙は雨水に混じる。

「……麗奈はやっぱり悪い子です」

二日目　ありえない聖杯戦争（5）

中庭にて再び剣激が鳴り響く。

ライダーは大剣、アーチャーは双剣を用いての打ち合い。

双剣による猛攻を凌ぎ、わずかな隙に大剣で反撃。

双剣も瞬時に防御に切り替わり、迫りくる大剣を防ぐ。

大剣の衝撃に堪えられず、双剣は碎かれるものの、新たな双剣がアーチャーの両手に瞬時に生成された。

間合いを取り、互いに睨み合う。

「お前、本当にアーチャーか？昨日も剣しか使ってこねえじゃねえか」

「フツ、馬に乗っていないライダーの質問とは思えんな」

互いに剣を握りしめる。

——風が吹く。

「ラアッ！」

「ハッ！」

再度打ち合い。

ライダーの大剣に碎かれるアーチャーの双剣。

しかし、すぐにアーチャーの手に新しく双剣が握られる。

さらに繰り出されるアーチャーの攻撃を器用に大剣で防ぐ。
繰り返される剣激。

しかし——アーチャーの攻撃に一瞬乱れが生じる。

「そこだ！」

その隙を生かし、大剣を横に薙ぎ払うライダー。

「甘い！」

ライダーの剣がアーチャーに触れる寸前、アーチャーの左腕に盾が出現する。

「なっ!？」

何世紀のものかわからないアンティークな盾はすぐに剣の衝撃に堪

えられず砕かれるものの、ライダーの一撃を一瞬鈍らす。

「フンッ！」

その一瞬でアーチャーはライダーの懐に入り込み、アーチャーの腕に新たに生成された双剣で振り払う。

「ガッ！」

斬られる寸前に地面を蹴り上げて間合いを取るものの、掠り傷は免れなかった。

「チェックメイトだ」

ライダーが間合いを取った隙にアーチャーの腕に弓が握られていた。間合いからしてとてもかわせるとは思えない。

「くっ……」

見事だった。

ライダーの隙を作るためにあえてこちらがわざと隙を作り、ライダーの攻撃を誘い込んだ。

わずかな打ち合いでライダーの攻撃の性質を理解したアーチャーならではの戦法と言えよう。

「一つ聞こう。なぜマスターを一人にした？」

いくらマスターの命めいとはいえ、マスターを一人つきりにするのはあまりにも危険。

もちろんライダーもそれを理解している。

しかし同時に彼は麗奈の気持ちも理解していた。

「あいつは……俺とは一緒にいたくねえんだ」

理解しているからこそ辛い事実。

どんな理由があるにせよ麗奈がライダーの正体を知ってから麗奈はある種の苦痛をライダーに感じていた。

しかし麗奈はそれを表に出そうとはしない。逆にそれがライダーにとつての苦痛でもあった。

「とんだ道化だな」

ライダーを睨むアーチャー。

「貴様には麗奈を守る資格などない」

アーチャーの言葉が胸に刺さる。

ライダーにとってその言葉は否定しながらも心のどこかで感じていたものだっただ。

「さらばだ」

アーチャーの弓が放たれた。

「姉さん、二人を止めましょうよ」

「止められると思う？」

凜と桜は中庭に面する縁側でライダーとアーチャーの戦いを見守っていた。

「なんでかわからないけどあそこまで本気になってるアーチャー、令呪でも使わない限り止められないわ」

ため息を吐く凜。しかしその目には真剣味が帯びる。

「ところで桜、気づいてる？」

「はい」

桜の表情にも戸惑いはなかった。

「誰かいるわね」

アーチャーの一撃はライダーの横を通り過ぎ、背後にある草むらを狙う。

しかし弓矢は草むらに当たる寸前、光の切っ先に弾かれた。

「こそこそ見てないで堂々と観賞したらどうだ？」

アーチャーの挑発と同時に草むらから一人の鎧姿の小柄な少女が現れる。白銀の鎧に包まれた少女は、ある種の神々しさを感じさせた。
「セイバーさん？」

桜が驚きの表情を見せる。

「いえ、確かに似てるけど違うわね。背が高いし、鎧も結構スリムだわ」

凜の言葉に少女は頷く。

「確かに、私はこれがあなたたちとの初めての対面となりました。しかし一つだけ間違ってはいません」

女でありながら凜々しき声を放つ。

「私はサーヴァント、セイバー。武人同士の戦を汚したことは許していただきたい。しかし――」

セイバーは肩にかけてあった剣を引き抜く。

「剣を抜いた意味、そなたたちならわかっていきましょう」

構えるセイバー。その身のこなしは一部の隙もなく、彼女が列記としたサーヴァントであることを示していた。

「凜」

己がマスターに目を向けるアーチャー。

「いいわ、やっちゃいなさい」

凜の許可を貰ったアーチャーは不敵な笑みを浮かべ、再び双剣を構える。

ライダーも同様に大剣を構えるが――。

「貴様は引っ込んでいろ」

ライダーにも視線を向けず言い放つアーチャー。

「なっ――!!」

「足手まといはいらないと言っているんだ」

そう言い放つと同時にアーチャーは一瞬でセイバーとの間合いを詰める。

先程とは違う剣激が真夜中の中庭に響き渡る。

○

「雨止んだか」

雨上がりの路地裏の屋根の下、私は壁に預けた背中を離し、気を失

っている四人の不良どもを見下ろす。

「救急車は呼んでおいたから」

一言だけ言い残して私は路地裏を立ち去る。

少し遅くなり過ぎた。あんまり母さんたちを心配させるのも気が引ける。

雨上がりの独特な匂いが私を包み込む。

「何やってるんだろ、私……」

自分の手に着いた血の跡を眺めながら私は一人呟く。

「帰ろう……」

○

セイバーはその小柄な体を生かし、アクロバティックな猛攻を続ける。

それはさながら踊り子が王の御前に見せる美しき舞の如く。

「フンッ！」

一方のアーチャーも負けず劣らず、二対の剣を振り、時には投げながら、彼女の猛攻を防いでいる。

二対の剣は先程のライダーとの戦いと同じく、彼の手元から離れる度に新たに『投影』されていく。

『投影』

衛宮士郎の成れの果てである彼の能力。

彼の知識にある武器を複製する特異な魔術である。

贗作とはいえ、その威力は本物と同等の力を持つ。

彼がおもに『投影』する二対の剣は『干将・莫耶』^{かんしょう ばくや}というある二人の刀鍛冶の名を冠せし夫婦剣である。

その名刀を何度も砕いたという点でアーチャーはライダーの大剣を評価している。

そしてこのセイバーの剣もまたアーチャーの双剣を打ち砕いている。

その威力はとても細身の剣とは思えない威力で、同時に強大な魔力を剣そのものから感じる。

「あの剣、おそらく古より伝わりし伝説の剣……。俺も生で見るのは初めてだが、あの剣の持ち主は男のはず……。あの女いったい？」
思案するアーチャーにセイバーの剣が襲い掛かる。

常人の目では追えないスピードによる攻撃を、しかしアーチャーはかわす。

「戦闘中に行うそれ以外の思案は命取りですよ」

「それはすまない。どこかの戦馬鹿とは違うものでね」
互いが睨み合う。中庭の空気は張り詰め、両者の戦いを硬く包み込む。

凜たちが見守る中、両者は再び剣を握りしめ、瞬速のごとく互いの間合いを詰め――。

ライダーは一つの違和感を感じていた。

アーチャーの言葉が胸に刺さり、意気消沈しながらも、戦いを冷静に観察するところは生来の武人故のものだろう。

「まさか……な」

ライダーが感じた違和感が間違っていないならそれはライダーにとって許せない行為。

彼はその手に大剣を握り――。

一瞬で間合いを詰める二人。

交差する武器は、しかし一人の人物に阻まれる。

「えっ――！？」

「なっ――！？」

阻んだのはライダー。

その手に握る大剣で二人の攻撃を同時に防ぐ。

「貴様、手を出すなど言っただろう」

「るせえ！少し黙ってる」

ライダーは大剣をしまうとセイバーの胸倉を掴み上げる。

「てめえ、本気出してねえだろ」

突然の行為に戸惑うセイバーだったが、ライダーの言葉を聞いて彼女の表情が陰る。

「なめてんのか！まるで俺らを試してるみてえじゃねえか。サーヴァントならサーヴァントらしく戦えよ。よくわかんねえ小細工なんかな必要ねえだろ。俺はそういうのが一番大嫌いなんだよ」

セイバーを怒鳴り上げるライダー。あまりのことに中庭にいた全員が啞然とする。

しかし武人であるライダーにとって戦いに手を抜くという行為は許しがたいことだった。

少しばかりの沈黙の後、セイバーから手を離す。

アーチャーも呆れた表情を見せ、干将・莫耶を消滅させる。

「あんた一体何者だ？殺気を感じないから俺達を殺しに来たんじゃないんだろ」

ライダーの問いにセイバーは一瞬諦めの表情を出すですがすぐに顔を引き締める。

「申し訳ありません。確かに私はあなた達の实力を試させてもらいました」

片膝を着くセイバー。その瞳にすでに敵意は感じられない。

「で？あなたの目的はいつたいたいなんなのよ？」

戦いが終わり、凜達もセイバーに近づく。

セイバーも立ち上がり、瞳をまっすぐにその目的を告げる。

「我がマスターの命により、勝手ながらあなた達の護衛を勤めさせていただきます」

その場にいた全員が驚きの表情を見せる。

「ちよつといきなり過ぎやしない？ていうか、あんたのマスターって何者よ？」

凜の問いにセイバーは難しい表情を浮かべる。

「残念ながら我がマスターとの盟約により、教えることはできません。そのかわり我がマスターから令呪の一つを今ここに預かっていきます」

セイバーは左腕の籠手を脱ぐ。

その手の甲には赤く光る令呪が一本分刻まれている。

「この令呪を別の人物に移植することによってその方を第二のマスターとする——それが私のあなた達への忠義です」

確かに令呪の移植は不可能ではない。

しかし一部の令呪を移植して一人のサーヴァントが複数のマスターを得ることは余りにも例外である。

「ちよつと待ちなさいよ。そんなことを言われてもどうやって信用しろっていうのよ」

凜の言葉に決意の表情を浮かべるセイバー。

「ならば私の真名を名乗りましょう。それならば私の弱点を露呈するようなもの。万が一、私が反逆にでた場合、対処がいくらかやりやすくなるはずですよ」

真名を伝えるということはセイバーの言う通りサーヴァントへの対処方を教えるようなものである。

「我が真名は——ジャンヌ・ダルクと申します」

「ジャンヌ・ダルク……英仏百年戦争の大英雄じゃない」

神に選ばれ、百年戦争でフランスに勝利を導き、しかし最後には悲惨な末路を迎えた悲しき英雄。

彼女の瞳はその名に恥じぬ美しき光を放っている。

「これで多少の信頼を得れば幸いです。我がマスターは衛宮凜、あなたを第二のマスターとして推奨されました」

戸惑いの表情を浮かべる凜。

「そんなこと言われたって、アタシだってサーヴァントがすでにい

るのよ」

「あなたのサーヴァントがアーチャーということはすでに承知です。ゆえに勝手ながら試すような真似をいたしました」

「って言われてもねえ……」

確かにセイバーに悪意はないであろうが、今は聖杯戦争の真つ最中。相手のマスターがわからない以上なんとも言えないのは仕方ないこと。

「なあ、その令呪の移植の仕方はどうやるんだ？」

ふいにライダーが問う。

「すでに術式は刻まれているのであとは第二のマスターとなる者がこの令呪に誓いの口づけをしてくれれば——」

○

「ただいまあ」

すっかり遅くなってしまった。

雨にも多少濡れたし、シャワーでも浴びた方がよさそうだ。

「……ライダーいるかな」

玄関の横にはすでにライダーに貸したハーレーが立て掛けられてあった。

「さっきのこと……謝っところ」

家に入るも反応はない。

とはいえ人の気配はするので留守という訳でもなさそうだ。

「……中庭の方に誰がいる」

私は中庭の方に足を進める。

「えっ——？」

中庭の光景を見た瞬間、頭の中が真っ白になったような気がした。

ライダーが見知らぬ女性の手に口づけをしていた。

他の皆はそれを啞然として見ている。

「これでいいのか？」

「えっ……えっと……」

女性の顔が真っ赤になっている。

「あっ！れ、麗奈ちゃん……」

桜姉さんが私を見て驚いているけど気にも止めない。

「これはどういうこと？ライダー」

自分の言葉に怒りが混じっているのを私自身はまだ気づかない。

二日目　ありえない聖杯戦争（6）

私は自分の部屋で扉に背を預ける形でうずくまっていた。
ひとまず自分の怒りを沈めるために深呼吸をする。

先程の出来事を忘れようとするもアイツの——ライダーのあの表情
が頭から離れない。

思わず壁を殴る。

ヒリヒリと痛む拳が私を現実に取り戻す。

「あんな顔されたら、殴りたくても殴れないじゃない……」

○

数分前——。

その場にいた全員が私に振り向く。

母さんがバツの悪そうな顔をするけど、私は気にも止めずにまっす
ぐライダーを見据える。

「もう一度訊くわ。ライダー、これはどういうこと？」

できるだけ自分を落ち着かせる。

そうでもないと今日一日のイライラが爆発してしまいそうだ。

ライダーは隣にいる鎧を着た女性に何か小声で話すところらに向か
ってゆつくりと歩を進める。

重苦しい沈黙が流れる。

ライダーはゆつくりとした速度で私の横を通り抜けようとする。

「えっ？」

すれ違う間際、ライダーの口から言葉がこぼれる。

「どうやら俺はマスターを護る資格がないらしい……」

気に止めなければ聞こえない、本当に小さな声でライダーはそう言
って立ち去ろうとする。

私は無意識に自分の腕を握り締めていた。

「意味がわかんねんだよ!!」

背後にいるライダーに向かって私は拳を振り上げ——止める。

「……っ」

ライダーは私を悲しそうな表情で見つめていた。

哀れむとは違う、まるで二度ともう会えない誰かに悲しむ——そんな表情。

「なっ……」

反則じゃない。

そんな顔をされたら私、どうすればいいのよ？

——チャキ。

突如、鋭い刃が私の喉元に現れる。

その刃は細い剣で、それを握り締める鎧の女性が険しい表情で私を睨む。

「アナタがライダーのマスターのようですね」

表情を変えずに喋る女性。

「私はセイバー、契約により今宵よりライダーのサーヴァントになりました」

「……はっ？」

私はセイバーと名乗る女性の言葉が理解できずに混乱する。

「だが勘違いしないでいただきたい。私はライダーのサーヴァントであってアナタのサーヴァントではない。いかにマスターのマスターといえど、我がマスターに危害を加えるならば、この剣でアナタを斬ります」

「セイバー、剣を俺のマスターに向けるな。これは命令だ」

ライダーの方を一瞥し、セイバーは喉元の剣を仕舞う。

そして二人は無言で居間を去る。

あまりのことに頭を回すことすら忘れてしまう。

「訳わかんない……」

私は小さく呟き、自分の部屋へと走って逃げた。

○

——トントン。

扉を叩く音で意識が戻る。

「麗奈ちゃん、少しお話しても大丈夫かな？」

扉ごしに聞こえるのは桜姉さんの声だ。

扉を開けると桜姉さんが心配げな顔で立っていた。

私は桜姉さんを部屋の椅子に座らせて、私は床に座る。

桜姉さんは話すことを多少躊躇うも、ゆっくりと口を開く。

「麗奈ちゃん、ライダーのことはあまり怒らないであげて」

予想通りの桜姉さんの言葉。

「怒らない以前に何が何なのかよくわからないよ。いったい何があったの？」

頭を抱え込む私。

桜姉さんはそんな私を落ち着かせるためにゆっくりと今日あった出来事を語り始める。

――。

「それで今セイバーはライダーのサーヴァントってことが。ていうかサーヴァントがサーヴァントを持つてのはありなの？」

「まあ、前例がないわけでもないわ」

たしかに前回の聖杯戦争ではキャスターによってアサシンが召喚されている。

「でもセイバーのマスターは他にいるんでしょ？」

「ええ、その人がどんな人物か、なんの目的で私達にセイバーを寄こしたのか全くわからない」

「……なんでライダーはそんな得体の知れない奴を勝手に仲間にするのよ」

私がため息をつくとき、桜姉さんは優しく諭すように語る。

「私、ライダーの正体はわからないわ。でもね、あのサーヴァントは決して自分のマスターを裏切らない。私はそう思うの」

「……っ」

「今回のことも、多分あなたを思ってたことだと思うのよ」

「……でも」

「ライダーのこと、少しは信じてあげてもいいんじゃないかな」

「……ありがとう、桜姉さん」

ただ一言、それだけ言うのが今の私の精一杯だった。

○

「で、さっきのことをどう説明するつもり？」

居間で凜が煙草をくわえながらアーチャーに問う。

アーチャーは壁に背を預ける姿勢で凜と言葉を交わす。

「ライダーは衛宮麗奈を護る資格がない。そう感じたままでだが」

アーチャーの返答に凜はイライラしたように頭をかく。

「それは私のサーヴァントとして？——それとも麗奈の父親として

？」

「……っ」

しばらくの沈黙の後。

「どちらも違うな。衛宮士朗はすでにお前達を捨てた」

冷たく言い放つアーチャー。

アーチャーにとって士朗が二人を置いて出ていったことは、彼を認めたが故に許せない行為であった。

彼なら自分とは違う道を歩める。

——そう信じたから。

「自惚れないで、アーチャー」

凜の声には静かながらも怒りが混じっていた。

「勘違いしないで。あの娘の父親は衛宮士朗よ。士朗という自分を捨てたアナタに彼女の父親を名乗る資格はないわ」

「……くっ」

凜の言葉に苦虫を噛むアーチャー。

「……あの娘にはあんまり関わらないであげて。あんたの正体が父親ってバレたらそうとうメンドくさいことになるだろうし」

そう言っただけ居間を立ち去ろうとする凜。

「なあ、凜」

呼び止めるアーチャー。

「麗奈から血の臭いがした。あれはいつたい——」

凜はアーチャーの言葉に驚き、目を見開く。

「まさか……ね……」

和室にライダーとセイバーが座っていた。

一部の隙もない姿勢で正座するセイバーの姿はまるで一枚の美しき絵画の如く、まったくの違和感を抱かせない。

「マスター、そろそろ私と契約した理由を教えてくださいませんか？」

「先にあんたのマスターと目的を教えてくださいませんか？」

セイバーはいぜん表情を崩さない。

「それだけは言えません。吐かすのに令呪を使うのは構いませんが、そのあとは迷わずアナタを殺します」

ライダーがセイバーから譲り受けた令呪は一つだけ。もし一回でも使ってしまったら契約は終了する。

下手に令呪を使い、事情を聞き出せば令呪がなくなって戦わざるを得なくなってしまうだろう。

ライダーはため息をつきながらもニヤニヤと笑みを浮かべる。

「ところでセイバー、お前もしかしてキスされるの慣れてないだろう？さっきのお前の表情はなかなかだったぜ」

セイバーは先程の契約時のことを思い出し、思わず顔を赤らめてしまふ。

「き、騎士たるもの、いかなる時も色事などにつつつを抜かしてはなりません」

セイバーは表情を再び厳しく戻す。

「それでアナタはいつたい何を企んでいるのです？」

ライダーはボサボサと頭をかく。

「そのセリフ、まんまアンタに返す——なんてのは野暮だよな。俺の言うことを聞いてくれれば追求はしないでおくぜ」

「……今のアナタは私のマスターです。出来うる限りのことは聞き入れましょう」

ライダーはいつになく表情を厳しくする。

「アンタにやつてもらいたいこと、それは——」

○

桜姉さんが部屋から出た後、私はしばらくボーとしていた。考えることはするけど頭が回らなくて考えがまとまらない。

「……お風呂に入ろう」

タオルと着替えを持って浴場に向かう。

自慢じゃないけど我が家のお風呂はなかなか風情があって私は結構気に入っている。

「あつ……」

浴場に向かう途中、セイバーと鉢合わせする。

「先程の無礼、まことに申し訳ありません」

表情を崩さず、礼儀正しく謝罪する少女。

「別にもう気にしてないわよ。そんなことより——」

私は彼女に何よりも聞かなければならないことがある。

「アナタ、私達の護衛をしたいんだよね。いつたいアナタのマスター

は何者？何を企んでいるの？」

セイバーは私の言葉を予想していたのか、やはり表情を崩さずに答える。

「本来のマスターの命により、それを教える訳にはまいりません。どうかご了承ください」

「そう……」

またしばらく沈黙が流れる。

「ねえアナタ、たしか正体はジャンヌ・ダルクなんだっけ？」

重い沈黙を私から破る。

「ええ……そうですが」

思わず口元が歪む。

「ジャンヌ・ダルクは聖少女で有名なはずだけど、ライダーを垂らし込んでのを見るとそうでもないみたいね」

セイバーは一瞬私を鋭く睨むが、ようやく表情を崩して鼻で笑う。

「フツ、なるほど。私はどうやらアナタが好きになれないようです」

「あら、気が合うわね。私もアナタのことが嫌いみたい」

そう言葉を交わし、私はセイバーの横を通る。

「もし——」

「ん？」

「もしアイツや私の家族に何かしたら、絶対にアナタを許さないから」

そう言い残して、私は浴場へと向かう。

「考えることはどちらも同じか……」

セイバーの小さな呟きは私の耳には届かなかった。

体を洗い、湯舟に浸かる。芯から温まり、自分の全てを癒してくれる。

「これからどうしよう……」

ライダーは多分しばらくは私に着いて来ないと思われる。

あつ、とりあえずアーチャーは後日フツ飛ばさなきゃ。

セイバーに関しては目的が不明瞭な以上、いろいろ警戒しなければいけない。

思ったよりやらなきゃいけないことがたくさんある。

「……ん」

ライダーとはこのままじゃいけないのはわかってる。

だけど――。

「先輩ならどうします?」

虚空へと一人問う。そんな自分に呆れながら湯舟から上がる。

先輩のバイクに乗ったライダーはちよつとだけかつこよかったなあ。

「明日こそ……アイツに謝らなきゃ」

一人呟きながら私は浴場を後にした。

F a t e / a f t e r

S e c o n d d a y s f i n i s h a n d

g o t o t h i r d d a y s .

二日目 ありえない聖杯戦争(6) (後書き)

二日目終了でございます

読み直すと麗奈の性格酷いなw

彼女も話が進むにつれて丸くなりますのでご安心を

アーチャーもそうですが、サーヴァントの配置は完全に自分の趣味最初はSSにする予定もなく設定だけ考えてたんですけど、気づいたら頭の中でプロットが出来上がったりw

サーヴァントの配置を自分で考えてSSが作りやすいのはFateの魅力のうちのひとつだと思います

果たして麗奈はライダーと仲直りできるのか、どうか温かい目で見守ってください

——現陣営状況

衛宮陣営

・衛宮麗奈&ライダー(孫策)

・衛宮凜&アーチャー(エミヤ)

・??? (仮ライダー) & セイバー(ジャンヌ・ダルク)

敵陣営

・千堂襖馬&アサシン

・???&ランサー

・仮面の男(衛宮士郎?) & バーサーカー

三日目 月下の闘争（1）

「先輩も好きですね、三国志。いったい何冊読みあさったんですか？」

「そうね、違う作者のだけでも多分十人以上かな」

「はあ…… 本当に読書好きですね、先輩」

「ふふっ…… 貴方ほどじゃないわよ、麗奈ちゃん」

「そんなことないですよ。先輩と出会うまで、私はそこまで本を読みませんでしたし」

「へえ、あなたの部屋の蔵書量、とてもここ数ヶ月で集めた数だとは思えないわ」

「うっ、そこを突かれると痛いです」

今日は生徒会と図書委員会合同の図書館の棚整理。

といっても生徒会から来てるのは会長の来栖撫子先輩くるすなでしこだけで、私はただのお手伝いみたいなものだ。

「まあ、気持ちはわからなくもないですけどね、掃除なんて面倒くさいし。でもこう掃除とかしてて、しばらく読んでなかった本を見つけるとついつい読み耽っちゃうたりして、それがまた楽しくて——って何ニコニコこっち見てるんですか？」

「いやあ、今日の麗奈ちゃんもかわいいなあって「ブフッ！」」

おもわぬ発言につい吹き出してしまふ。

「先輩、いきなり変なことを言うのはやめてください」

「うん？ アタシは素直な感想を言ったただだよ」

自分の顔が赤くなってるのがわかり、つい俯いてしまふ。本当に先輩はいろんな意味で反則だ。

自分に素直で運動神経抜群、頭脳明晰、容姿端麗。

持ち前のリーダーシップで生徒会長になり、学園の彼女への信頼度は高い。

男女問わず人気があり、弟の正宗先輩とそろってファンクラブがあるほどだ。

人気の理由として一番に上げられるのは多分彼女には慈愛に満ちた優しさがあるからかもしれない。

そう——この人は人間の屑同然だった私を何の迷いもなく拾ってくれたのだから……。

「こら」

「あついた！」

突然先輩に額を小突かれる。

「まったく、ボオとしちゃあ駄目でしょ。手伝ってくれてるって言ったのは嬉しいけど、だからこそ自分の行動に責任持たなきゃ。ねっ？」

そう言つて私の頭を優しくなでる。

「あつ、はい。頑張ります」

「うん、よろしい」

そして再び作業が始まる。

大変だけど暖かくて優しい時間がゆっくり流れていった。

この時はまだ想像すらしていなかった。
あの最悪の日が訪れることを……。

○

「……また夢か」

鳴り響く目覚ましを止め、洗面所で顔を洗いつて制服に着替える。
布団を片付ける途中、本棚の中の一冊の本に目がいく。

『正史・三国志』

先輩が好きな三国志本の中でも一番気に入っていた本。
分厚く、重量感のある一冊。

それは先輩から貰った最後の本だった。

登校準備を終えた後、私は居間に向かう。

「おはよう、桜姉さん」

「おはよう、麗奈ちゃん。今ご飯盛ってあげるわね」

テーブルの上には既に私の分の朝食が用意されていた。

「でも、本当に今日の朝練休んでよかったの？」

「まあたまにはね。来週にはちゃんと出るから、心配しないで」

今日はいつも行う弓道部の朝練を休ませてもらってる。そのため、いつもより遅い時間の朝食だ。

母さんと藤村先生は教師だから既に学校に向かっている。

昨日いろいろあったせいで本当なら休みたかったけど、二日連続休むってのはさすがに気が引けてしまう。

——不思議なものだ。かつての自分を思うと、ずいぶん平和的人間になった気がする。

だがふいに昨日の雨の中の映像が蘇り、血のついていない自分の手を見つめる。

しよせんは健全な人間の模倣。変われることなんて何もない。

「いただきます」

一人遅めの朝食を食べ始める。

「……ん？」

いつもながら桜姉さんの料理は美味しいものの、なぜか違和感を覚える。

「姉さん、味付け変えた？」

私の言葉に驚く姉さん。

「よくわかりましたね。それ、実はセイバーさんが作ったんですよ」
予想外の答えに思わず啞然とする。

「これ……セイバーが……」

正直言つと物凄く美味しい。

料理の得意な母さんや桜姉さんに引けを取らないほど美味しい。
改めて自分の料理のできなさに悔しくなってしまう。

しばらく啞然としてると縁側からセイバーが出てきた。

「……っ」

私はまた別の意味で啞然としてしまう。

そこにいたセイバーは昨日の鎧姿から打って変わっていた。

紺のロングスカートに白いロングシャツを紺のリボンで結んでいた。その姿は落ち着きのある美しさを醸し出している。

悔しいけどセイバーが美人であることを改めて認識してしまう。

「どう、綺麗でしょう？これ、前回のセイバーさんのお古なのよ」
桜姉さんが嬉しそうに語る。

当のセイバーは言うത്一見落ち着いてるみたいだけどその頬には赤みが掛かっている。

「やはりかのアーサー王が着ていた服を着るといふのは少しばかり
気恥ずかしい」

前回のセイバー。

父さんのサーヴァントでもあった彼女は母さんや父さんとともに前回の聖杯を打ち壊した。

その正体は聖剣エクスカリバーの担い手でイングランドの英雄アーサー王だ。

アーサー王が女だったのにも驚いたけど、セイバーの今の服装を見ると何となく前回のセイバーが小柄だという感じが想像できる。

「それにちよつとだけですが胸が少々キツイのが……」

今の発言はなんとなく前回のセイバーに失礼なような気がしなくもない。

実際セイバーの胸は桜姉さんより少し小さいくらいで十分大きい方だ。

「それとありがとね。料理手伝ってもらって」

「いいえ。昨日のようなことがあったのです。これで喜んでくれるのなら私も嬉しい」

そう言って微笑むセイバー。しかしすぐに表情を引き締め踵を返す。
「それではマスター——いえ、ライダーからの言伝により、少しば

かり外出させてもらいます」

そう言つてセイバーは玄関の方へと向かった。

「ライダーの奴、セイバーに何命令したのよ……」

「気になるの？」

桜姉さんがいやらしい笑みを浮かべながら問い掛ける。

「いや！別に気になるとか、そんなんじゃ……」

うう、こういう時の桜姉さんは結構意地悪だ。

「たくつ、ライダーの奴はどこにいるのよ」

「ライダーならさっき買い物に行かせたわよ」

「買い物？」

「お夕飯の買い出し。昨日みんなを混乱させた罰です」

桜姉さんの誇らしげな顔に苦笑してしまう。

「でもその方がよかつたんじゃない？」

確かに——昨日のことを謝りたいとは思いつつもなかなか彼と顔を合わせる勇気がない。

こういうさりげない桜姉さんの気遣いには感謝してる。

「さて、悔しいけどごちそうさま」

うん、悔しいけどアイツの料理は本当に美味しかった。

「ああ、片付けは私がやっておくから、麗奈ちゃんは学校に行つて来なさいな」

「うん、じゃあそうする。行つて来ます」

私は鞆を手に取り、家をあとにした。

○

「ふふ、まったく素直じゃないんだから」

桜は学校に向かった麗奈に微笑みながら食器を片付け始める。

「もう出てきてもいいですよ、ライダー」

桜がそう言つと襖が開き、ライダーが居間へと入る。

「すまないな、桜殿。気を使わせてしまった」

「いいんですよ、これぐらい。でも本当に麗奈ちゃんと話さなくていいんですか？」

桜の問いにライダーは苦笑いを浮かべる。

「うん……なんていうか、ちよつといろいろあつてさ、顔が合わせにくいというかなんというか……」

「でもこのままじゃいけないのも事実ですよ。麗奈ちゃんもあなたを気にかけているんです。ちゃんと腹を割って話さないと後悔しますよ」

暗く沈む桜。

「桜殿？」

「私もね、前回の聖杯戦争ではマスターだったの。私のサーヴァントはライダーだった」

「なっ——！」

「でもライダーは召喚されてからすぐに兄さんに預けた。私は先輩や姉さんとは戦いたくなかったから。でもね、ライダーが満足に戦わずに死んだって聞いた時、初めて後悔した。私がちゃんとライダーと一緒に戦っていればこんなことにはならなかったんじゃないかって……」

第五次聖杯戦争のライダーは桜のサーヴァントでありながらも、桜の兄——間桐慎二まどうしんじにその支配権が移り、桜を護りたいという決意を持ったライダーも、何もできずに終わってしまった悲劇のサーヴァント。

吐露される後悔の言葉。

ライダーはそれを何も言わずに受け止める。

桜はテーブルの横にあった煙草に手を伸ばし、吸い始めた。

「でもね、私は今の生活が好き。先輩が姉さんを選んだのはいまだに悔しいけど、でも私はやっぱり先輩も姉さんも麗奈ちゃんも藤村先生も好き。だから私は頑張るの。いつまでもこの関係が壊れないように、もう後悔したくないから」

「桜殿……」

「だから、ライダーと麗奈ちゃんにはちゃんと話し合ってほしいの。後悔しないように……」

桜の気持ちがりライダーの胸に刺さる。

だからこそ逃げてはいけない。

「ありがとう、桜殿。俺も一本吸っていいか？現代の煙草がどのような味が知っておきたい」

「ええ、いいわよ」

そう言つて桜の手から手渡せられたものは煙草以外にもメモ帳の切れ端と五千円札があった。

「これは？」

ライダーが問うと桜はにこやかな笑みを浮かべた。

「私は麗奈ちゃんには嘘はつかないわ」

メモの内容を見ると食材の名前が羅列されている。

「さすが桜殿……一枚上手だ」

「よろしく願いますね」

満面の笑みでライダーの煙草に火をつける桜。

「どうですか、煙草の味は？」

ライダーは庭を眺めながら決意を固める。

麗奈が帰ってきたら謝ろうと――。

「苦いけど……落ち着く」

「ふむ、やつと馴染んできたか……」

男は一人、上空から穂群原学園を見下ろしていた。
ほむらはらがくえん

飛行機に乗っているのではない、文字通り空に浮かんでいる。

そしてまるで選別するかのように学園を見渡す。

「しかし厄介な事象が起きるものだ。まあ何のトラブルもなく事が運ぶとも思つてはいなかったが」

不気味な笑みを浮かべる男。

「まあよい、これより私も参戦しよう。偽りで塗り固められた戦争



三目 月下の闘争(2) (前書き)

先に前話を掲載した際にいくつか更新したのでご報告

一日目(1)を加筆修正

一日目(2)を大幅に加筆修正

一日目(4)にライダー召喚の詠唱シーンを追加しました
報告が遅くなってしまう、大変申し訳ありませんでした

三日目 月下の闘争(2)

穂群原学園——両親の母校であり、私が現在通っている学校でもある。

いつもは弓道部の朝練で早い時間に登校していたのだけれど、今日は久しぶりの通常登校のためかいつもより他の生徒達の姿が見られる。

それらに混じり、校舎に入ってまっすぐ自分の教室に向かう。

「あつ、麗奈。宇宙人の襲来で休んだんだった？」

教室に向かう途中の廊下で朝練終わりの想子にいきなり問い掛けられる。ていうか母さん、あんたは何で理由で休みを取ったのよ？

「たくつ、私も母さんも熱っぽかったから休んだだけよ」

「あら、何だ……。せつかく大スクープの予感したのに」

想子は残念そうにうなだれる。ていうか信じるなよ。

「ねえ、麗奈」

「ん？」

突然想子の表情が真剣なものになる。

「これ、小耳に挟んだんだけどさ。麗奈、昨日あんた——」

「衛宮れいなあああ！」

突然背後から大声で私の名前が呼ばれる。

振り返ると典型的なギャル系の女子生徒が私を睨みながら近づいてきた。

「てめえが衛宮麗奈か？」

「そうだけどアンタ誰？」

私はその女子生徒とは何の面識もなかった。

「アタシの名前なんてどうでもいいんだよ」

突如、彼女は私の胸倉を乱暴に掴む。

「てめえ、昨日新都で不良狩りしただろ？」

後ろにいた想子が彼女を抑えようとした手を止める。

ギャルの言っているのはおそらく昨日私に言い寄ってきた男性四人を病院送りにしたことだろう。

「何のことかしら？」

私のあまりにも冷静な返事に彼女の怒りの表情がさらに強まる。

「とぼけてんじゃねえよ、この糞女くそめま！昨日てめえがやった奴らにアタシの彼氏がいたんだよ！」

ふうん、あの中の誰かは知らないけど彼女持ちだったんだ。私はむしろ目の前にいるギャルに少し同情する。

「それで、仮に私がやったとしてアンタどうすんの？」

「なっ——」

「彼女持ちなのに他の女に手出そうとした連中だよ。ちようどいいから別れちまえば？」

「こっ……この糞女！」

私の言葉に怒りが沸点に達したギャルが殴りかかる。

しかしその拳は私の頬に届く前に第三者に止められた。

「正宗先輩！？」

私に殴りかかるギャルの腕を止めたのは弓道部主将の正宗先輩だった。

「校内での暴力沙汰はできれば控えて貰えるところとしては嬉しいんだけどね」

相変わらず爽やかな笑みを浮かべる先輩。にも関わらず先輩が握る私を本気で殴ろうとしたギャルの腕はぴくりとも動かない。

いかにもスラッとしたイメージがある正宗先輩だが意外と体はほどよくガツシリしている。

「で、でもこの女が……」

「君の気持ちもわかるけど、ここは僕に任せてくれないかな？あまり事を大きくするのはお互いいい事でもないはずだよ」

ゆつくりと手を離す先輩。

解放された彼女は口ごもると私をいきなり指差す。

「テメエ、これで終わったと思ってんじゃねえぞ！」

と言い捨てて走り去る。

私はただため息をつく。面倒くさいものから解放された安堵のため息じゃなく、もっと面倒くさいものが引き寄せられたことへの呆れのため息。

「さて、麗奈ちゃん。生徒会の仕事で少しばかり運ばないといけない物があるんだ。手伝ってくれると助かるんだけど」

正宗先輩はこの学園の生徒会長も勤めている。

「どうせ拒否権はないんでしょ？」

「うん、もちろん」

満面の笑みが憎らしい。

「じゃあ美綴さん、少しばかり麗奈ちゃんを借りていくよ」

「えっ！？あつ、はい……」

呆然とする想子を残して私と先輩は生徒会室に向かう。

目の前には資料の山があった。

確かに持てない量ではないけど、普通の女の子に持たせる量じゃない。

「鬼……」

「うん？なんか言ったかい」

先輩はさらに山積みになされた資料を持ち上げていた。

私はため息をつきながらも同様に資料を持ち上げる。

「これを職員室に運べばオッケーだよ」

そう言って歩き出す先輩の隣に並んで私も歩く。

廊下は冬の冷たい空気に覆われ、肌寒さが体を支配する。互いに言葉を発さないためか、寒さがさらに増したかのような錯覚すら感じる。

「それにしても先輩、さっきは私を助けて正義のヒーローでも気取るつもりだったんですか？」

「君を助けたつもりはないよ。あのままだと彼女が大怪我するところだったからね」

「あつ、やっぱりバレました?」

「そりゃあ、姉さんと君の稽古は何回も見てるからね。君が彼女に反撃しようとしたことくらい構えを見ればわかる」

そう、あそこで先輩が止めなければ怪我したのは私ではなく、私を殴ろうとしたギャルの方だった。

「目の前で怪我しそうな娘を見過ごすわけにはいかないよ。姉さんならもつとスマートに止められただろうけど」

またしばらくの沈黙が降りる。廊下の肌寒い空気がさらに強まったように私達を包み込む。

「さっきの話、本当かい?」

いつもの穏やかな口調ではなく、重く、真剣味のある声で問い質す先輩。

「……あいつの彼氏とかは知りませんが、昨日男を四人ほど」

「約束したはずだろ。もう二度と『不良狩り』はしないと」

先輩の声がさらに重くなる。

「あっちから襲い掛かってきたんです。正当防衛ですよ、正当防衛」

「本当に……信じていいのかい? あんなことを繰り返しても姉さんは帰ってこないよ」

先輩の言葉に苛々がだんだん募ってくる。

「前にも言いましたよね。撫子先輩みたいなことを言うのはやめてくださいって」

先輩を睨み上げる。

「正宗先輩は正宗先輩であって撫子先輩じゃありません。そんなわかった風なことを言わないでください」

私の言葉に先輩はため息をつくものの、これ以上は何も言わなかった。

職員室に着き、資料を指定の場所に置いて私はさつさと廊下に出る。

「麗奈ちゃ——」

「ごめんなさい先輩、もう教室に行きます」

先輩の呼び止めを遮り、私は早足で教室に向かう。

「……やっぱり、姉さんのように上手はいかないなあ」
私が去った頃、先輩は一人寂しそうにそう呟いていた。

○

新都のビル群の近くには最近造られたばかりの広場がある。

広場には中心に大きな噴水があり、その周りをベンチや草花が取り囲んでいる。

昼はトラック式のアイスクリーム屋やクレープ屋が来てカップルや家族連れの憩いの場となり、夜はおでんやラーメンの屋台がサラリーマンを癒す場所となる。

今は平日の昼間にも関わらず、カップルや家族連れが静かに広場に思いおもいの時間を過ごしていた。

そんな中、ライダーは一人メモ用紙を睨みながら唸っていた。

ちなみにライダーが外に出る時の格好は革ジャンにTシャツ、ジーパンというラフな格好だ。凜曰く、彼女が夫に無理やり買ってあげたお古らしい。あんまり使っていないのか、かなり状態がいい。

「デパートがどこか聞くの忘れた……ていうかそもそも買い物の仕方也不知道えよ」

聖杯戦争で現代に呼ばれたサーヴァントはもちろん現代の知識はない。しかし戦いや聖杯戦争のルール、生きるのに最低限必要な知識は備わるようになっていく。

逆を言えばそれ以外の知識は自分で学ばなければならない。

もちろんはるか昔の英雄であるライダーに現代の買い物の知識があるはずがない。

「こんなことなら出かける前に桜殿に聞いておけばよかったぜ」
ため息をつくライダー。

「とりあえず、他の人にデパートの場所だけでも聞いておくか。それ以降はまた改めて考えよう……」

そう言っただけで立ち上がり、話しかけられる人がいないか周囲を見渡す。

「ん？」

噴水の横でおそらく小学生ぐらいの女の子が一人、その周りにガラの悪い男が三人ほど少女を取り囲んでいる。少女の方はどうやらうつむいて泣いてる。どうやら和やかな雰囲気ではないようだ。

「お嬢ちゃん、俺達はただアニキに謝ってほしいだけなんだよ」

「アニキのこのコート、かなり高いんだぜ。でも君がアイスぶつけちゃったせいでベタベタだ」

「ごっ……ごめんなさい」

「あん？子供なんだからもつと元気よく喋ろうよ！」

「おいおい、こんな小さい子をイジメちゃかわいそうだぜ」

ライダーらしき男が少女の頭を撫でる。

「そのかわりといっちゃんあなだけど、お兄さんたち今から楽しい場所に行くんだけど一緒に行かない？飴とかお菓子がいっぱいあるよ」

「さっすがアニキ、ロリコンの鑑だぜい」

男の表情が歪む。

周りにいる人たちは我関せず。少女の表情が恐怖で引きつる。

「おい、何があったかわかんねえが女の子が泣いてるじゃねえか。やめてやれよ」

そんな中、声をかけたのはライダーだった。男三人組が一斉にライダーを睨む。

「おい、なんか言ったか兄ちゃん？聞こえんかったのう、ええ？」

取り巻きの一人がライダーに近づく。ライダーはため息をつき、そのあと大きく深呼吸をする。

「女の子が泣いてるんだからやめろって言ってんだよ、ゴルァ！」
「ひっ！？」

ライダーの声は木々を揺らすかの如くあまりにも大きく、ライダーに近づいた男は恐怖し、思わず尻餅をつく。

それに呼応するように周りにいた人達も一斉に不良達を睨み上げた。
「なっ、なっ、んな目で見てんじゃねえよ！」

そう言つてライダーらしき男がその場を走り去り、取り巻きの二人もそれに続いた。

三人が走り去つたのを確認し、ライダーは囲まれていた少女の元へ近づく。

「ええと、その……大丈夫だったかい？」

ライダーは戸惑いぎみに少女の涙を拭うと、少女は顔をあげて少し恥ずかしそうに顔を赤らめて――」

「うん……。ありがとう、お兄ちゃん」

少女の頬には涙の跡が残るものの、安堵の笑顔を浮かべていた。

「大丈夫かい、少女？」

二人の横でアイスクリーム屋の制服を着た女性がアイスクリームを両手に持ちながら近づいてきた。

その一つを笑顔で少女に渡す。

「怖かっただろ？お兄さんが助けてくれてよかったな。ほら、ぶつけたアイスのかわりにこれ食べて元気出せ。ほら、青年も。か弱き少女を助けたご褒美だ」

もう一方のアイスをライダーに差し出す。

「あつ……。どうも」

ライダーは不思議そうに手渡された菓子を眺める。

「いやあ、でもさっきのはなかなかかつこよかったよ。あんたが出て来なかったらアタシがアイツらぶつ飛ばしてたところだったよ」

「まあ、ああいうの見てるとどうもほっとけなくて」

「いいねえ、さっきのあの声といい、アタシあそのアイスクリーム屋の店長なんだけどうちとここで働かない？」

「あつ、えと……。俺にはやらなきゃいけないことがあるんで遠慮します」

「なんだ残念。さて、アタシや仕事に戻るから、頑張んなよ。はい、ラッシャイ。今日もいろんなアイスが揃ってるよ！」

そう言いながら、店長は店に戻っていった。

「なんつうか、豪快な人だな……。あつ、そうだ」

ライダーは一生懸命アイスを舐める少女の方に振り向く。

「なあ、デパートってどこかわかる？」

少女は小動物のように首を傾げた。

「わかるけど……なんで？」

「ええと……俺一昨日、初めて日本に旅行に来たばかりでさ、だからデパートとか日本の買い物の仕方とかわかんなくて……」

少女は興味深々にライダーを眺めると突然楽しそうに笑い出す。

「アハハ、お兄ちゃん面白い。いいよ、咲夜がお兄ちゃんを案内してあげる」

「咲夜？」

「うん。冬眠咲夜、咲夜の名前。お兄ちゃんは？」

少女の楽しい声にライダーは助けてよかったと内心ほっとした。

「俺の名前はライダー、よろしくな、咲夜ちゃん」

「うん。よろしく、ライダーお兄ちゃん」

○

私は学校の校庭の横にある林の中を走っていた。

「クソッ！」

さっき私と目が合ったあの男は間違いなく危険だ――。

どう言葉にすればいいかはわからない。

ただ、もし悪というものが体言できるのなら、あれは間違いなくその類の存在だ。

私の本能がアレから逃げなければならぬと叫ぶ。

「ハア……ハア……」

もう何分逃げたかわからない。疲れがどつと体を支配する。

「なんなのよ……アイツ……」

真冬なのにも関わらず額から流れ出る汗。

――ザア。

足音。

途端、疲れが恐怖に変わる。

さつき目が合った古臭い茶色のコートを着込んだ男が目の前に立っていた。

「フフ、我が存在に恐怖するとはなかなかに勘が鋭い。驚嘆に値しよう」

不気味な笑みを浮かべる男。

「あんた……何者よ？」

恐怖を精一杯押さえ込む。

「そうだな。君がマスターかどうかは知らぬが我が名を知る価値はある」

男はまるで紳士の如く、大袈裟にお辞儀をする。

「我が名はキャスター。初めまして、麗しき少女よ。そして、さようなら」

三日目 月下の闘争(3)

それはほんの少し前のこと――。

「だから正当防衛だって言ってるじゃない」

「むう、本当に？」

先輩から解放された後、すぐにホームルームが始まり、終わった直後いきなり昨日のことについて想子に問い質される。

「もう信じてつてば」

「むう……」

想子は未だ納得のいかない表情をするものの。

「わかった。信じるよ、親友」

さすがに折れたようだ。

「でもそんな危ないことがあったんだからちゃんと私に連絡してよね」

「……うん。ありがと、想子」

想子はいつもの屈託のない笑顔に戻る。

「うん、許す。まあでもあんたがいくら頑丈な鋼鉄女だからってあんまり人を心配させるもんじゃないよ」

「誰が鋼鉄女だ！」

二人で会話してるうちに一時間目の授業を知らずチャイムが鳴る。

「次、母さん担当だっけ？」

「そだよ」

どうしよう。昨日あんなことがあったばかりだから今母さんに会うのはちょっと気まずい。

「ごめん想子。次の授業、私さぼるわ」

「えっ、ちょ――」

想子の制止を聞く前に私はさっさと教室を出る。

校舎を出て、校庭の横にある芝生に寝転がる。

そういえば先輩と一回サボったあの日以来、サボったことなかった。それまでは私一人でよくサボることはあったけど。

まあでも、たまにはこうやって何も考えずにのんびりと時間を過ごすのも悪くない。

冷たい風が吹く。木々を揺らし、枯れ葉が風とともに踊るのを眺めながら時間は過ぎていく。

「んっ？」

ふと校庭の方を眺めていると、古臭い茶色のコートを着込んだ男が校舎を見上げていた。

誰かの保護者だろうか。そんなふうに考えながら男を眺めていると、男は私に気づいたのかこちらに振り返る。

「——っ！」

瞬間——身体を恐怖が支配する。

あの男と目が合ったただけであればはこの世にいてはいけない存在なのだと認識してしまった。

男はゆっくりとこちらに近づき始める。恐怖で固まっていた体が逃げろと叫んでいる。

私は強張った身体を無理やり動かし、全速力で林の中に駆け込んだ。

○

「えっ、麗奈の奴サボり？」

想子の報告に凜は顔を青ざめる。

「まあ昔はよくあったことだからそんなに気にしなくても」

「えっ？あ、うん。そうね。報告ありがとね、想子ちゃん」

想子は心配げな表情を浮かべながら自分の席へ戻っていく。

『凜、気づいているか？』

凜の隣にいた霊体状態のアーチャーが他の人達に聞こえないように頭の中で話しかけてくる。

『ええ、おそらくサーヴァントね。アーチャー、麗奈を探してくれ

る？」

『了解した』

アーチャーは霊体のまま麗奈を探し始める。

「でもこの感じ——まるで『この世^{アンリ・マユ}全ての悪』じゃない」

○

必死に逃げたのも結局は水の泡。

キヤスターと名乗る男は微笑みこちらをただ見つめる。

「キヤスター……魔術士のサーヴァント……」

「ほう、聖杯戦争を知っているのならやはり魔術士か」

駄目だ。こいつからは逃げられない。

こんな時、改めて自分のサーヴァントがこの場にいないことに後悔してしまう。

「君は聖杯戦争に参加しているのかい？」

「……っ」

「無言は肯定と見なすよ。しかし困ったものだなあ。今日は人探しに來ただけだから死合いをするつもりはなかったのだが……」

男は腕を組んで考え込む。

その間にもこの場を逃げる術を考えるものの、何も思いつかない。

「そうだ、私の探し人の居場所を教えてくださいればこの場での君を見逃そう。よくはわからないが、逃げられないとわかってサーヴァントを出さないのはおそらくサーヴァントがこの場にいないのであるう？」

くそっ、完全に読まれてる。

探し人？そんなのわかるわけないじゃない。

とはいえ、今は文句が言える状況じゃない。適当な場所をキヤスターに教えたあと、なんとか母さんと連絡を取ってあいつを倒すしかない。

「問おう——衛宮麗奈はどこにいる？」

予想だにしなかった名前がキャスターの口から語られる。
「どうした？この学園にいることはわかっていないのだが」
私です——なんて言えるわけがない。

こんな悪意しか感じられない男に自分が麗奈だと知られた瞬間、どんなことをされるかわかったものじゃない。

ていうかなんでサーヴァントが私を探しているのよ！？

「いや、失礼した。宝探というものは己が力で見つけてこそ喜びというものを感じえよう」

よくわからないけど私に訊くのを諦めたらしい。

あとは少しでも隙ができれば——。

「わずかながら君の時間を裂いたことには詫びよう。しかし、君がマスターである可能性がある以上、ここで始末した方が後々有効であろう」

そうキャスターが口にした瞬間、一瞬キーンという音が鳴り、まるで周りの大気が——。

「ヴブオ！」

強烈な吐き気とともに私の口から紅い液体が吐き出される。

——息ができない。まるで周りの空気を引き抜かれた感じ。

「君の一定範囲内に結界を貼った。結界内では息が出来なくなる仕掛けだ。最初は苦しいだろうが、なに、君の脳にすぐ酸素は送られなくなり、痛みもサーヴァントを呼び出す思考すらなくなる。安楽死としては上等な方であろう？」

キャスターが……何か言ってる。

でも……もう……何も……聞こ……え……な……い……。

シュバ——。

「ぬう？」

一陣の風が舞う。

空気が――人間になくってはならない気体が体の中を通り抜けてゆく。体が倒れる寸前、誰かが私を抱きかかえた。

「怪我はありませんか？」

この声は……セイバー……？

白銀の甲冑を身に纏い、金色の髪を風に揺らめかせる美女は無表情で私を両手で抱える。

「やはり、その娘はマスターか。簡易とはいえ、私の貼った結界を断ち切るとは見事。君が彼女のサーヴァントだね？」

キヤスターの問いにセイバーはキヤスターに目を向けて答える。

「いえ、私はこの女のサーヴァントではありません」

怪訝な表情を浮かべるキヤスター。

「では君は何者かね？」

キツとキヤスターを睨みつけるセイバー。

「私はアナタの敵です」

○

「わあい。お兄ちゃん、こっちこっち」

デパートで咲夜は歳相応に楽しそうにはしゃいでいた。

一通り頼まれていた買い物を済ませ、おもちゃ広場にて咲夜を連れてく。

「はうああ……」

咲夜は熊のぬいぐるみに目を輝かせた。

そして振り返ってライダーをじっと見つめる。

「うっ……」

困ったような表情を浮かべるライダーは少し思案した後「すまない、桜殿」と呟いてくまのぬいぐるみの中から小さいものをつまみ取る。

「ほら、買ってやるよ」

「ほんと！」

ライダーから受け取ると咲夜はそのぬいぐるみを大切に抱きしめる。
「おいおい、そんなに大切そうに抱かなくても」

「うっん、私こういうのもらったこないから、すごく嬉しい……」
少女の屈託のない笑顔に癒されるライダー。

同時に昨日の喧嘩した時の麗奈の表情を思い出し、再び心が沈む。

「どうしたの、お兄ちゃん？」

咲夜がライダーの顔を覗き込む。

「あつ、わりい。今買つてやるよ」

ライダーは先程、咲夜に教えてもらった通りに熊のぬいぐるみをレジに通した。

「ふふん、ふふん、くつまさあん、くつまさあん」

デパートからの帰り道、咲夜は熊のぬいぐるみを大切に抱えてはしゃいでいた。

「お兄ちゃん、本当にありがとね」

「……っ」

「お兄ちゃん？」

ライダーは麗奈のことについてずっと思い悩んでいた。

「セイバーに任せたら大丈夫だろうけど、でもなあ……」

「お兄ちゃん！」

怒鳴る咲夜。

「あつ、どうした、咲夜？」

「それはこっちのセリフだよ。どうしたの？さっきからボオとしちやって」

話を聞いてくれなかったからだろうか、咲夜はむくれている。

「すまないな、つい考え事を……」

「何を考えてるの？」

怪訝な顔を浮かべて尋ねる咲夜にライダーは思い悩みながらも口にすることにする。

「ちよっと大切な人と喧嘩しちゃってな。俺はそいつのことを守り

てえんだけど、アイツはどうやら俺のことを嫌ってるみたいでさ。
ハハ……」

力ない笑いに深いため息をつく。

「よくわからないけど、お兄ちゃんにとってはその人は守るなって言われたら守んなくてもいいって思う人なの？」

咲夜の予想外の言葉にライダーは驚きの表情を浮かべる。

「いや、そんなことはない！」

「じゃあ、自分の意見を押していいと思うよ。だってお兄ちゃんやんがやるうとしてることは決して間違いじゃないんでしょ？ だったらそのことをちゃんと話してもいいんじゃないかな。もし、自分が悪いと思うならそこで謝ればいいと思う」

「咲夜……」

「それに守ってもらってことはそばにいてくれるってことでしょ？ それってすごく幸せなことじゃない。それを嫌だなんていうのはちょっとずるいんじゃないかな……」

咲夜の笑顔が一瞬陰る。

「とにかく！ お兄ちゃんはその人とちゃんと話し合うこと。咲夜とのお約束！」

ビシッとライダーを指差す咲夜。

彼女の言葉は予想以上にライダーの心に突き刺さった。

「そうだな、アーチャーの言葉にちょっと戸惑いすぎたのかもな。麗奈とちゃんと話さなきゃ……」

自分の中で出した答え。

もう逃げない。真っ正面から向き合ってアイツと話そう。

「ありがとな、咲夜」

少女の頭を優しく撫でる。

「ふみゅー……」

気持ち良さそうに撫でられる咲夜。

しかし、先程の言葉から咲夜の表情にかすかな陰りが見られた。

「今日はありがと、咲夜。あの……勘違いならすまないが」

「ん？」

「もし寂しくなったらさ、俺がお前のそばにいるから。ほら、誰かがそばにいるのは幸せだってお前が言っただろ」

咲夜はきよとした表情を浮かべる。

「ほら俺達、もう友達だろ？」

少女の表情が満面の笑みに変わる。

「うん」

「じゃあ、私こっちだから。今日はありがとう、お兄ちゃん」

「こっちこそ、ホントにありがとう」

そう言っただけライダーは衛宮亭に戻る。

その後ろ姿を咲夜は淋しげな表情で見つめる。

「ありがとう、お兄ちゃん。でも——」

風が吹く。

咲夜の雪のように白い髪が揺らめく。

か細い腕は熊のぬいぐるみをただ強く抱きしめる。

「その言葉は、今の私にはちよつと残酷だよ」

○

薄い意識の中、二人のサーヴァントが対峙するのを見る。

「なんでアンタが、私を……？」

息苦しいながらもなんとか声を振り絞って私を抱きかかえるセイバ―に問う。

「マスター——ライダーからアナタのことを頼まれました。自分は麗奈を守る資格がない、だから私にアナタの護衛を頼む。それがマスターと私の契約です」

意識がなんとか正常とはいかずとも、ある程度落ち着いてきた。

「あのバカ！なんでそんなバカみたいなことを」

「なっ、なんなのよ……」

突如彼の笑いが止まった。

だが歪んだ笑みは変わらず顔に張り付け、私を一瞥する。

「そうか——君が衛宮麗奈か」

三日目 月下の闘争（4）

手足が震える。

怖い。ただ目の前の男に恐怖を抱く。

「なるほど、私はどうやらセイバーに感謝しなければならぬらしい。私としたことが、もう少しで大切な生贄を己が手で握り潰してしまうとこだったわ。しかし……」

呆れるような視線で私を見るキャスター。

「これは予想に反しての懦弱さ。宝石老人の弟子の娘ならばと少しばかり期待したのがまずかったか。いや、非があるのは己か。わずながら手を抜いた我が身の失態よ」

男の言葉が全くもって私には理解できなかった。

「なんなのよアンタ！生贄って何？なんでアンタが私の名前を知ってるのよ！？」

「そう一度に問うな、衛宮麗奈。そんな瑣末な問いなど私が語らずしてもいずれ知る日がくる」

そう言つてキャスターは踵を返す。

「逃げる気か、キャスター！」

セイバーの声に振り向くキャスター。

「我に恐怖しながらも剣を向けたことを讃えよう、セイバー。だが先程衛宮麗奈にも言うたが私はここに人探しに来たのであって、死合いに来たのではない。君がここに来たのは衛宮麗奈を護ることであつて私と死合いすることではあるまい」

彼の言葉にセイバーは苦虫を噛む。

しかしキャスターの言葉は正論であり、セイバーは剣を鞘に仕舞う。

「衛宮麗奈」

キャスターに呼ばれ、再び背筋が震える。

「強くなれ、衛宮麗奈。今の君の力量では生贄にするには少しばかりつまらんからな」

そう言い残してキャスターは立ち去る。

「はあっ……」

緊張の糸が切れて、疲れがどっと私に重くのしかかる。
体が倒れる寸前、セイバーが私の背中を支える。

「……ありがとう、セイバー」

セイバーの肩を借りて立ち上がる。背中を近くの木に預け、ゆっくり体力を回復する。

「礼など必要ない。これはライダーからの指示。礼を言うならあなたのサーヴァントにするべきだ」

相変わずの無表情で語るセイバー。

「それに関しては感謝してるよりむしろ呆れてるわよ。自分のマスターを他のサーヴァントに任せるなんて逃げてるようなものじゃない」

私の言葉を聞いたセイバーの表情が突然怒りに満ち、私の頬をひっぱたく。

「イタツ！何するのよ」

「あなたのことは好きになれないと思いましたが、これほど愚か者だったとは……」

セイバーの表情が呆れに変わる。

「サーヴァントにとって、自分のマスターを他のサーヴァントに預けることがどれほど辛くて、屈辱的なことかあなたにはわかりますか？」

「——うっ」

「あなたたちにどういう経緯があつてこういうことになったか私は存じません。しかし昨日はわずかとはいえ、ライダーと言葉を交え、彼の人柄は把握した。彼は愚直なまでに騎士精神に溢れた男だ。その彼が自らの役目を放棄し、昨日会ったばかりの私を信頼してあなたを委ねた。これが彼にとってどれほどの辛さを伴う選択か、あなたにわかりますか？」

「……っ」

原因はわかっている。昨日の私の言葉がライダーを遠ざけた。

それでもアイツは別の形で私を助けようとしている。

たくつ、これじゃあ私がただの馬鹿みたいじゃない。

「あとで……アイツに謝るよ」

私の呟きにセイバーは小さく頷く。

「まあ先に母さんに謝らなきゃいけないけどね、半殺し確定だわ」
諦めのため息。

「その前に……」

私は近くの木に近寄り、死角になって隠れてる赤服の男を引っ張り出す。

「ほう、よく俺の気配に気づいたな、衛宮麗奈」

何事もなかったかのように語るアーチャー。

「まっ、なんとなくね。それと歯食いしばって」

「ん？」

訝しむアーチャーの腹目掛けておもいつきり殴る。

「ぐっ!？」

「話は桜姉さんから聞いた。もうライダーに変なこと言わないでね」
うずくまるアーチャーを放っておいて私は校舎の方に戻る。

○

「覗き見とは悪趣味ですね、アーチャー」

「そんなつもりはないんだがな。いやなに、お互い嫌な役回りを背負わされたものだ」

自身の腹をさするアーチャー。

「なぜあなたがここに？」

「君と同じ役割だよ。まあ、先を越されてしまったがね」

黙り込むセイバー。アーチャーの視線が彼女を写す。

「震えが止まらぬか？」

アーチャーの言葉にセイバー自身、わずかながら先程の震えが続い

てることに驚く。

「まあ無理もない。あの男、存在そのものが悪意の塊。まるで――」

「何か心当たりがあるのですか？」

アーチャーは考えを巡らすも、すぐにため息をつく。

「いや、まだ憶測の域を出ない以上、決めつけるのは早計だな。それより――」

「ん？」

突如、セイバーに厳しい視線を送るアーチャー。

「貴様、本当にジャンヌ・ダルクか？」

「何が言いたいのです？」

同じく厳しい視線を送り返すセイバー。

「君の剣はフランス最古の王の剣と聞く。確かにかの剣ならそれは神聖なものである。しかし、君が今持つ剣は明らかにそういうものの度を超えている。もはや神域の類と言ってもいい」

「……っ」

セイバーはしばらく自身の剣を見つめる。

セイバーの剣は確かにどこか不思議な輝きに満ちていた。

「よくこの剣の正体を見破りましたね」

「これでも数多の戦場を駆け巡っているのね。君のその剣も何回かは拝見しているよ」

「……この剣、『天の使いの加護を受けし聖剣』^{デュランダル}は偉大なる聖天使ガブリエルより与えられし聖剣。これを振るうことは生前でもほとんどありませんでした」

懐かしむように語るセイバー。一方のアーチャーも納得した表情を見せる。

「なるほど、神の加護を受けた君なら持ってもおかしくないものか。だがセイバー、気をつけて損はないぞ」

「どういう意味ですか？」

「『天の使いの加護を受けし聖剣』はその神聖さゆえ、数多くの言い伝えがある。その中には悪意的な言い伝えも残っている。せいぜ

い呑まれすぎないように用心するんだな」
そう言い残してアーチャーは立ち去る。

「言い伝え……」

セイバーは依然輝きを放つ自身の聖剣をただ静かに見つめていた。

○

「あの……ライダー。その……ゴメン」

「すまなかつた麗奈！」

外はすでに夕暮れ。ライダーと自身の部屋で二人っきり。

私とライダーの謝罪は全く同時だった。

「えっ……なんでアンタが謝ってるのよ？」

「いや、そんなこと言ったら麗奈こそ……」

「私は、その……昨日ちよつと言い過ぎたから。アンタがそんなに
思い詰めると思わなくて……そのう、ごめん」

「俺も敵の罠か判断せずに先走ったことを言ってしまったって本当すま
ないと思ってる」

「……あ」

「……う」

「プッ、あはは」

「えっ？」

突然笑い出した私にライダーは戸惑う表情を見せる。

「いや、二人揃って謝るつてのがあまりにも可笑しくて」

笑いが止まらない。

よくわからないけどなんだかすつきりして温かい、そんな気持ちに
なった。

「まあいいや、とりあえずお互い非があるってことで謝るのはなし。
だから——」

少し恥ずかしいけど手を差し出す。

「麗奈？」

「改めてよろしくつてこと」

差し出された手を見てライダーの表情に笑顔が戻る。

「ああ。改めてよろしく、麗奈」

○

麗奈とライダーの仲直りを凜達は部屋の外からこっそり見守っていた。

「二人の仲が戻ってよかったです」

安堵する桜。

「ホントよ。たくつ、麗奈のバカも素直じゃないんだから」

ため息混じりの凜。

「まあ、そこら辺はさすが親子といつかなんといつか」

「なんか言った、桜？」

「いえいえなんでも。それより麗奈ちゃん、さっきから頭の方をさすってますけど……」

「ああ、さっきあいつアタシの授業サボりやがったから一発ぶん殴つていたの」

「あらら、昔の癖が戻っちゃいましたかね？」

苦笑いを浮かべる桜。しかし凜の表情があまりすぐれないのを訝しむ。

「学校で何かあったんですか？」

凜は答えるのに一瞬躊躇し桜の表情をうかがう。

「あんたには話しておくわ。ちょっと居間に来なさい——ってどうしたの、セイバー？」

セイバーは先程からずっと凜たちと同じように麗奈たちの様子を見つめていた。

「えっ！？ いや、なんでもありません……」

「そう？ まあいいわ。そうだ、今日は肉じゃがでも作るから下ごしらえ頼まれてもらえる？ レシピはここに書いてあるから」

と言って凜はメモをセイバーに渡す。

「え、いいのですか？私がやっても」

「別にアンタのことはもう疑ってないし、料理の腕前は桜から聞いてるから」

そう言い残して凜たちは居間へ向かう。

「なるほどマスターの言った通り、ここの人達は温かい」

再び麗奈の部屋の方に目を向ける。

わずかに開いた扉から二人の談笑している姿が見えた。

「わからない。マスターの悩みが解決したというのに、なんで——」
自分の胸を抑えるセイバー。その姿は一人の寂しげな少女のようで。
「なんでこんなにも胸が痛いんだ……」

「キヤスターが麗奈ちゃんを？」

先程の出来事を凜から報告された桜は驚愕を隠せずにいた。

「そう。キヤスター自身の目的は不明。しばらくはアーチャーにも麗奈へ目を配るよう頼んだわ」

「そうですか……」

「あつ、一応麗奈からはライダーには今日あったことは言わないように言われたわ。あんまり余計な心配はかけたくないんだってさ」

「わかりました。それにしてもキヤスターはなんで麗奈ちゃんのことを……」

凜の表情がより険しくなる。

「アタシ、キヤスター自身には会ってないけど、気配だけは感じたわ。あの気配」この世全ての悪アンリ・メユと同じものを感じたわ」

桜は二度目の驚愕の表情を見せる。

「『この世全ての悪』って、前回の聖杯戦争で姉さんたちが壊したはずじゃあ……」
この世全ての悪アンリ・メユ

聖杯の正体であり、あらゆる万物を破壊する世界の業つみを背負いしも

の。

しかし前回の聖杯戦争において凜と士郎、そしてセイバーの手により、破壊されたもの。

「私にもわからないわ。それに感じが同じってだけで『この世全ての悪』そのものだとはまだ言い切れない」

居間に重い沈黙が降りる。

「とりあえず、キャスターの正体がなんにしろ、警戒するに越したことはないわ」

「わかりました、姉さん」

○

少し遅い夕食が終わり、しばらくして時刻も深夜まで一時間を切ったところ。

すでに衛宮邸は深く静まり返っていた。

明日は土曜なので学校は休み。とはいえ、母さんは明日会議があるとかで学校に行かなきゃいけないらしいけど。

「おしつ、準備オツケー。行くわよ、ライダー」

部屋で着替えを済ませ、私は誰もいないのを確かめながら玄関へと向かう。

「でもホントにいいのか、レイナ？あれほどお前は行きたくないと言っていたのに」

後ろから心配げな表情でライダーもついて来る。

「アンタが行きたいって言うから行くのよ」

私は結局、ライダーがアサシンと戦うことを許可した。

せつかく彼と仲直りするのだから彼の望みも許容しようと思ったのだ。

「俺は構わないんだが……」

しかしライダーも引き目は感じているらしい。

「ほら、シャキツとしなさいよ。アンタは三国志一の喧嘩好きの孫

策でしょ。せつかく私が許可出したんだから素直に甘えなさい」

私の言葉を受けるとライダーの表情も優しい笑みに変わる。

「ありがとう、麗奈」

一瞬ドキッとしてしまう。

「か、勘違いしないで。これはお詫びなんだから」

ライダーの顔から目を背けて玄関が出る。

今の表情はちよつと反則だと思つ……。

音を立てずに衛宮邸を出る。

待ち受けるのは暗殺者のサーヴァント。

本来なら闘争に向いていない英霊自らの戦の誘い。

そこにはどんな罠が仕掛けられてもおかしくない。

それでも――。

「行くわよ、ライダー」

「応」

絶対に負けないと心の中で誓い、私たちは夜の新都へと向かう。

三目 月下の闘争(4) (後書き)

セイバーの宝具がFate/Apocryphaと異なりますが、Apocryphaでは彼女のクラスはルーラー、afterの彼女はセイバーなので宝具が違っている設定で(正直に言うところジャヌの公式設定があることを最近まで知りませんでしたw)

三日目 月下の闘争(5)

時刻はすでに深夜を刻み始めていた。

新都の一角にある何もない野原のような公園。

昼に人がさほど少ないのなら当然の如くこの時間帯に人がいるはずもない。

「本当に彼らは来てくれるのでしょうか、マスター……」

闇夜に溶け込むように漆黒のローブに包まれた男が一人。

その隣に千堂襖馬がベンチに腰を掛け、何度目かの煙草を口にくわえる。

「まあこっちのサーヴァントはアサシン。普通なら畏だと思って警戒するわな」

「しかし、それでは——」

「まあ間違った選択肢ではあらへん。擬似言うても聖杯戦争には変わらん。敵の誘いに乗るなんて馬鹿馬鹿しいもんや。でもそんな真つ当な連中、わざわざ相手する意味もあらへんやろ」

しばらく沈黙が降りる。

冬の深夜の風は突き刺さるように肌に纏わり付く。

ザッ——。

地面を踏み蹴る音が鳴る。その音は間違いなくこちらに近づいてくる。

「どうやら、アンタが相手するには十分に相応しいやつみたいやで」
二人の人影が目の前で立ち止まる。

衛宮麗奈とライダー。

二人の表情は決意に固まっていた。

○

「遅れて申し訳ありません」

私の家からこの公園までわりと距離はある。もう少し早く出るべきだったと少し後悔。

「そんなん別に気にせんでええよ。ほな、役者も揃ったことやし、早速始めよか」

そう言つて千堂さんは私を手招きする。

「ん？」

「ワイらは外野や。おとなしく観戦席で観ようや」

私はライダーの方に顔を向ける。

心配するな——彼の表情がそう物語っている。

「アンタが応じたんだから絶対に勝ちなさいよ」

私はそう一言つけて千堂さんの隣に座る。

「人払いの結界は張つといたで。思ふ存分やるんや」

サーヴァント二人にそう告げる千堂さん。

二人は無言で互いを見つめ合う。

風が荒々しく吹きすさぶ。

まるで何時間にもおよぶ——しかし実質、分にも満たない沈黙。

破つたのはアサシンから。

「まずは礼を言おう、ライダー。私の果たしにに応じてくれて」

「へっ、感謝するのはこっちの方だ。正々堂々の闘い。これこそが俺の求めていたもの」

互いに構える。ライダーは大剣、アサシンは——。

「苦無くない？」

黒色の刃物がアサシンの指の間に握られ、それが片手に四本、計八本の苦無を構える。

ここで今更ながらも一つの疑問を抱く。

そもそもアサシンのクラスはハサンと呼ばれる暗殺集団の中から選ばれるという、サーヴァントの中でも特殊なクラスだ。

その特長はそれぞれのハサンによって異なるけど共通点として黒い

ローブに笑い髑髏こつていの仮面を被っている。

目の前のアサシンはたしかに全身黒のローブに覆われてるけど仮面は被っていなかった。

「麗奈はん、アンタの疑問は正しいで」

横で千堂さんがほくそ笑みながら語る。

「アサシンのクラスは本来ハサンの中の一人が召喚されるってルールや。でもな、前回の聖杯戦争かてアサシンはキャスターによる召喚ちゅうイレギュラーのせいで本来呼ばれんはずの者を呼び出したそれと同じや。これは擬似聖杯戦争。本来ありえないイレギュラーが起きてもおかしくないもんや」

解説しながらまた新たな煙草に切り替える。

新たな煙草に火が点いた瞬間、二人のサーヴァントの闘争が始まった。

○

動いたのはアサシン。

目にも止まらぬスピード。否——それは気配そのものを姿ごと消す。サーヴァントにはクラス別能力というものがある。

これは本来の英霊自身が持っているそれぞれの能力とは別にクラスそのものが保有する能力だ。

サーヴァントのマスターになつたものは頭の中で強く念じることです。それぞれのスキルデータを透視することができる。

アサシンのクラス別能力は気配遮断。

その名の通り自らの気配を完全に遮断する能力。

ただし大きな動きをすればそれも解除される。つまり、アサシンが攻撃に転じる瞬間、気配を再び感知されてしまう。

ライダー自身、いつ攻撃されてもいいように全力で警戒する。

突如、背後におもいつきり剣を振り上げる。

カキン、と渴いた音が鳴り、八本の苦無を弾き飛ばす。

しかし反撃に転ずる間もなく、アサシンは再び姿を消す。

次は横から苦無が飛んできた。

「チッ！」

再び剣で弾くライダー。

すぐに第三、第四の攻撃がくる。その度に剣を振って苦無をまとめて弾く。

同じように第五の攻撃も弾こうとした瞬間、ライダーの目の前にアサシンが現れる。

その右手にはやはり苦無が握られていた。

乱れのない動きでライダーに向けて苦無を振る。

剣を盾にして攻撃を防ぐものの、から空きとなった腹にアサシンの蹴りが入る。

「がっ！」

ライダーの身体ごと吹っ飛ばす威力の蹴り。ライダーはなんとか地面を踏みにじり、倒れずに済む。

しかし、休む間もなくアサシンは再びライダーの目の前に現れ、右手の苦無を振り下ろす。

アサシンの攻撃を再び剣で弾くが、その勢いを利用してアサシンは空中で回転し左手に握られた苦無を振り上げる。

「ぐっ！」

ライダーの脇腹が切り裂かれる。

後方に退き、流れ出る血を手で押さえる。

傷は浅い。咄嗟に身をくねらせなければ致命傷になっただろう。

ライダーは悟る。

状況は不利。その理由。

決して気配遮断だけではない。

スピード。

アサシンの動きの一つ一つが圧倒的なスピードから生成される。

自らの気配を消し、攻撃に転ずる時も一切の無駄を省く。

一方のライダーは大剣が武器というのもあり、どうしても動きが緩慢になってしまう。

スピードにおいてライダーはアサシンに圧倒的不利だった。

「その程度の速さでは我に刃は届かぬぞ、ライダー」

あまりにも致命的な不利。

しかしライダーの表情は曇ることなく、むしろ笑みを零していた。

「追い付けねえなら――」

再び剣を構えるライダー。

「――追い抜くまでさ」

突如、空気が一変する。

暗く静かな公園にまるで嵐の前触れのように風が振動する。

「其が名を下すとともに、真なる姿を現せ！」

ライダーの言葉とともに大剣が変形した。

「『古錠刀』！」

下される宝具の真名。

その刀身は青龍刀の如き曲解。

――かつて父、孫堅そんけんから息子の孫策、そして弟である孫権に受け継がれた大剣。

呉を長く見守ってきたライダーの宝具『古錠刀』――。

「それがアナタの宝具か、ライダー」

「それはアンタ自身の体で確かめてくれ、アサシン！」

剣を横に薙ぎ払う。

ライダーの一撃をかわしたアサシンは大きく背後に下がった。

再び苦無を構えようとするも、一瞬で目の前にライダーが現れる。

「追い付いたぜ！」

振り下ろされる刃。

先程とはまるで別人のように素早いライダーに驚愕するも、冷静に

攻撃を苦無で捌くアサシン。

しかしアサシンの予想する以上にライダーの攻撃は素早く、攻撃を捌ききれないアサシンの身体は次々と切り裂かれる。

ライダーの宝具、『古錠刀』^{こていとう}の能力は単純な能力上昇系^{スキルアップタイプ}。

剣そのものに内包された魔力により、使用者の筋力と敏捷を一次的に上昇させる。

特に敏捷に関してはサーヴァントとして最高位のランクにまで跳ね上がる。

それはスピードを武器とするアサシンにとって最悪とも言えるべき相性の宝具だった。

「ラァッ！」

「ぐっ！」

ライダーの刃がアサシンの顔を覆っていた布ごと切り裂く。

アサシンはそのまま大幅に後退。

さらなる追撃を仕掛けるライダーを、苦無を投げて牽制する。頭を上げるアサシンの顔には先程までの布がなく、素顔がはっきりと見えた。

乱れのない黒髪に引き締まっていながらも整った顔立ちは明らかに東洋人のものであった。

「『古錠刀』^{こていとう}……なるほど、三国時代の孫家の宝刀か。ならば——」
アサシンの腰から一本の刀が現れる。

その刀身は凶々しいほどまでの黒色を帯びていた。

「我が妖刀をもって打ち砕いてしんぜよう」

瞬間、再び空気が揺れる。同時に刀が脈打つ。まるで生き物の如く。否、それは怨みや憎しみを体現せしもの。

アサシンの言う通り、あれは間違いなく妖刀の類であった。

「さあ、受け止めてみる、ライダー！」

○

「なによ、あれ!？」

全身が震えだす。

聞こえる。

あの刀から、助けてくれという哀願、お前も死ねという恨み言、あらゆる怨念が言の葉としてあの刀から際限なく漏れ出る。

「ワイもアイツの宝具を見るのは初めてや。なるほど、どうりで使いたがらないわけや」

そう零す千堂さんの表情にもいつもの笑みが消えていた。

「麗奈はん、もう少し下がるとき。アイツなら大丈夫やろうけど、念のためにさらに結界を張っとく」

○

「妖刀——」

風が吹き荒れる。

アサシンの表情が苦悶に染まる。

それも当然、あの妖刀から滲み出る呪いは対峙するライダーでさえ肌で感じ取れるほどだ。

刀を握るアサシンにはそれだけで苦痛のはず。

故にライダーは構える。

それが苦痛を伴う宝具を使用するアサシンへの敬意の現れなのだから。

「——千子村正!」

せんじむらまさ

放たれし黒き斬撃。

ライダーは古錠刀をもってそれを受け止める。

「なっ!？」

ライダーは斬撃を打ち消したものの、その衝撃で数メートル吹き飛ばす。

「ライダー！」

傍らで見守る麗奈の声もライダーには届かなかった。

「なんだこれは!？」

数多の亡者がライダーを取り囲む。

首のない者。

肩から腹部の辺りまで切り裂かれた者。

皆どこかしら切り裂かれた跡がある。

助けてくれ……。

死にたくない……。

お前も一緒に……。

死ね、死ね、死ね、死ね……。

口ある者、なき者に関わらず、怨念を吐き出す亡者たち。

亡者の群れはゆっくりとライダーを覆いつくした。

ライダーが見ているものは幻術の類。

それがアサシンの宝具——『千子村正^{せんじむらまさ}』の能力だ。

かつて幕府の大名、徳川家康が所持したと言われる妖刀村正。

その刀はあらゆる者を切り裂き、切り裂いた者の怨みを吸い取ってきた。

所持者にすらあらゆる不幸を与えたとされる名刀。

アサシンはその怨みを斬撃として放ち、ライダーに村正の犠牲となつた亡者たちの幻覚を見せているのだ。

「ぐっ！」

口から血を吐き出すアサシン。

千子村正は妖刀であるゆえに使用者本人にも怨みを直接手に取るというリスクがある。

アサシンは認めたのだ。

ライダーが自身の禁忌とした宝具を使わなければならぬほどの相手だと。

「だが……私の勝ちのようだな、ライダー」

ライダーは倒れて以来ピクリとも動かない。

それも当然、数千の亡者の怨みをぶつけられてはサーヴァントとはいえ、堪えることすら奇跡といえよう。

アサシンは名残惜しむこともなく、現世の主のもとへ戻る。

その足が止まる。

アサシンは驚愕の表情とともに振り向いた。

ライダーは立っていた。

その表情は疲れと痛みに歪みながらも、古錠刀を支えにして立っている。

「馬鹿な。あれほどの怨念を受け止めて、なお立ち上がるというのか……」

「当たり前だろ……俺は英雄だ」

支えとした古錠刀を引き抜く。

「俺は戦乱の時代で何千、何万もの人間を殺してきた。民のため、部下のため、国のため、そして自分のためにな。もちろん、それを正当化するつもりは全くねえ。だけどな——」

味方に崇められ、敵に恐れられた小霸王、孫策。

彼が辿る道は常に称賛と怨念が入り乱れる道だった。

「——殺してきた奴らの怨念ごときを背負えねえ奴は英雄なんかじゃねえ、ただの殺戮者だ！」

アサシンは悟ったように笑みを浮かべる。

「なるほど。アナタが強い理由、わかった気がする」

再び千子村正を構えるアサシン。

「敬意を評して我が真名を名乗ろう。我が名は服部半蔵^{はっとりはんぞう}。かつて徳

川家康に、そして今世において千堂襖馬に仕えし忍なり」

服部半蔵——戦国時代において徳川家康に仕えた忍のなかでも最も忠義深かったと伝えられた伝説の忍——。

「我が名をもつて再び刃を交えることを願わん」

ライダーもアサシンと同じく穏やかな笑みを零す。

「そっちが名乗るならこつちも名乗んなきゃな。俺は三国時代、江東の小霸王と呼ばれし孫策、字はあさな伯符はくふ！」

ライダーも再び古錠刀を構える。

二人に先程までの緊張の表情はない。

本当の意味で闘いを楽しむ者達の笑顔がそこにあった。

「いくぜ！」

「参る！」

運命の第二ラウンドが始まった。

三日目 月下の闘争（6）

深夜の公園に剣撃が鳴り響く。

大剣と刀、種類の違う剣が互いにぶつかり合う。

二人の表情に苦悶が浮かぶ。

ライダーの古錠刀は一見万能ではあるが、どんな反則にも必ず負担ドーピング
リスクはある。

古錠刀は使用者の筋肉に直接魔力を送るもの。長時間使用すればそれだけ体に負担を与える。

一方のアサシンもまた同義。

千子村正は呪いそのものを体現したような刀だ。相手にはもちろん、呪いの影響は刀を握りしめる自分にすらおよぶ。

互いに負担を背負った宝具を使用し、それに堪えながら闘う二人。しかし、二人はなお笑っていた。

互いが求めた純粹なる戦。

それが実現できた今、なぜ笑わずにいられようか。

「ラアッ！」

「ハアッ！」

何度も交差しあう二人の剣。

地響きすらさせる二人の戦はまさにサーヴァントの闘争だった。

○

「すごい……」

私は二人の闘いにただただ見惚れる。

「純粹なる闘いを求めた忍か……」

私の呟きを聞いた千堂さんは遠くを見るような目でアサシンを見つめる。

「アサシン——服部半蔵は生前、忠義に生きた忍や。主の命に忠実

に動き、時には戦場で、時には敵の本部で暗殺をやつてのけた。もちろんアイツはそのことになんの後悔もないやろ。でもな……」
闘いを楽しむアサシンを千堂さんは微笑ましく眺める。

「アイツは闘いに楽しさを求める武人なんやと思う。敵を容赦なく殺しながらも、心のどこかではやっぱり純粋な闘争を求めていると思うんよ」

何本目かの煙草に火をつける。

「ワイはこの擬似聖杯戦争でやらなきゃいけないことがある。なら、そいつを手伝うアイツの望みが叶わなきゃ嘘やろ？」

普段の馬鹿にするような笑みではなく、穏やかな笑みを浮かべる千堂さん。

「ライダー……」

はたして私は千堂さんほど自分のサーヴァントを理解していたのであろうか……。

わからなくなる自分の気持ちに私はただ拳を握りしめる。

○

カキン――。

数分におよぶ剣激は両者の剣が弾かれることによって終わりを告げた。

それぞれの背後の地に互いの宝具が突き刺さる。

取りに行こうと思えば行けない距離ではない。

しかし、二人にその選択肢は始めからなかった。

お互い肩で息をする。もはや疲労は頂点に達しているはずである。しかし、二人はなお笑っていた。

互いに目と目で語り合う。剣を手放した今、決着をつける方法は一つしかない。

「ウォアアア！」

「ハアアア！」

気合いととも二人は拳を振り上げ、壮絶な殴り合いを始める。顔面、腹、容赦なく互いが互いの肉体に拳をぶつけ合う。

血と汗が同時に飛び散る。意識を失いかける。

それでもなお、その拳を動かすのはひとえに己の勝利のため。

実力を認めた相手だからこそ、勝ちたいという気力だけが二人を突き動かす。

空間が揺れるのを千堂襖馬は感じ取る。

「結界が破られたやと！？」

そう呟く襖馬の表情は驚愕。

千堂襖馬は優秀な魔術士だ。

こと結界を作ることに関しては関西の魔術士随一とも言えよう。

今回のライダーとアサシンの闘いにおいても、作り上げた結界は人払いと視界遮断の二重結界。

普通の魔術士ですらも彼らの闘いを覗くなどまず不可能である。

ゆえに千堂襖馬は概ね正しい。

もし間違いがあるとすれば、聖杯戦争には決してマスターだけが魔術士ではないことを念頭に入れるべきであった。

「キヤスターあたりやろうか。チッ……」

持っていた煙草を握り締める。

「麗奈はん、二人の戦闘を中止しよう。このままじゃ他の連中にうちのサーヴァントが対策され——」

襖馬の言葉を遮ったのは他でもない衛宮麗奈自身だった。

麗奈の瞳には、ただ二人のサーヴァントの闘いだけが写っている。

「あの二人の闘いは、多分……止めちゃダメです」

「——っ！」

襖馬は驚いていた。

先程まで二人の闘いによりあまり乗り気ではなかった麗奈が最後まで二

人の闘いを見届けようとしている。

襖馬は彼女の言葉にただ笑みを浮かべる。

「せやな。ワイから言い出したことなんやから、ちゃんと見届けんとな。とりあえず簡易結界だけでも貼っとくか」

「どうしたよ、アサシン。まさかこれで終わりじゃあるめえ」

「フツ、そっちこそそろそろ辛くなってきたのではないか？」

荒い息遣いの二人。

全身傷だらけになりながらも、やはり二人の笑みは消えていない。とはいえ、二人の体力はすでに限界に近い。

互いに悟る。

次の一撃で勝負が決まると。

握り締める拳。流れる血と汗。

相手の隙をうかがうため、互いに身動きはしない。

静かな時間が流れる。

まるで永遠に時が続くような感覚に襲われた瞬間――。

――動いたのはまったく同時だった――。

「ウォラアア!!」

「ハアアアア!!」

踏み出す。

わずか一瞬にして、二人は互いに迫り――。

「ぐっ!!」

「がはっ!!」

ライダーはアサシンの顔を、アサシンはライダーの腹を最大の力を込めて殴る。

常人の力を遥かに越えたサーヴァントのパンチは余りにも強大で、二人はそのまま数メートル吹っ飛んだ。

同時に倒れる二人。

荒い息遣いの彼らはもはや立ち上がる力もない。

「ライダー殿。私は嬉しい」

「……あん？」

「私はこうやって自分の感情をぶつけられる闘いをしたことがなかった。常に任務を優先し、己が感情を殺してきた」

「……っ」

「礼を言わせてくれ、ライダー。この闘いく、あまりにも楽しかった」
自身の本心を打ち明けたアサシンを、だがライダーは豪快に笑い飛ばす。

「なに言ってるんだ。お互いもう動けない身だろ？ならこの勝負は引き分けた」

ライダーは拳をまっすぐ夜空へ振り上げる。

「アサシン、俺達はこの聖杯戦争を勝ち抜くんだ。そして再戦の機会ができた時、その時に決着を着けよう」

アサシンは呆然としていた。

お互い戦乱の時代を生き抜いた者。

しかし孫策は自らの意志で戦いを望み、自身は与えられた役割をやるだけ。

そんなあまりにも生きた境遇が違う自身にライダーは再戦を申し込んだ。

その言葉は忍として恐れられた半蔵にとって、最も望んでいた言葉だった。

「ああ……そうだな」

二人のサーヴァントのもとにそれぞれのマスターが駆け寄る。

「どうや、楽しかったか？」

「ええ。襖馬殿、あなたにも礼を言わねばな」

「ええんよ、礼なんて。あんたが満足できればそれでええ」

「そうか。それと結界が破れた時も闘いを中断せずにすまなかった」
「なんや、気付いてたんか。まあ、簡易結界は貼つといたから一般人は巻き込まへんかったし、幸いにも結界が破れたのはお互いの真名を名乗った後やから、大事なところは聞かれずに済んだみたいや」
襖馬の言葉に安堵するアサシン。

「ほな、しばらく休みや。ご苦労様」

○

「ライダー、怪我大丈夫？」

私がライダーに駆け寄るとライダーは力ない笑みを浮かべる。

「なあに、心配はないさ——って言いたいところだけど、これはしばらく傷を癒すのに専念しなきゃいけない」

普段聞かないライダーの弱音に私は少し動揺する。

「その状態でも霊体になりたくないの？」

私の言葉に彼はただ苦笑いする。

「しょうがないわね」

私はそう呟きながら、ライダーの腕を私の肩にまわして立ち上げさせる。

「麗奈……怒らないのか？」

「怒ったところでどうしようもないでしょ。それに——」

「ん？」

私はライダーを見つめる。

ライダーは傷だらけだけど、その傷は彼にとっての誇りになるのだろつ。

「あんたは確かに武人ね」

「なんだよそれ」

私とライダーは互いに笑い合つと千堂さんがこちらに来る。

アサシンは霊体化されてるためか、その姿を消していた。

「改めておおきに。うちのアサシンもかねがね満足つぽいわ」

「いえ、それより結界の方は」

千堂さんは珍しくいらついた表情をする。

「やっぱり魔術で外から破られてもうた。しかもワイの分厚い二重結界を破ったんや。おそらくキャスターレベルの魔術士が絡んでるかもしれへん」

——キャスター。

私は今朝会ったあの茶色コートの男を思い出し、身震いする。

「どうかしたん？」

「えっ？ なっ、なんでもないです」

千堂さんは怪訝な顔をしながらもそれ以上は追求しなかった。

「千堂さんはなんで聖杯戦争に参加したんですか？」

私の疑問に千堂さんは答えに困っている。

「まあ、ワイはある人の依頼を受けて人探しをしてるんや。麗奈は
んはどうして戦うん？」

そう問われた私は、しかし何も答えられない。

そうだ——。

私はなんのために戦うのか？

私はただ巻き込まれただけ。

だからといって私は理由もなくライダーとこれから戦っていくの
だろうか。

「別に答えられへんならそれでもええよ」

「ごめんなさい」

千堂さんはライダーに目を向ける。

「ライダーはん。アサシンとの再戦、楽しみにしてるで」

「ああ」

そう言って千堂さんは私たちの前から去った。

「私たちも帰ろっか」

「そうだな」

私はライダーを支えながら自宅へとゆっくりと歩き始める。

三日目 月下の闘争(7)

千堂襖馬の考えは当たっていた――。

漆黒が不気味に支配する部屋の中、キャスターは一人水晶玉の前でほくそ笑んでいた。

水晶玉は先程キャスターが魔術にて破った結界の先、つまりライダーとアサシンの闘いを写していた。

「ククッ、なるほど、あれが衛宮麗奈のサーヴァントか。御するにはたやすそうだが、さて……」

水晶玉を眺めながら笑みを絶やさぬキャスター。

「あとはこの映像を見た他のマスターがどう動くか、か……。ククッ」

邪悪。

ただそうとしか表現できない不気味な笑み。

「強くなってくれよ、衛宮麗奈。そうでなければあまりにもツマラン」

凜とセイバーのマスターを除く他のマスターたちはキャスターと同じ映像を眺めていた。

深夜の公園に違和感を抱いたマスター達は、キャスターによって結界が破られるまですっと公園を監視していたのだ。

「ククク、クハハハハハハハ！」

その内の一人、ランサーのマスターであるセルディア・ガラムヴァルドは狂喜の笑みを零していた。

その様相は普段の冷静沈着なセルディアの姿を見ているランサーを驚愕させるほどに、あまりにも異様だった。

「どうした、マスター？ はっきり言うが気持ち悪いぞ」

そう述べるランサーに一瞥することなくセルディアは語る。

「あの女は遠坂凜の娘の名前を呼ばれた。まったく僕としたことが、

彼女と会ったあの日にこのことを知っておけばもつと楽に事を運べたということか。まあいい、これで遠坂凜の居所も掴める」

セルディアの使い魔は公園での一戦後も麗奈たちを監視している。

「ついに我が悲願が達成する時が来た。待っている、遠坂凜。貴様とついに決着を果たす時が来たのだ！」

邪悪な笑みを顔に張り付かせたまま、セルディアはランサーの方に振り返る。

「今日は充分に休めよ、ランサー。明日、遠坂凜を襲撃する」

漆黒の仮面とマントに身を包み、キャスターやセルディアと同じ映像を眺める者がいた。

「ライダーのマスターはやはり麗奈か。まったく、擬似聖杯はいちいち戦いにくい相手を選んでくれる」

そう呟く仮面を被りし者は、何もない虚空に語るようにさらに呟く。

「さて、我々は未だ動く必要はないと判断したが、お前はとうした？バーサーカー」

漆黒の空気は仮面の男に込めているのか、まるで吠えるように激しく震える。

「やはり戦場に出たいか。しかし、今出るにはリスクがありすぎる」男が言葉を紡ぐと同時に空気の震えも収まる。

「もう少し待っておけ。時がくれば、その剣を存分に振るわせてやる」

○

ライダーの腕を支えながら二人で自宅を目指す。しばらく無言が続く。

先に口を開いたのはライダーだ。

「改めて礼を言わなきゃな。ありがとう、麗奈。今日は本当に楽しかった」

微笑みながら礼を言うライダー。

「私は別に何もしてないじゃない」

「いや、麗奈は俺の闘いを何も言わずに見守ってくれた。ただそれだけで嬉しいんだ」

うつ……ここまでストレートに言われるとけっこう恥ずかしい。

「どうした麗奈。顔が赤いぞ？」

「うつ、うるさい！もう喋るな、バカ」

私の悪態に苦笑いするライダー。

そんな他愛もない会話の中、私はさっきの千堂さんの言葉を頭の中で反芻した。

『麗奈はんはどうして戦うんや？』

特に叶えたい願いがあるわけでもなく、ただ単に巻き込まれただけの闘い。

それでも、たとえ擬似聖杯と呼ばれる物であっても、もし願いが叶うなら私は――。

――もう一度先輩と――。

「麗奈？」

ライダーが心配そうに覗き込む。

「なんか考え事か？」

ライダーの問いに私は無言で首を横に振る。

自分に腹が立つ。

自分勝手な考えが一瞬でも頭の中によぎったことを。

もうあの日常は戻って来ない。

そう受け止めたはずなのに……。

しばらく歩くと目の前に人影が見えた。私はその姿に戦慄する。

夜空の下においてなお輝く銅の鎧。オールバックの長い金髪をたなびかせるその男はどう考えても現代の人間とは異質の存在感を放つ。
「サーヴァント!?!」

まずい。

ライダーは重傷。この状態で他のサーヴァントに遭遇したらどう考えても太刀打ちできない。

——パチ、パチ。

男は微笑み、拍手をしながらこちらに近づく。

「なかなかいいものを観させてもらったよ」

「テメエもサーヴァントか!」

元の姿に戻った大剣を片手で構えるライダー。

「まあ待て。手負いの者に手をかける趣味はない」

男は両腕を広げて戦う意思のないことを示す。

かといって警戒を解くわけにもいかない。

「あんだ、バーサーカー?」

この三日間、私は六人のサーヴァントとすでに会っている。

聖杯戦争に参加できるサーヴァントは原則七体。

なら消去方でこいつは自動的にまだ出会っていないバーサーカーということになる。

しかし私の発言に不満を感じたのか、男は笑顔を崩す。

「理性を奪われた獣と同等に見られるとはな……とはいえ、誇るべき名でもないのはたしかか」
クラス

そう呟きながら男はマントを翻し、自らの名を名乗る。

「我が名は『アヴェンジャー』! 今回の擬似聖杯戦争の第八のサーヴァントだ」

「なっ——!?!」

アヴェンジャー、『復讐者』のサーヴァント。

列記としたクラス名ではあるけど、過去の聖杯戦争において、ただ

の一度しか現れなかった異例のサーヴァント。

なんでそんな奴がここに？

しかも第八のサーヴァントって？

「今回の擬似聖杯は擬似と謡いながらその力の在り方は本来の聖杯とは別の物らしい。ゆえに俺のような規格外イレギュラーすらも呼び出せる。まったく、ハタ迷惑な話だと思ったが、そう悪いことばかりでもない
と理解した」

言いながらアヴェンジャーは自分の剣を引き抜く。

その刀身は暗く染まる夜の道にすら、まるで自らを誇示するよう黒く輝く。

「ライダー、貴様に『決闘』を申し込む」

私だけでなく、ライダーですらアヴェンジャーの言葉に驚く。

「驚くことはなかるう？ものふ土が強者を求めるは必然だ。先程の闘いを観て、俺はお前が気に入ったんだよ」

確かに言ってることはわからなくもないけど相手が『復讐者』であるなら話は別。

「安心しろ。クラスこそアヴェンジャーに置かれるが、どういうわけかその領分は我がマスターに譲ってしまっている。俺に残っているのは退屈という二文字だけだ。だが、貴様とアサシンの闘いを観て、やはり俺は土なのだと悟った」

「……っ」

「もちろん今とは言わん。やるならば互いに万全でなければ嘘だ」
そう言いながら黒い剣を仕舞い、私たちに背を向ける。

「ではその時を楽しみにしているぞ、ライダー」

そう言い残して私たちの前から立ち去るアヴェンジャー。

「……なんなのよ、アイツ」

残された私たちはただ呆然としてしまう。

「考えるのは明日にしよう、麗奈。今は帰って休む方が先決だ」

「……そうね」

確かにここで考えていても話にならない。

私は再びライダーを支えながら帰路に着く。

「にしても、冷静そうに見えてだいぶ興奮してるみたいね」

「やっぱりバレちまったか。悪いな、麗奈。でも——」

彼の全身が震えていた。その表情はまるで先程までの闘争者のような笑顔で——。

「武者震いが止まりやしねえ」

直に感じ取れる彼の興奮。

彼らしい——なんて呆れながら、心の中に芽生えた不安を無理やり私は押し殺した。

擬似聖杯、キヤスター、第八のサーヴァント。あらゆる事態が錯綜し、混乱するなか、私たちにとって聖杯戦争が始まってから最初の休日が訪れる。

F a t e / a f t e r
T h i r d d a y s f i n i s h a n d g o t o f o
r t h d a y s .

三日目 月下の闘争(7) (後書き)

三日目終了でございます

ここまで読んでくれた皆様、本当にありがとうございます

ここで起承転結の起が終わったところですね

ようやく他の陣営もサーヴァントが出揃いました

サーヴァント同士の殴り合いという熱血展開に持ち込みましたが、
自分の文章力のなさを改めて痛感します

アサシンとの戦いと新たな敵の出現に興奮を抑えきれないライダー
一方、混乱する状況に不安を感じる麗奈

対照的な二人のコンビがこれからどうなっていくのか
zeroライダーのように煎餅片手に見守ってやってください

——現陣営状況

衛宮陣営

- ・衛宮麗奈&ライダー (孫策)
- ・衛宮凜&アーチャー (エミヤ)
- ・??? (仮ライダー) & セイバー (ジャンヌ・ダルク)

敵陣営

- ・千堂禊馬&アサシン (服部半蔵)
- ・????&キャスター

- ・セルディア・ガラムヴァルド&ランサー
- ・仮面の男（衛宮士郎？）&バーサーカー
- ・????&アヴェンジャー

四日目 衛宮家急襲(1) (前書き)

冬コミの作業等で少し遅れちゃいました、申し訳ありません
では続きをお楽しみください

四日目 衛宮家急襲（１）

土曜日、聖杯戦争が始まってから初めての休日になる。

私は一人、部屋の中で読書にふけこんでいた。

周りからは体育会系に見られる私だが、どちらかと言えば静かな部屋で本を読む方が好きだ。

いたるところが本で埋め尽くされ、桜姉さんには衛宮家の図書室とすら呼ばれている。

思えば聖杯戦争が始まってから、こうやってのんびり本を読む暇などなかった。

熱い紅茶の香りを楽しみ、ゆっくりとすすむ。

最近はいろいろな意味でバタバタしてたから余計に心地がいい。

今読んでいるのは北方謙三という作者の三国志。

他の三国志にはないハードボイルドな格好よさがあり、たいていの武将が格好いいか、おちゃらけてるかのどちらかでなかなか面白い。

しかし、この作品でもやはり孫策は変わらない。破天荒で短気、戦馬鹿のくせにたまに思慮深い。

どの三国志作品でも彼の性格は変わらない。

それは、今隣の部屋で休息をとっているライダーも同じだった。

昨日の闘いを、やはり私は後悔していた。

本来ならいつ敵の襲撃がきてもいいように、極力無駄な戦いは避けるべきだ。

母さんは職員会議で今は学校。

今この家にいるサーヴァントはライダーとセイバーのみ。

もし今、敵のサーヴァントが襲い掛かると考えると、やはり万全の体制は整えるべきだ。

そついう意味では、やはり昨日の闘いは無駄なものだった。

でも……。

「あんなに楽しそうだったのに、止められるわけじゃない……」
苦々しく、私はそう呟く。

――。

しばらく読み耽っていると隣の襖が開き、ライダーがこちらに入ってくる。

「……怪我は大丈夫なの？」

「まだ本調子ってわけじゃねえが、そこそこ動ける程度には」
そう言って屈託のない笑顔で片腕を振り回す。

私は苦笑だけを浮かべて再び本に目を向ける。

「おっ、何読んでんだ？」

「うわあっ！」

突然ライダーが本を覗き込む。ていうか顔が近い！

「俺の真名が載ってんじゃん。どれどれ……」

ライダーはいきなり私の手から本を強奪する。

「あっ、ちよっ、勝手に取るな！」

奪い返そうと思ったが、彼の表情がいきなり真剣になったので、ため息だけつくことにした。

普段の様子からは想像できないが、意外にも彼は読書好きだ。

昨日帰って自室で傷を癒している間も私の部屋から数冊の本を取っている。

諦めて別の本に手をだす。

たまには想子から借りたラノベでも読んでみようか。

「あっ……」

ラノベを読みだして数分してから気づいたけど、ライダーが今読んでいる巻はたしか――。

見るとライダーは本を閉じ、何か考えているのか表情がさらに鋭くなる。

「なるほど……うん、おもしれえ」

彼は何か感心したかのように頷いている。

「……どうした？そんなポカーン顔で」

「いや、てつきりあんた、怒ると思ってたから拍子抜けしちゃって」
ライダーに渡した巻は北方三国志で孫策が死ぬ巻でもある。

「……まあ、気持ちいいもんじゃねえけどさ、こういう解釈もあり
っちゃあありだと思ってね」

北方三国志の孫策の死は大幅に改変されている。

ある美女に一目惚れした孫策は夜な夜な彼女に会いに行っていた。
その美女も孫策と会っているうちに、だんだんと彼に惹かれていく。
しかし、彼女は孫策の敵の一人である曹操そうそうの刺客であり、彼女の罠
にはまった孫策は敵軍の集団に襲われ、その傷が元で亡くなる。
もちろんこれは、悲恋を絡めた北方氏による創作だ。

「たしかに敵とはいえ、ここに書かれている孫策はその美女に恋を
して、彼女も孫策のことを好きになったんだろう」

淡々と語る彼の表情はいつもの爽やかさに、どことなく陰りを帯び
ていた。

「ならその孫策は天下は取れずとも、決してその死に後悔はなかつ
たんじゃねえかなあ」

一瞬、心が締め付けられた。

ならライダー。

今のあなたは、後悔をしているの？

それはあなたが霊体化を嫌う理由にもなるの？

口に出そうになるのを押さえ込む。

仮にそうだとしても、今の私にできることなんて何もないのがわか
ってるから。

ハアっとため息をつく、突然ライダーが私の頭を撫で始める。

「なっ！いきなり何すんのよ！？」

「いやあ、珍しく俺の心配をするんだなあと思って」

爽やかな笑みを浮かべるも、すぐに陰りが射す。

「ただ俺は——」

「あのう……」

「うわあ！」

突然、ドアから薄暗い声がかかる。

見ると細く開いた扉からセイバーがこちらを覗いて——いや、覗んでいる。絶対私を覗んでる。

「どうしたセイバー？」

私の頭から手を放し、さっきまでの陰りを消した笑みでセイバーに返事するライダー。

「……食事の用意ができました。居間に来て下さい」

それだけ伝えてセイバーはその場を去る。

「おしつ、メシ食うか——って麗奈？」

お気楽なこの男を一睨みして、痛い頭を抱えながら先に居間に向かう。

「どうかしら？和食はせん——衛宮さんには敵わないけど、今回はなかなかイケてると思うの」

少し心配げな表情の桜姉さん。

「うっん、けっこうおいしいよ。この里芋の煮物とか」

そう言いながら里芋を口に運ぶ。

「うふ。ありがとっ、麗奈ちゃん」

「俺はこの鮭の塩焼きが気に入ったな」

ライダーもおいしそうに鮭を食べる。

「ふふ、それセイバーさんが作ったんですよ」

「ぬおつ、マジか！」

驚くライダー。私も実際驚いていた。

料理が得意なのは昨日知ったけど、まさかフランスとは縁のない和食まで料理できるとは思わなかった。

「いえ、その……和食自体ちゃんと作ったのは今回が初めてで、桜からそんなに難しくないと教わったので」

顔を赤くしながらちらちらとライダーを見るセイバー。

ああ、なるほど。

「ライダー、セイバーは頭撫でてほしいみたいよ」

セイバーの顔がより一層赤くなる。

「ななな、何を言うのですかアナタは！」

「ん？そんなんでいいのか？」

ライダーはそう言うてくしゃくしゃとセイバーの頭を撫でる。

「鮭、美味かったぞ」

あまりに恥ずかしいのか彼女は顔を伏せている。

なんというか、とてもフランスを救った英雄とは思えないほどわかりやすい娘だなあ。

そういえば私も頭撫でられたのは先輩が亡くなった時以来だろうか……。

昼食も終わり、桜姉さんが片付けに台所に向かうと、セイバーは一度深呼吸をしていつもの鋭い眼差しに戻る。

「マスター、昨夜はどちらに赴かれたのですか？」

セイバーの言葉に私はビクツとする。

「あああ、やっぱバレてたかあ……」

ライダーはため息をつく。

「家を出る時に誰かに見られてる感覚はしたんだが、やっぱセイバーだったか」

「魔力の低下が見られます。おそらくサーヴァントと交戦したのですね」

「……なんか、いろいろとすまないな」

ライダーの謝罪にセイバーはあわてる。

「いえ、謝られることではありません。サーヴァントである以上、戦いは常に隣にあります。だからこそ昨日も止めようとは思いませんでした。ですが——」

「……ん？」

「一つだけ約束してください。今のように魔力が弱まっている時は極力戦闘を避けてください」

セイバーの一言で居間に沈黙が下る。

ライダーは目を閉じ、腕を組んで考える。

「わりの、セイバー」

苦笑を浮かべるライダー。

「多分ここで了承しても、俺はその約束を破ると思う。もちろん、私的な戦いはなるべく裂けるようにする。でも——」

ライダーが私に顔を向ける。

「麗奈や他の皆に危害をくわえる奴がいたら、たとえどんな状況であろうと俺は戦う。俺は麗奈のサーヴァントだから。だから、その約束には応えられない」

ライダーの答えにセイバーは笑顔を浮かべる。

「なぜでしょう。あなたにそう答えてほしくなかったのに、安堵している自分がいる」

「……っ」

「ならば私も一つ、ワガママを言わせてもらいます。たとえ私はどのような状況に陥ろうと、マスターやマスターが護ろうとするものを私も全力で護ります」

自分の拳を胸に置き、決意の表情をライダーに向ける。

「たとえ代理とはいえ、あなたは私のマスターですから」

不思議な感覚だった。

本来のマスターの命令とはいえ、なんの関係もない私たちと一緒に闘おうとするセイバー。

普通ならありえないことだ。

サーヴァントである以上、ライダーもいつかは戦わなければいけない相手。

それを彼女は何の迷いも見せずに護ろうとする。

それが彼女の強さであり、同時に彼女が英雄なのだと改めて悟る。

その強さが、私には少しだけうらやましかった。

「それにしても昨日私たちに内緒で戦いに行っただけですね」

ギクツと背後を振り返ると桜姉さんが笑顔で立っていた。

しかもたまに見る『怖い』笑顔で。

「これは姉さんにあとでお説教ですねえ」

「うつ……げんこつ一発は覚悟します」

考えると憂鬱になってきた。

重くなる頭を抱えて、ため息を吐いたその時だった。

「——っ！」

衛宮家には結界が貼ってある。

他者の出入りを遮断するものではなく、他者の侵入を知らせる警報のようなものだ。

そして結界は今たしかに揺れた。

つまり誰かがこの家に侵入してきたのだ。

「ライダー」

私の呼びかけにライダーは頷き、ライダーもセイバーに目を向ける。三人で立ち上がり、急いで玄関の方へ向かう。

近づくにつれ、外から強大な魔力を感じる。

侵入はおそらく正門から堂々と。

そしてこの桁違いな魔力はおそらくサーヴァントのもの。

「って、桜姉さん!？」

背後に振り返ると桜姉さんが一緒にいつてきた。

「ダメだよ。桜姉さんはマスターじゃないのに」

「関係ありません。心配なのにはつとけるわけないじゃない」

「ああ……」

これは何を言つてもついできそうだ。

桜姉さんは一度決断すると曲げない意思の強さがある。

「……わかつたけど、危なくなつたらすぐに家に戻つてね」

私はそれだけを告げて、玄関を出る。

「——っ！」

家の前に二人の男が立つていた。

片方は三日前に私を襲つた黒マントの男、ランサーだった。

そしてもう一人の男、同じ三日前に会つたランサーのマスターは自身の眼鏡を押し上げ、笑顔で挨拶する。

「ふふ、久しぶりだね」

「麗奈ちゃん、この人たちは？」

「こいつらだよ。三日前に私を襲つた奴らは！」

セイバーと桜姉さんは驚愕する。

ライダーはすぐさま大剣をかまえた。

「おっと、勘違いしないでくれ。今日は君達と戦ひ合つつもりはない」

おおげさに両手を広げる眼鏡の男。

「まずは自己紹介だ。私の名前はセルディア・ガラムヴァルド。私の隣にいるランサーのマスターだ」

セルディアと名乗る男は再び眼鏡を押し上げる。どうやら癖のようだ。

「なにしに來たのよ？」

声に威圧をかける。

「そう凄まじいでくれたまえ。先程も言つた通り、今回は君達に用はないのだよ。ただ一つ質問がしたいだけさ」

セルディアが不気味な笑みを浮かべる。

あまりにも邪悪な、黒き闇を孕んだ笑み。

「衛宮——いやあ、遠坂凜はどこにいる？」

四日目 衛宮家急襲（2）

その言葉に驚愕した。

まさかこいつの口から母の名がでるとは思わなかった。

「なんで、あんたが母さんを？」

セルディアは呆れたようにため息をつく。

「質問しているのはこちらなのだがな」

イラついたのか、彼の眉間に皺が寄る。

「もう一度だけ問う。遠坂凜はどこにいる？」

セルディアの声に威圧が混じる。だがこちらも屈するわけにはいかない。

こいつがなんで母さんを狙っているかはわからないけど、少なくとも友好的なことではなさそうだ。

「アンタなんかに教えるわけないでしょ」

セルディアを強く睨みつける。

彼はやれやれといった感じで手を広げた。

「気付かなかったとはいえ、やはりあの日に捕らえるべきだったか……」

彼がそう呟いた瞬間、彼の背後にいた男がその場から姿を消した。

——カキン。

渴いた音が私の目の前で鳴り響く。

わずか一瞬で私を貫こうとしたランサーの槍を、鎧姿になったライダーが大剣で弾く。

すぐに後ろに下がって間合いをとるランサー。

「今日は君と争うつもりはなかったんだけどね。会話で応じてくれないのなら、武力に頼るしかあるまい」

再び不気味な笑顔を見せるセルディア。同時にランサーも再び動く。

「——なるっ！」

ライダーも素早く足を踏み出し、ランサーとの距離を一気に詰める。甲高い音を鳴らしながら、大剣と銀槍が打ち合う。

絶妙な間合いを取り、槍を突き出すランサー。

それを弾き、大剣を振るライダー。

その戦いはまさに三日前の再現。

しかし、完全なる再現には至らなかった。

打ち合いの最中、ランサーが先程から閉じていた口を開いた。さなか

「昨日の貴様とアサシンの闘いはなかなか楽しかったぞ」

「——なっ!？」

その言葉にライダーは驚きを隠せなかった。

「だが……その闘いの傷を引きずりながら私と戦うとは。蛮勇が過ぎるぞ、ライダー！」

ランサーの槍がライダーの大剣を外側へ大きく弾く。

ライダーの身体がから空きになってしまった。

彼が体制を立て直すのに秒もかからない。

「しまっ——」

だがランサーの槍がライダーの腹をえぐるには十分な時間だった。

「——がっ——あっ」

槍を引き抜くランサー。その槍は、銀から紅に染まっていた。

ライダーが倒れる寸前、ランサーはその身体を蹴り飛ばす。

「ライダー！」

傍で倒れたライダーに駆け寄る。

口から漏れるは荒い呼吸。今のはやはり致命傷らしく、ライダーの体中から汗が吹き出る。

ランサーは紅く染まった槍を眺め、槍から流れる血を飲み始めた。

槍はやがて紅から銀に戻る。

「不思議なものだな。現象に過ぎない我々サーヴァントの血が、これほど濃厚で美味とわな」

ランサーが血を飲み干した週間、ランサーの魔力が跳ね上がる。

やっぱりこいつは他の人の血液から魔力を吸い取る特殊なサーヴァントみたいだ。

「まさかお前たちが昨日の結界を……」

私の問いに、しかしセルディアは首を横に振る。

「残念ながらそれは違う。あの女——千堂襖馬の結界はかなりの物だ。あれほどの結界、私が見てきた物でもあれほど上等な物はなかなかにない。私ですら、あれを破壊するのは不可能だよ」

じゃあいったい誰があの結界を？

「まあ、キヤスター辺りならあれを破壊することはできるかもしれないが」

その名を聞いて昨日の恐怖が蘇る。

『そうか——君が衛宮麗奈か』

やはりあの男なら襖馬さんの結界を壊せただろう。

あの男に見られていたと思うと、鳥肌が立ってしまう。

「じゃあ昨日の闘いを見て私たちのことを知ったわけね」

「ああ。まあ見れたのはライダーとアサシンの殴り合いからで、おそらく使用したであろう宝具までは見れなかったけどね。それにしても君達の闘いは見てて楽しかったよ」

クツクツと彼は卑屈な笑みを零す。

「ああ、実にくだらなく滑稽だったよ。今は戦争中だぞ。それが互いの美德を賭けた闘い？笑わせてくれる。サーヴァント同士の殴り合い？聞いたこともないぞ。三流少年漫画でもあるまいに」

ライダーの体が震えていた。

当たり前だ。昨日の闘いはライダーにとって、アサシンにとって誇りある闘いだ。

それをどんな奴であろうと愚弄することは当の本人にとって許せる

ものではない。

でも――。

「てめ――」

「ふざけんなよ、テメエ！」

先に怒りが爆発したのは私だった。

「麗奈……」

「テメエなんかにこいつの気持ちがわかるのかよ！アサシンの気持ちがわかるのかよ！昨日二人がどれだけ誇りを賭けて闘ったか、テメエみたいな糞野郎にわかるのかよ！何が遠坂凜はどこにいるか――よ。テメエみたいなコソコソ隠れて何の関係もない人を襲って他人の家に侵入して脅すような奴に誰が教えてやるかよ！」
許せなかった。

昨日の闘いに私は見惚れた。

だからこそ、こんな奴にその闘いを、ライダーとアサシンの二人への侮辱を許せなかった。

セルディアは再び眉間に皺を寄せている。

「やはり君は遠坂凜の娘だよ、衛宮麗奈」

冷静を保つために彼は眼鏡を押し上げる。

「私は五月蠅い女が嫌いだよ。ランサー、衛宮麗奈を殺せ」

ランサーは呆れた顔でセルディアに振り返る。

「いいのか？凜って奴の居場所を聞くんじゃないかったのか？」

「ここで待っていれればいずれ帰ってくるだろう。彼女たちの死体はその時の見せしめになる」

再び邪悪な笑みを見せるセルディア。

ランサーはため息をつきながらも、一瞬で私の目の前に現れた。

「――っ！」

「……ふん」

私を見下ろしながら槍を振り上げるランサー。

「麗奈！」

「麗奈ちゃん！」

私を助けようとするライダーと桜姉さん。

しかし身体がボロボロのライダーや、人間である桜姉さんが間に合うはずがない。

迫る私を貫く槍。

瞬間——槍はまばゆく輝く光の一閃に弾かれる。

「なにっ！？」

すぐさま間合いをとるランサー。

私の前に鎧姿のセイバーが剣を構えて立っていた。

「麗奈、怪我はありませんか？」

まっすぐランサーを捉らえながら問うセイバー！

「う、うん……ありがとう」

「麗奈はマスターの傍へ。マスター」

ライダーに振り返る。その瞳に揺らぎはなかった。

「本当はあなたの戦いを邪魔するつもりはありませんでした。ですが……」

「……っ」

「あなたの護りたいものを私も護りたい。だからここからは私が戦います。あなたはその間、傷を癒すことに専念してください」

揺るぎなき決意の表情。

「……頼むぜ、セイバー」

安堵の笑みを浮かべるライダー。

信頼のない者にライダーは何かを託すことはしない。

ライダーの言葉はセイバーの誇りとなった。

「はい、マスター」

セイバーに戦いを譲ったライダー。
それは事実上、ライダーの初めての敗北であった。

「どういうことだ？凜のサーヴァント——いや、ライダーをマスターと呼んだのだからライダーのサーヴァントか。しかし、魔術素養のあるライダーなど聞いたことがない……」
混乱するセルディア。

「でっ、どうするのだ？マスター」

ランサーがセルディアに振り返る。

彼は眼鏡を押さえてため息を吐く。

「まあいい、邪魔をするなら始末するまでだ」

ランサーはすぐさま槍を構える。

張り詰める空気。

その緊張は、状況を見守る私たちにまで伝わる。

○

先に踏み出したのはセイバーだった。

直線的突撃。

握りしめる剣を構えの動作に。

そのスピードは常人の目ではとても追いつけない。

しかしこれは槍兵であるランサーにとって、刺してくださいと言っているようなものだ。

ランサーもすぐさま、突きの構えに移る。

——がっ、セイバーは足の軸を使って横に移動した。
すぐさま斬り掛かりの体制に移る。

「読んでいるわ！」

ランサーは突きの構えのまま、槍を横払いする。

セイバーは慌てずこれを剣で受け止めた。

そして右足で地を踏み、大きく跳躍する。

ランサーの背後に着地し、地に向く刃を振り上げる。

「——くっ！」

ランサーも大きく横に飛んでセイバーの斬撃をぎりぎりかわした。しかし、セイバーは振り上げた姿勢のまま足を踏み出し、ランサーに突進する。

「——ぬっ！」

かわしきれないと悟ったランサーは、致命傷を避けるために振り下ろされる剣を槍で弾く。

「——ハアアアッ！」

弾かれることを予見していたセイバーは、わざと威力を弱めて切り掛かり、小さく弾かれた剣を横薙に払う。

刃がランサーの脇腹を切り裂いた。

「——ぐっ！」

二人は背後に跳躍して間合いを取る。互いの呼吸に乱れなし。

セイバーの動きはまさに完全不敵だった。

敵の動きを予見し、自身の動きで攪乱させる。
力ではなく、思考に戦うタイプだ。

「ランサー、たしかにあなたの槍は恐ろしい武具だ。傷つけた相手の血を同時に吸い取る。掠り傷ですら致命傷となりうるだろう。だが——」

剣の切っ先をランサーに向ける。

「当たらねばどうということはない」

精悍なる瞳に揺るぎはない。

一方のランサーは感心したような笑みを見せる。

「これは参った。口だけなら容易い。しかし、君にはそれを実現する脚力がある。これはなかなか厄介だ」

言葉とは裏腹に、ランサーの表情からはこの状況を楽しんでいる節すら見られる。

「君が女性という理由で無意識に君を甘くみていた。さて、では気兼ねなく闘いを再開しようじゃないか——」

「宝具を使い、ランサー」

主の言葉にランサーは驚愕の表情を向ける。

「私はまどろっこしいのが嫌いなのは知ってるだろう」

ランサーは不満げな表情を見せる。

「こんな所で宝具を使えばどうしても目立つ。そうなければいろいろと不利になるぞ。ましてや無駄な被害を作ったところでこちらにはなんの得にもならん」

「ほう、残虐な男として名を残したお前がそれを言うとはな……」

そう言いながら、セルディアは自身の手を翳す。

その手に刻まれた三つの令呪。

その一つはすでに消えている。

そして今また、二つ目の令呪が消えていく。

「これでいいのだろう？ランサー」

「……っ」

ランサーはため息をつき、その顔を引き締める。

「そういうことだ。恨んでくれるなよ」

四日目 衛宮家急襲(2) (後書き)

ランサーは今作でもマスターに恵まれない不憫な子

四日目 衛宮家急襲（3）

突如、周りの空気が一気に変わる。

魔力の流れが濃密にランサーを取り巻く。

木々が荒れ、砂埃が舞う。まるで小規模な嵐だ。

その嵐が槍を持つランサーの右腕に集約する。右手が握る槍、その周囲の空間が歪む錯覚すら感じる。

だがそれは、もはや驚くことではない。

サーヴァントにとって宝具は必殺でなければいけない。

それは宝具がサーヴァントそのものを象徴するもの、つまり宝具が相手に致命的な傷を与えなければ、それは相手に自らの正体を教え、対策されるということ。

そうなれば戦いには大幅に不利になるだろう。

それゆえの必殺――。

ランサーの槍が徐々に紅く、凶々しく変化する。

まるで今までこの男が吸った生き血が、一種の怪物となって具現化したかのようだ。

「弱りましたね……」

セイバーが苦々しく呟く。

「セイバー？」

「あの槍の形状、そして遠方からのあの構え、おそらく投擲用の宝具。放てるのは一発まででしょうが、その分威力は桁違いなはず」
自身の剣を見つめるセイバー！

「おそらく、私の宝具ならばあれを相殺することもできるでしょう。しかし――」

焦りの表情を見せる。

「相殺した時の爆風でここら一帯を巻き込む恐れもあります」

「なっ――！」

セルディアを見やる。彼はその顔に残虐な笑みを浮かべていた。

「あいつ、こうなるのを知ったうえで……」

突発的なことを言っているようで、その実効率的な判断を下す。

こういう『頭のキレル狂人』を相手にするのはかなり厄介だ。

ライダーの今の状態じゃ、どう考えてもアレを対処することなどできな

——なら。

「セイバー、あなたの宝具、使ってちょうだい」

「——っ！」

セイバーもライダーも桜姉さんも私の発言に驚愕する。

「麗奈、アナタ……」

「自分でも馬鹿なこと言ってるのはわかってる。だけどアイツらは一般人にも平気で手をかける奴らよ。ここでなんとしても倒さないと被害が拡大するかもしれない」

私はまっすぐセイバーを見据える。

「アナタにこういうことを言える義理じゃないけども、アナタの力でなんとか被害を最小限にして」

これを告げることが今の私にできる精一杯の対抗。

父さんなら身体を張ってでも自分で護ろうとするかもしれないけど、それが無謀だってことぐらい私にはわかる。

セイバーは私とライダーを交互に見て、無言で頷いた。

静かに剣を構えるセイバー。

彼女の握る剣が少しずつ輝き始める。輝きは段々と大きくなり、やがて圧倒的な白き輝きとなる。

「ほう、貴様も宝具を使うか、セイバー」

ほくそ笑むランサー。

「ならばこちらも遠慮はいらぬな！」

衛宮家の中庭に白と朱の嵐が吹き荒れる。

「『吸血王^{ツェ}の——」

朱き嵐が動く。

それに呼応するが如く、白き嵐も動く。

「『天^{デユ}の使いの——」

「処刑串^{ベシユ}」！」

放たれた朱き魔槍。

圧倒的な破壊をもって、セイバーへと目にも止まらぬスピードで向かってくる。

セイバーもそれと同時に剣を振り下ろす動作に入り——。

「加護^{ラン}を受けし——」

「みんな、伏せなさい！」

突如、空中から声がかかった。

あまりも突然だが、無意識に私たちは身体を伏せる。

面食らうセイバーも、同様に宝具を納めて身体を伏せた。

無意識とはいえ、私たちがなんの迷いもなく指示に従ったのには理由がある。

空から降り注いだ声は私たちのよく知る人物のものだったからだ。

——空から七色の輝きが降り注いだかと思えば、突如その光が消え、空間が歪む——。

「なっ!?!」

突然のことにランサーは驚愕を隠せずにいた。

歪んだ空間がランサーの宝具を飲み込んだのだ。まるで小さいブラックホールのように。

やがて歪みは収まり、そこには目を鋭く細めた赤い悪魔が立っていた。

「母さん！」

我らが母、衛宮凜は赤色のコートをひるがえす。

「大丈夫？みんな」

振り返ることなく声をかける。

多分、母さんは自分の今の表情を見られたくないのかもしれない。
それを示すかのように、握りしめる拳が震えていた。

「母さんのおかげでなんともないよ」

少しでも安心させるために返答する。

「そう」

ただ一言、しかし安堵に満ち足りた声。

そしてビシッとランサーとセルディアの二人を指差す。

「アンタ達……アンタ達のせいで——」

怒りに震える声。それほど私たちのことが心配だったんだ。

「アンタ達のせいで——アタシのこれまで貯めてきた宝石を半分以上も使っちゃったじゃない！どうしてくれるのよ!？」

「——って、そっちかい！」

思わず声に出してツツコンでしまう。

「普通そこは『よくもアタシの大事な娘やその仲間たちを傷つけてくれたわね』って言うところじゃないの!？」

「ウツサイわねえ。今使ったやつだけでも数千万はかかるのよ!だいたい私が他のみんなはともかく、あんたの心配なんかすると思っただの?」

「ちよつ、それはあまりに酷くない?三日前はあんなに心配してくれただじゃない!」

「それは一般の娘に対する母としての心配よ!でも今のあなたは違う。あなたは今、魔術士であり、聖杯戦争のマスターの一人なのよ」
母さんのあまりの剣幕に、思わず自分の口が固まってしまう。

「いい?アタシがあなたに抱いてるのは『心配』ではなく『信頼』なの」

「……っ」

「もうすでに衰退したとはいえ、あなたは誇り高き遠坂家の血を引いているの。アタシ自身、あなたに才能を感じてるわ」

私の肩を叩く母さん。

「だから、この聖杯戦争でお互い最後まで生き残るのよ。そして親子ではなく、一人の魔術士同士として正々堂々と闘いましょう」

——ああ、やっぱり母さんには敵わないや。

初めて一人の魔術士として母さんが認めてくれたことが、私には少し恥ずかしくなるぐらい嬉しかった。

——パチパチ。

手を叩く音がした。

振り向くとセルディアが笑顔でこちらに拍手をしている。

「素晴らしい・素晴らしいくだらない親子愛じゃないか、遠坂凜」

「アンタ……」

「しかし久しぶりだな、凜。喜べ、わざわざ君に会うためにこの戦争に参加したのだ」

「アンタ……」

「感動の再会を祝いたいものだが、生憎そいうのは苦手だね。だが安心しろ。労いの言葉なら君の死体にゆつくりとかけても——」

「——いや、アンタ誰？」

……。

降る沈黙。

哑然の表情のセルディア。

「——はは、相変わらず心に容赦なく傷をつける冗談が好きだな、君は」

「いや、本当に知らないから」

「——っ」

哑然としていた表情がみるみると怒りに変わっていく。

「貴様！このセルディア・ガラムヴァルドを覚えていないというの

か！」

「ああ、召喚魔術を得意とする名門、ガラムヴァルド家の当主だっけ？でもアタシにそんな知り合いいたかしら？」

母さんの表情からして本当にわからないらしい。

「どうやら本気で忘れているらしいな。まったく、どこまでも憎らしい女め」

眼鏡を押さえ上げ、彼は冷静を保つ。

「ならば思い出させてやるさ。この俺が貴様に抱く怒りと憎しみの全てをね」

○

――遡ればすでに十数年の月日が流れた。

英国・ロンドン。

そこには『時計塔』と呼ばれる、多くの魔術士が魔術を学び、研究する最高学府があり、同時に魔術協会の本部となっている。

曰く――魔術士の総本山と呼ばれし場所。

数々の著名な魔術士を輩出し、彼らはそこで学んだことを誉れとする。

召喚魔術に特化したガラムヴァルドの当主、セルディアもまた、時計塔に在籍した魔術士の一人だった。

学院の中でもプライドが高い彼には越えるべき人物が一人いた。

「今日こそ私を認めてもらうぞ、ルヴィア！」

金色の縦ロールを優雅に揺らしながら、ルヴィアゼリッタ・エーデルフェルトは不満げな表情で彼に振り返る。

「あら、耳障りな声音を発するから誰かと思えばまたあなたですの、セルディア」

「ふふ、暴言を吐く君もまた美しい。今日こそ君に勝利し、我がガラムヴァルド家との婚姻を果たしてもらおう」

ガラムヴァルド家はセルディアが当主を勤める今代にあたって、財

政状況に大幅に苦しんでいた。

そこでガラムヴァルドは自身と同じ名門であるエーデルフェルト家の当主、ルヴィアゼリツタに目をつけた。

彼女と結婚すればガラムヴァルドとエーデルフェルトを一つにできる。

そうすれば資産家でもあるエーデルフェルトの財産を使用することができ、同時にエーデルフェルトの魔術も手に入れることができる。魔術協会とも今以上に強い繋がりを持つことも不可能ではない。

まあそのような大前提があろうと、結局は彼がルヴィアに一目惚れしたのがきっかけとなるのだが、プライドの高いセルディアにはそれを認めることができなかった。

そこで彼はルヴィアを自らの力で屈服させることを選んだ。

「ゆくぞ、ルヴィア！」

「まったく、相変わらず清楚の欠片もないお方ですね」

セルディアはまず三体の使い魔を召喚する。

醜悪なその姿は、攻撃的な習性をその身に表すよう。

襲い掛かる三匹。

さらに後衛に五体の使い魔を。

その手は銃のような形状をしており、見た目通りに射撃系の攻撃を行う。

それぞれの規模は小さいとはいえ、これほどの使い魔を一度に要する魔術士はなかなかいない。

セルディアは内面はともかく、魔術士としては間違いなく天才の部類だ。

だが対するルヴィアもまた、天才と呼ばれるに相応しい魔術士だった。

セルディアの攻勢をその手に持つ宝石でことごとく迎撃する。

その姿は、さながら黄金の蝶が舞うよう。

後衛の使い魔にも宝石を投げ付け、撃退する。

「くっ——！」

次の使い魔を召喚しようとするセルディア。

しかし、そのタイムラグをルヴィアは見逃さなかった。

右足で地面を踏み付け、セルディアの懷に一気に潜り込む。

「しまっ——」

「遅いですわよ！」

瞬時に彼の背後に回り、彼の胴を両腕で掴み上げる。

「バックドロツツツプ！」

背中をくねらせ、セルディアの身体を持ち上げて、その頭を地面に叩きつける。

「がはっ——！」

セルディアはそのまま地面に俯せになって倒れた。

「これでまたわたくしの勝ちですね」

わずかに乱れた髪を整える。

「貴方の召喚魔術は確かに優秀ですわ。しかし、貴方の数に任せた戦術では、対軍迎撃を得意とするわたくしの宝石魔術とプロレス相手では相性が悪くってよ」

オーホホホ——と典型的な高笑いを残して、ルヴィアはその場を去った。

「プロレスは関係ないだろう……」

本人に届かないツツコミを呟き、セルディアは氣を失う。

そう、彼は何度も彼女に敗北した。

あらゆる戦法を画策するも、見事なまでに敗れてしまう。

もはや彼にとってそれらの流れは日常的なものになっていた。

しかしプライドの高さゆえ、彼自身は気付かないものの、魔術の天才的センスを持つ彼にとって、ルヴィアは初めてのライバルであることに少なからず嬉しいものを感じていた。

何度敗北しようと、いずれ勝利し、彼女の全てを我が物とする。そ

の一心で彼はルヴィアに挑み続けたのだ。

——だが、ある少女の出現が彼のルヴィアに対する想いを打ち砕いた。

「——ちっ、くそっ！あのロン毛教授め。偉そうに説教垂れやがって。いずれ俺の前に膝を屈っさせ『グレートビッグベン ロンドン スター』と罵ってやる」

「ねえ、その貴方。ちよっと迷っただけで、道案内してくれない？」

ふいにセルディアの耳にかかる、凜々しい少女の声。

「ああん？今イライラしてた。道案内ならよそに——」

セルディアの呼吸が一瞬止まる。

それほどまでにその少女は一際目を引くほどの美しさがあった。

「時間を取らせるつもりはないわ。このクラスに案内してくれるだけいいんだけど」

彼女の赤いコートから取り出されたメモのような紙切れを見る。

簡易的な地図がそこに書かれていた。

「ここは私と同じクラスじゃないか。見ない顔だが……」

「アタシ、今日から転校してきたの」

「なるほど。いいだろう、ちようどクラスに戻るところだ」

「あら、ありがとう。助かるわ」

少女とともに歩きだす。

道行く生徒が少女を見つめる。物珍しさとその美しさに誘われて。

その様は、どこかルヴィアとも重なった。

「君、名は？」

「アタシ？アタシは——」

これがセルディアと凜のファーストコンタクトとなった。

四日目 衛宮家急襲（４）

遠坂の名は聞いたことぐらいはある。

聖杯戦争の舞台となる冬木市の管理人であり、日本の中でも名が知られる名門の魔術士だ。

どうやら、この前行われた聖杯戦争の生き残りでもあるらしい。

そんな魔術士が時計塔に来たのだ。注目されないわけがない。

同じ宝石魔術を得意とするルヴィアゼリッタも彼女に目をつけていた。

「まあ、あのルヴィアに目をつけられたんだ。遠坂凜もただでは済むまい」

セルディアは凜の敗れる姿を思い浮かべながら一人、自身の研究に勤しんでいた。

「よう、聞いたか、セルディア」

突然話し掛けてきたのは名前すら思い出せないクラスメート。

「気安く話し掛けるな」

どうせくだらん話だ。

自分の研究に集中するためにクラスメートを手で追い払う。

「まあそう言わさんな。おめえがご執心してるルヴィア嬢があの遠坂凜に負けたらしいぜ」

その言葉を聞いた瞬間、無意識にセルディアは部屋を出ていった。

馬鹿な、有り得ない！

あのルヴィアが誰かに負けることなど！

アイツを倒すのは俺であって他の誰かに許されることではない。

そう思いながらがむしゃらに校舎を走る。

どこにいるかなどわからない。だが今すぐ会って確認しなければ。

数十分走り、ようやく壁にもたれていたルヴィアを発見する。

「ルヴィア！」

「あら、またアナタですの」

ルヴィアはこちらに顔すら向けてくれない。

「おい、遠坂凜に負けたって聞いたんだが――」

「ええ、間違いなくわたくしの敗北ですわ……」

握り拳を震わせるルヴィア。

柄ではないが、慰めの言葉をかけようと近づいた瞬間、突然ルヴィアが立ち上がる。

「決めましたわ！遠坂凜をわたくしのライバルに任命しますわ！」

その言葉を聞いた瞬間、セルディアは自分の中が真っ白になっていくのを感じた。

「ル——」

「ごめんあそばせ、セルディア。わたくし、今すぐ帰って打倒遠坂凜対策を練りますので」

そう言い残してルヴィアはその場を走り去った。

——ありえない！

ルヴィアのライバルは俺にしか許されない特権だ。

それがなぜ、ポツと出の女に奪われなければならないんだ！

——許せない。

——許されることではない！

夕暮れのアスファルト。

落ち葉舞い散るなか、自身の寮にセルディアは顔に苛立ちを浮かべながら向かっていた。

ルヴィアのライバルは俺一人で十分だ。

他の奴らに許される権利ではない。

自らの脳内であの女との戦いを想像する。
シミュレート

必ずあの女を殺す。

そうすればルヴィアも俺のことを見直すはずだ。

「いや、近づかないで！」

突如、悲鳴がセルディアの思考を遮る。

ふと横を見ると、一人の少女が柄の悪い男どもに囲まれていた。

「へへっ、なあに、ちょっとお兄ちゃん達と遊ぶだけだよ」

「いやっ、助けて……」

まったく、なんて典型的な構図だ。

映画ならこの後、ヒーローが華麗に助けるシーンになるんだろうが、生憎そんなご都合主義があるわけ——。

「やめろ！その娘、泣いてるじゃないか！」

——あつたようだ。

シャツとジーパンを着込んだ、好青年のような男は果敢にもチンピラどもに立ち向かっている。

どう見ても体格上、青年に勝てる見込みが見えないが――。

一分足らずで四人ほどいたチンピラが全員地面に叩き伏せられていた。

「なっ、何者だデメエ？」

「んーと、通り過ぎりの正義の味方――見習いつてところかな」

変な男――セルディアがその青年に浮かべた第一印象だ。

チンピラが逃げ去り、少女が青年に礼を言っている。

奇特定の奴もいたものだ。

そう思いながらその場を立ち去ろうとするセルディア。

「こら士郎しん！また勝手にはぐれて！」

その声にセルディアの足が止まる。

声の主はあの遠坂凜だった。

「ああ、すまない。どうもほっとけなくてさ」

「まったく、帰ったらみつちりしごいてやるんだから」

二人の男女がセルディアに気づくことなくその場を去った。

セルディアの顔には邪気たつぷりの笑みが浮かんでいた。

「あら、誰かと思えばこの前道を教えてくれた方じゃない。こんな夜更けに何かご用かしら？」

暗い、誰もいない夜道。

街灯だけが照らすその道で遠坂凜はなお、優雅に振る舞っていた。その振る舞いがすでに偽りであることをセルディアは知っている。

「そう偽りの仮面を被るものではないぞ、遠坂凜。人間、素の顔が一番だ」

「……何が言いたいのかしら？」

「なかなかの正義の味方^{ヒーロー}っぷりじゃないか。シロウという名の君の弟子は。それとも恋仲かな？」

凜が繕った顔を崩し、キツとセルディアを睨みつける。

「……何が目的？」

「いや、たいしたことではない。君とここで勝負がしたいだけだ」

「ん？それなら士郎の名前なんか出す必要はないじゃない」

「君の戦いはいくつか見ていたよ。そのどれもが君がとても本気を
出しているとは思えないものだった。あのルヴィア相手には見てい
ないけど。私は君の本気を打ち砕きたいのだよ。そうでなければ
意味がない。本気の君を負かした時、俺はやっとルヴィアに認めて
もらえるんだ！」

「……よくわからないけど、いいわ、相手してあげる」

凜の右手が紅く光る。

おそらく彼女の魔力となる宝石を握りしめているのだろう。

「いいねえ、その怒りに満ちた表情。それが絶望に染まると思うと
思わず達してしまいそうだ！」

――。

――。

――馬鹿な、アリエナイ！

セルディアは無惨な姿で地べたに伏していた。

勝負はわずか数瞬でついた。
まさに圧倒的。

セルディアは確かに魔術師としては天才の部類に入る。
結果として凜の方が圧倒的に優秀であるというだけのことだった。

だが——その敗北はセルディアのプライドをズタズタにするには十分だった。

凜は呆れるようにセルディアを見下す。

「あんた、ルヴィアをライバル視してるのよね？」

「そうだ、それがどうした？」

「……ルヴィアって案外優しいのね。アンタみたいな奴の相手をし
てあげてるなんて」

セルディアの顔が引き攣る。

「なっ——何が言いたい？」

「弱いのはあんたは、もの凄く。そこら辺の三流魔術士よりはマシ
って程度。まあ二流ってやつね」

「——っ！」

「ルヴィアに感謝しなさい。あんたみたいな二流魔術士に今まで付き合
ってあげてたんだから。アタシだったらもの一日で存在を忘れ
そうだわ」

そう言って凜は立ち去ろうとする。

直前、凜は振り返ってセルディアに近づき、彼の髪を鷲掴んで顔を上げさせる。

凜の表情はまさに悪魔の笑顔の如く、優美に満ちていた。

「それと、今後あたしや士郎にちよつかいを出したら、死なない程度に呪い^{ガント}をブチ込んで、ショック死寸前に宝石をあなたの頭に埋め込んで、脳髓をブチまけてあげるわ」

そう言い残し、今度こそ立ち去る。

ないまぜになるショックと恐怖。

それらはすぐにセルディアの中で行き場のない怒りへと変わる。

握りしめる拳は血で滲む。

かつてないほどの殺意がセルディアを支配した。

遠坂凜――。

殺す――必ず殺す。

何年かかっても殺す。

どんな手段を使っても殺す。

必ずこの手で必ず。

○

「……っ」

「思い出したかい、遠坂凜。俺はこの想いだけを胸に生きてきた。何度も想像した。俺の手でグチャグチャになる君の姿を。まるで恋い焦がれる少年のようにね！」

高らかに語るセルディア。

「それにしても驚かせてもらったよ。よもや、大量の宝石による魔力で空間を歪ませ、ランサーの槍を歪んだ空間に飲み込ませるとは、君の才能には本当に脱帽する——」

意気揚々と語るセルディアとは真逆の如く、他の反応はあまりにも冷めていた。

「ようするに、ただの逆恨み？」

私は一言そう呟く。

「正直そんなことあったわねえ、程度にしか覚えてないわ、アタシ」
呆れて物も言えないと表情で語る母さん。

「で、あんたのくだらない過去はお終い？ならとつとかかって来なさい。あたしはこの後、夕食の準備で忙しいの」

セルディアの笑みが、鬼の形相に変化する。

「殺してやる！殺してやるぞ！遠坂り——ゴペア！」

私達はその光景に驚愕する。

突如、セルディアの隣にいたランサーが己が主を蹴り飛ばしたのだ。

そしてすぐさま空から突然物凄いスピードで落下してきた光りをその槍で弾き飛ばす。

弾かれた光りは地面に突き刺さった。

それは三日前、突如ライダーを襲った剣と同じものだった。

そして空中からあの男が赤いマントを翻しながら私達の前に着地する。

「惜しかったわね。アーチャー」

なるほど、さつきからアーチャーの姿が見えなかったのは死角からセルディアを狙い撃ちするためか。

「いや、全力は出したつもりだよ。あのランサーは予想以上に優秀なサーヴァントのようだ」

蹴り飛ばされたセルディアが自身の腹を抑えながら立ち上がる。

「ゲホッ。ランサー、どかすなら口で言えばよかるうがっ！」

「無礼を許せ、マスター。口頭で伝えるにはとても間に合うスピードではなかった」

その二人の様子をアーチャーは鼻で笑う。

「いや、全力というのは訂正しておこう。あの男の過去話を聞いたら思わず笑いが込み上げてな、無意識にわずかながら力が抜けてたやもしれん」

「——っ！」

「抑えろ！マスター」

「——くっ！」

歯ぎしりで己を抑えるセルディア。

「ほう、さすがは戦において相手の戦意喪失を得意とした男は言うことが違う」

「ふん、やはり宝具を使用することでのリスクを全うすることになるか」

アーチャーはすでにランサーの正体を掴んでいた。

それはランサーの宝具の名を聞いた私も同じだ。

「世界で最も有名な吸血鬼、ドラキュラのモデルとなったルーマニアの英雄、ワラキア公国国王、『ヴラド・ツェペシュ』」

ルーマニアとトルコとの戦いにおいてトルコ軍を恐怖に陥れた大英

雄——ヴラド三世。これがおそらくランサーの真名。

「ランサーの槍が串状なのと刺した相手の血を吸うのはそういうことだったのね」

ヴラドは敵味方関係なく、自身に刃向かった者は容赦なく処刑した。

彼は処刑方法に串刺しをよく好んでいた。

その残虐性ゆえにルーマニアを救った英雄でありながらも、おそらく彼はそれら英雄と敵対する反英雄に位置する存在だろう。

他者の血を媒介に自身の魔力とする。

まさに吸血鬼そのものだ。

戦闘態勢に入ったアーチャーは自身の両手に二対の剣を出現させる。

「……アーチャーではないのか？貴様、何者だ？」

怪訝な目を向けるランサー。

「生憎と名乗るほどの有名は持ってない。私自身、ここにいること存在意義を計りかねているところだ。さて、セイバー」

「——っ！」

突然呼ばれて戸惑うセイバー。

「まだ余力は尽きていまい。その剣、未だ己が主のために振るえるか？」

「……無論だ」

「——ということだ。形勢逆転だな、ランサー」

余裕の表情のアーチャー！。

それを苦々しく見つめるセルディアと鋭い瞳で睨みつけるランサーの姿がそこにあった。

四日目 衛宮家急襲（4）（後書き）

文章にスペースを空けるようにしました
少しは読みやすくなったかな？

四日目 衛宮家急襲(5)

ランサーはため息をつく。無理もない。

ライダーを倒し、宝具を使ってセイバーを倒すはずが、母さんとアーチャーの乱入によってランサーの宝具を封じたうえに、ランサーの正体も暴いた。

流れは完全にこちらに傾いている。

「——さて、どうするマスター？」

突如ランサーがセルディアに問い掛ける。

「こちらは宝具を使用したことで魔力を大幅に消費、加えて相手は万全が二人。なかなか絶望的ではないか」

嫌みを含んだその言葉は、逆にセルディアの冷静さを取り戻す。

「……ふう」

ため息を一つ。眼鏡を押し上げる。

そうしてセルディアは自身の興奮した心を冷却させる。

「今から血液収集は無理だが、魔力が戻るにはどれほどの期を要する？」

「血液のストックならまだある。多少の休養も兼ねると、一日あれば戦闘には十分だ」

セルディアが微笑む。

その笑みは、先程まで怒りで我を忘れた男と同一人物とは思えないほど、冷たい印象を与える。

「よろしい。退却だ、ランサー」

その言葉にランサーも満足げな顔を浮かべる。

「ほう、ここにきて逃げ腰とは、情けない男もいたもんだな、ランサーのマスターよ」

セルディアを挑発するアーチャー。

「ふん、どうとでも言え。私の目的はあくまで凜を殺すことだ。一度引いて次に備えるのが近道ならば、私は喜んでこの場を引こう」

冷静を取り戻したセルディアにはアーチャーの挑発にすら乗らない。

「でもこの状況であたし達がアンタ達を逃がすとも思ってるの？」

一歩前にでる母さん。確かにこの状況ではランサーとセルディアには逃げる余地などない。こっちには俊足を持つセイバーがいる。

まず足で逃げることなど不可能だ。

「いや、遠坂凜。君は私達を逃がさなければいけないのだよ」

依然、余裕の笑みを見せるセルディア。

「忘れたのかい。私は召喚魔術を得意とするのだよ」

——瞬間、庭中にいくつもの魔法陣が現れ、そこから大量の魔物が出現する。

歪な形をした異形^{ソレ}は、次々と私たちに襲い掛かる。

「——ハアッ！」

アーチャーとセイバーが同時に動く。

アーチャーは次々と二対の剣を出現させ、それらを魔物に投げつける。

セイバーもまた、そのスピードを生かして魔物達を切り裂いてゆく。

数瞬で大量の魔物が打ち倒された。

「そんな小細工で時間稼ぎのつもりか？」

余裕の表情のアーチャー。

だが、セルディアの笑みは消えていない。

「いや、成功だよ」

そう零した瞬間、私達の背後から悲鳴が聞こえた。

「きゃっ——！」

「桜姉さん！」

後ろを振り向くと、桜姉さんが先程とは別の異形の触手に絡め捕られていた。

「しまった！」

青ざめる母さん。

「おっと、それ以上近づけば、どうなるかはわかるだろう」

触手の一つが鎌の形状に変形し、桜姉さんの首元に近づく。

歯ぎしりしながらも踏み止まる母さん。

「油断が過ぎたな。私に一本取られた気分はどうだ？」

指をパチンと鳴らすと魔物は桜姉さんを抱えたまま、セルディアの傍にまで跳ぶ。

「どうやらこの女は君の妹君だと聞く。なるほど、多少ながら似てはいるな」

「姉——さん……」

息苦しさから気を失う桜姉さん。

「桜をどうするつもり？」

セルディアを強く睨む母さん。

桜姉さんを拘束するセルディアへの怒りと、セルディアの作戦に嵌まった自分への怒りがないまぜになっているんだろう。

「どうもしないさ。ただ一日の時間さえ稼げればそれでいい。闘い

で君を殺さねばなんの意味などないのだよ」

「……っ」

「明日、指定した場所にお前とお前のサーヴァントのみで来い。場所は明日伝える。それまで君の妹君は私が預かるよ」

そう言い残してセルディア達は立ち去った。

私達はそれを見届けることしかできなかった。

「——様子はどうか？」

私の部屋の布団に横たわるライダー。

その胸に手を翳し、魔力をライダーに送り込んでいるセイバー。

約数十分。翳した手をゆっくりと離し、静かに呼吸を整えるセイバーに私は問う。

「……私とマス——ライダーはあくまで仮契約です。多少の魔力を送ることは可能ですが、すぐに動けるほどの回復は見込めません」

「——っ」

ライダーの苦しそうな顔を見るとセイバーの言葉を嫌でも痛感する。

ランサーが去った後、ライダーは眠るように意識を失った。

すぐにセイバーが彼を私の部屋に運び、セイバー自身の魔力をライダーに送っていた。

私かというと、桜姉さんがセルディアとランサーに連れ去られたことや、ライダーが倒れたことに気が動転して、ライダーとセイバーを見守ることしかできなかった。

「——とはいえ、そう悲観することもないでしょう」

セイバーは諭すように私に告げる。

「彼のポテンシャルには正直驚かされる。少ない魔力量で順調に体力を回復していつてる。この様子なら、安静にしていれば明日には充分動けるようになるでしょう」

セイバーの言葉に私は安堵の息をつく。

「しかし先ほどのライダーとランサーの戦い、確かにランサーの實力はかなりのものでしたが、それにしてもライダーの消耗が異様なまでに激しい。いったいこれは——」

「——なに、単にその男が未熟なだけのことだ」

私の背後から声がかかる。

振り返るといつの間にかそこにアーチャーが立っていた。

「アーチャー……」

「反論できまい、衛宮麗奈」

冷淡なる言葉を紡ぐアーチャー。

「彼は君を守護するための存在だ。たとえ自身の命に替えようと、主の命を護るのがサーヴァントの役目だ。だがこの様は何だ？俺と凜が間に合わなければ、最悪の事態にすらなっていたかもしれない」

「違う！ライダーは私たちを助けようとして——」

「——なら昨日の闘いはありえない」

「——っ！？昨日のこと、知ってたのね」

「ああ、残念ながらね。止めようとも思ったが、君たちは無理矢理にでも行くだろう。だが昨日の闘いの結果がどうあれ、そこでおそらく大量の魔力を消費し、ランサーとの戦いで敗北へと繋がった。違うか？」

「——っ」

言い返せない。

アーチャーの言葉に決して間違いはなかった。

昨日の闘いがなければ、ライダーはここまで酷い傷を負わなくて済んだかもしれない。

「自身の胸によく刻んでおけ。聖杯戦争は一瞬でも隙を見せた者から死んでいくのだ」

そう言つて彼は背を向ける。

「ライダーと共に生き抜け、衛宮麗奈。そして、自身の母親と、このオレを乗り越えてみせろ」

そう言い残してアーチャーは部屋を出た。

「……っ」

私の部屋に沈黙が下りる。

「……ムカつく」

呟く。

「気持ちはわかりますが、あれはアーチャーなりに心配しているのだと——」

「わかるわよ。あいつ本気で私たちを心配してた。だからムカつくのよ……」

アーチャーの見せた背中が一瞬父さんと重なって、言いようのない怒りを私は感じた。

○

アーチャーが麗奈の部屋を出ると、隣りに凜が背を壁に預けて立っていた。

「——ほう、君が煙草を吸うとは、少し意外だな」

凜は口にくわえた煙草を掴み、ため息混じりに紫煙を吐く。

「たまにはね、いろいろと吐き出したくなる時もあるのよ」

二人横に並ぶ。しばしの沈黙。

「なんていうか、遠坂の宿命からは逃れられないというか。あそこで油断しなければ、桜は——」

「今更嘆いていても仕方はあるまい。自身の失態を家柄のせいにするとは君らしくもない」

「……っ」

「あまり完璧を求めようとするな、凜。誰にでも欠点の一つや二つはある。欠点のない人間など、それはただの機械にしかすぎん」

「……あんたに慰められるなんて、あたしも堕ちたものね」

「いや、それは違うぞ。君は変わっていないさ。どんな失敗を起こしても自暴自棄にならず、失敗すら自らのメリットに繋げるように考え、行動する。確かに雰囲気、立ち振る舞いと、君はあの時より大人にはなったが、その本質だけは決して変わってない。それこそ私が護るべき衛宮凜だ」

アーチャーはゆっくりと凧の前にでて片膝をついて頭を下げる。それは主を導く従者の礼のよう。

「凧、君が変わらぬ限り、私は君の盾となり、矛となって君を、そして君の護りたいものを護ってみせよう」

凧は呆然とアーチャーを見つめていたが、やがてその顔に笑みが戻る。

「なんていうか甘くなったわね、アンタも。昔ならアタシだろうがもっと容赦ない皮肉を言ってたでしょうに」

「——ふむ、そうだな。やはりあの正義バカに毒されたか。まったく、その場にしようがいまいがなんともやっかいな男だ」

呆れの表情でため息をつくアーチャー。

「……ありがとう、アーチャー。少し、軽くなったわ」

凧は安堵の笑みを浮かべて煙草を灰皿に処理して立ち上がる。

「さて、そろそろ夕飯の支度始めなきゃ」

その顔には、先程まで見せた暗鬱な曇りはなくなっていた。

「いや、凧。君は明日に備えて少しでも体力を温存しておけ」

突然のアーチャーの言葉に、凧は怪訝な顔を浮かべる。

「でも、桜がない今、誰が料理を作るのよ？」

凜の言葉をアーチャーは鼻で笑って返す。

「なに、認めたくはないが俺の正体を知っているだろ、凜？」

「……まさか、あんたが？」

「不服かね」

あまりに誇らしげな表情のアーチャーに、凜は何も言わないことにした。

四日目 衛宮家急襲（6）

新都はなお、進化を繰り返していた。

天高くそびえ立つビル群は、さらなる高さを誇るビルの増殖とともに、その大きさを拡大していく。

——曰く、成長する都市侵略兵器と誰かが例えた。

古きよき町並みを残す深山町とはあまりにも対照的。

冬木市に初めて立ち寄る者がいれば、一樣に同じ町とは思えない——と似たような感想を漏らす。

そんな新都にも、昔の名残を残す——いや、正確にいえば、取り残された場所がある。

新都のビル街を抜けて端の端。明かりはなく、夜の深い闇が直接覆う形で、ソレはそびえ立っていた。

——冬木工場群跡地。

元々は冬木市における事業発展のために建てられる予定だった工場たちは、しかし世界同時不況の到来とともに、関わっていたいくつかの事業が解散。

残ったのは、夥しい数の建設途中で投げ出された工場たち。

稀に廃墟マニアが訪れるが、まずここに人が立ち入ることはない。

この跡地の奥底にある、小さな廃工場こそが、セルディア・ガラムヴアルドの拠点である。

「——っ」

間桐桜は両手を縄で吊り下げられた状態で、セルディアに捕われていた。

そのすぐ側には捕まえた当の本人が読書に耽っている。

「私をどうする気ですか？」

セルディアをまつすぐに睨みつけながら問う桜。

「どうもしないさ。君は明日、遠坂凜をここに呼び出すための餌に過ぎん。下手な真似さえしなければ、こちらも余計な手出しはしない」

本から目を離さずに返答するセルディア。

「そこまでして姉さんを……」

「当然だ。奴を倒すことこそが我が至上の目標。聖杯なぞ二の次よ」

「だが聖杯は必ず我らが手に入らなければならん。そこは忘れるなよ、マスター」

実体化して姿を現わした彼のサーヴァント。

「当たり前だ。あれをロンドンに持ち帰り、私の力を証明したところで、私はルヴィアに求婚する」

セルディアは自信ありげに言葉を紡ぐ。

「遠坂凜を倒し、聖杯をこの手に持ち帰れば、あいつとて、私を認めざるをえまい」

桜はルヴィアとは面識がないものの、その人となりは姉の凜から聞いている。

そんな桜でさえ、セルディアの求婚はルヴィアの性格上、成功しないとわかる。

それでもなお、彼の言葉は揺らがない。

それは彼の自らの才能による自信か、それとも現実を認めたくないプライドゆえか。

「そうですか——でも残念です」

桜の声音が急に暗みを含む。様子の変化に、セルディアも瞳を桜に向けた。

「ほう、何が残念なのかね？」

「人質にするなら、相手を間違えたことです」

桜の言葉には怒気とは違う、まるでそれそのものが呪いの如き深怨を帯びている。

「あなたたちは知らないでしょうが、私は——」

「——本来の聖杯なのであろう」

セルディアの言葉に、桜の表情が一変した。

「なぜ——それを……」

「ここに来るまでに遠坂と間桐についてはあらかじめ調べておいたのだな。まあ、調べたのは前回の聖杯戦争のことまでで、凜に娘がいることは計算外だったかな」

「——っ」

「それにしてもまあ、『この世^{アンリ・マユ}全ての悪』の力で俺を脅すつもりだったのだろうが、甘かったなあ、間桐桜。今回はあくまで擬似聖杯戦争であって、正式な聖杯戦争ではない。いくら擬似聖杯が聖杯の一部によって造られたとしても、君の力を覚^め醒^めさせるには程遠い。それについては、君の身体が一番わかっているはずだ」

桜は歯ぎしりする。

セルディアの言葉は間違いではない。

聖杯の力がなければ、桜の『この世全ての悪』は使えない。

桜としては、セルディアを動揺させ、なんとかここから抜け出す隙を作りたかったのだが、よもや『この世全ての悪』までセルディアが把握していたとは思わなかった。

先程の彼の様子で完全に甘くみていた。冷静になれば、確かにセルディアは魔術士として優秀だった。

「ごめん、姉さん……」

何もできない。桜は一人悔やむことしかできなかった。

○

「――嘘だ、嘘が広がってる……」

私はただその光景に驚愕せざるをえなかった。

ご飯、味噌汁、肉じゃが、ブリ大根、イカの照り焼き、おしんこ、その他諸々、日本古来の伝統的和食が居間のテーブルに置かれていく。

もちろん、それだけでは特に驚くものではない。

問題はその料理を作った人物だ。

「どうした、衛宮麗奈。今出されてるものでは不満かね？」

どこから取り出したかわからない白のエプロンを羽織りながら、アイチャーは優雅に台所にて調理をしていた。

「ありえない。つか普通にアリエナイ！なんなの、なんでうちのサーヴァントはこうも料理が上手い奴らばかりなのう」

うゝ、つとうなだれてみる。

食卓に置かれる料理たちが、鼻孔をくすぐり、食欲を振るい立たせる。

「私も久しぶりに料理してみようかなあ」

「――それはダメ、ノー、絶対」

間髪入れずに私のチャレンジ精神を否定する母上。

「そんな真っ向から止めないでよ、さすがに傷つくよ」

「じゃかしい！あんたのせいで、うちのキッチンのリフォームせざるをえなくなっただからね」

「――っ、それを言うのはズルイ……」

「ほう、ドが付くほどのケチな凜が台所のみとはいえ、一新されていたので不思議に思っていたのだが、いったい何があったのだ？」

アーチャーが最後の一品である鳥の唐揚げを食卓に置きながら、興味深げに問う。横を見ると、セイバーは済まし顔だが、心なしか聞き耳をたててるように見える。

「のわー！言うな」

母さんは私の叫びを耳にも入れず。

「この娘、子供のころにおにぎりを作ろうとしたら、なぜかキッチンが爆発したのよね」

アーチャーとセイバーが信じられないものを見るような目で私を見つめる。

お願い、そんな目で見ないください。

「なに、人には得意、不得意がある。気にするほどのものではない」
子供を諭すような口調のアーチャー。

「あんただけは慰められたくない！」

――。

「美味い――美味しゅぎる……」

「泣きながら食べないの、麗奈」

「うぐう、悔しい、でもおいしい……」

「確かに。和食ならではのサッパリさの中に含まれる独特のコク。いや改めて恐れ入った」

「フランスの救世主にこうも褒められるとは、なかなかに誇らしいものだな」

「ほんと、麗奈もまともに料理できれば、アタシの負担も多少は減るのねえ」

「うつさい。母さんだって私がいないと、携帯一つともに動かせないくせに」

私のささやかな反撃。

「なつ、今はそんなこと関係ないでしょ！」

温かい団欒がそこにあった。

いつもとメンバーは違うけれど、それでも明るくて、楽しい食卓がそこにある。

決して無理に明るく振る舞おうとか、そんなものはここにはない。

ただ、桜姉さんがいつ戻ってきててもいいように、帰る場所が壊れないように。

それでも少し物足りないと思うのは、アイツがこの場にいないからだろうか――。

「大丈夫ですよ、麗奈」

ふいにセイバーが優しげな瞳で私に告げる。

「明日には彼もちゃんと回復しますから」

うつ、なんか一本取られた気分。

それにしてもこの味付け、なぜか懐かしい感じがするのは気のせいなのだろうか……。

「ふう……」

風呂からあがって、火照った身体を涼ませようと縁側に向かうと、母さんが一人、座って夜風にあたっていた。

「ん？ああ、麗奈か」

母さんは私に気づき、手を振って私を招く。

私は無言で母さんの隣に座る。

「珍しいね、母さんが髪を結ぶなんて」

母さんは昔、両側の髪を結んでいたらしく、今は常に髪を降ろしているけどたまに今みたいに昔の髪型にすることがある。

「気分転換——というよりは初心に戻った気分ね。やっぱりこの歳だと似合わない？」

「ううん、今でも似合ってるのはいろいろとズルイと思う」

これはお世辞でもなく、本心だったりする。

母さんは、私から見ても、とても一児の母とは思えないほど美人だ。

「ありがとう……」

素直に礼を言う母さんもまた珍しい。

「ねえ、麗奈。あんたはなんで魔術士になろうとしたの？」

——やっぱり。いつかは聞かれると思った。

「うーん、きっかけは多分、気まぐれで覚えようかなあってところでも——」

特に言葉を用意したわけでもない。だけど自然と、伝えるべき言葉を私の口が紡いでゆく。

「多分私は、母さんと父さんの見てきた世界を見たかったんだと思う。親としてではなく、魔術士としての遠坂凜と衛宮士郎の世界を……」

——結局はそれも言い訳。
素直に言えば現実逃避というやつだ。

撫子先輩を失ったあの日、私の世界も同時に壊れたのだ。

——だから欲しかった。新しい自分の世界が。

そして新しく作り上げた。魔術士としての衛宮麗奈を——。

「聖杯戦争が終わってから、あなたは魔術士でいつづけるつもり？」

「わからない——でも、後悔のない選択はするつもり」

そう、先の話なんてわからない。

それでも——自分の答えを見つけるまで、私はこの戦いに生き残ってみせる。

「母さんは、本当に明日、一人で行くの？」

「正確にはアーチャーと二人よ。なに、もしかして心配してるの？」

こつちを見てニヤニヤする母さん。

「べつ、別にそんなんじゃないって」

「言ったでしょ。親子でも私たちは魔術士。私よりも自分の心配をしてなさい」

なんでもないことのように言っても、母さんの言葉はどこか強がっているように聞こえた。

私は頭を傾けて、母さんの肩に乗せる。

「麗奈？」

「今ぐらいは、親子でいてもいいんじゃないかな」

「……ありがとう」

母さんの手が、そっと私の手を握る。

「明日は勝って、必ず帰って来てね」

「——うん。約束する」

それは二人だけの、小さくて、確かな約束だ。

○

——早朝五時。

本来朝に弱い凜は、自身でも驚くぐらいすっきりと目が覚めた。

身支度を整え、自身の宝石などの確認。

「使い魔だ。おそらく、ランサーのマスターのものだろう」

実体化したアーチャーが握る小型の異形を凜に投げ渡す。おそらくメッセージを伝える伝言用の使い魔。

使い魔をキャッチし、短めの詠唱を吟く。

使い魔が消え、凜の思念にメッセージが流れた。

「——冬木工場群跡地か。なるほど、隠れ蓑には最適ね」

準備を終え、向かったのは麗奈の部屋。

図書室の如くさまざまな本が雑多に占拠する部屋の中、麗奈は就寝している。その少し端の方にライダーも眠っていた。

麗奈の頬にそつと口づけをして、髪を優しく撫でる。

「行ってくるわね」

そう一言だけ告げて、部屋をあとにし、その足で玄関を出る。冬の朝は未だ闇に包まれ、空気は冷たい風に支配されていた。

アーチャーは再び霊体化し、凜の横に並ぶ。

「ふつ、なんだかんだで娘が可愛いようだな」

「そりゃあね。厳しくは言ったけど、やっぱり自分の娘だもの」

凜の頭に過ぎるは、亡き父——遠坂時臣との最後の日。

普段、魔術士の師として接してきた父は、最後に父親として別れを告げた。

「私はあの娘を一人ぼっちには絶対させない。だから——」

拳を握りしめる。

「——勝つわよ、アーチャー」

その瞳には、揺るがぬ決意の意思が宿っていた。

「ふつ、私と君が組む以上、敗北する道理はなかるつ」

アーチャーの言葉は、それが当たり前かのように揺るぎなき自信に

満ちていた。

衛宮邸をあとにし、二人は決戦の地に向けて歩き出す。

F a t e / a f t e r

f o r t h d a y s

f i n i s h

a n d

g o

t o

f i

f t h d a y s .

四日目 衛宮家急襲（6）（後書き）

四日目無事終了です

五日目はアーチャーVSランサーの激闘中心となります

現在書き溜めているのは五日目（3）までとなりますので、それ以降はしばらく休止し、その間は別作品を投稿します

今回はミニ外伝となります

麗奈のキッチン爆破事件の模様をお送りしますw

——現陣営状況

衛宮陣営

- ・衛宮麗奈&ライダー（孫策）
- ・衛宮凜&アーチャー（エミヤ）
- ・????（仮ライダー）&セイバー（ジャンヌ・ダルク）

敵陣営

- ・千堂襖馬&アサシン（服部半蔵）

- ・????&キャスター

- ・セルディア・ガラムヴァルド&ランサー（ヴラド・ツェペシュ）

- ・仮面の男（衛宮士郎？）&バーサーカー

- ・????&アヴェンジャー

外伝 u n l i m i t e d b r o k e n k i t c h e n (前書き)

予告どおり、F a t e / a f t e r の外伝です

内容的には麗奈がまだ五才の話

なつかしのあのキャラも登場します

外伝 unlimited broken kitchen

「もう麗奈も五才なんだから、留守番ぐらいはできるわよね」

衛宮凜はにこやかな笑顔で幼い衛宮麗奈を諭す。

「うん！できゆ！」

まだままならない日本語で、無邪気に返事をする麗奈。

「お昼はいつも食べるところに置いてあるから、お腹空いたら食べるんだよ」

言いながら、麗奈の頭を撫でる衛宮士郎。

「留守番できるか——麗奈？」

「大丈夫だよ、パパ」

無邪気な笑みを見せる麗奈を、士郎は愛おしく抱きしめる。

「やっぱり心配だよー」

「パパ、くすぐったいよう」

頬を擦り寄せる士郎の耳を引っ張り上げる凜。

「はいはい、あんたの親バカっぷりはわかってるから、さっさと行くわよ」

「どわー！いつ、行くから、そんな強く引っ張るな」

「じゃあ留守番よろしくね、麗奈」

「うん！パパ、ママ、いつてらっしゃい」

そのまま二人は麗奈を残して衛宮邸をあとにする。

「初めてのお留守番！何しよう……」

お昼までにはまだ時間がある。

——つと、麗奈は時間を確認してハッとする。

「もうすぐ『マジアン』の時間だ！テレビ、テレビ」

——それからしばらく、麗奈はテレビを観ていた。

アニメが流れれば、展開に一喜一憂し、ワイドショーやニュースが流れれば「ほにゃ？」——という鳴き声で首を傾げる。

やがて彼女の瞳に、映像の右上に表示されたデジタル時計が映る。

「あっ、お昼ごはんの時間だ」

麗奈はテーブルに置かれた皿のラップを丁寧に剥がし取る。

「ひやしら〜めん」

嬉しそうに顔をほころばせ、子供用のフォークを逆手に持って、ぎ

こちないながらもゆっくりとつるつるの麺を口に運ぶ。

「おいし〜」

満面の笑みを浮かべる。

幼い麗奈でも、両親の作る料理の美味さは知っていた。外食よりも両親の作った料理の方が、麗奈は好きだった。

「ごちそうさまでした」

礼儀正しく両手を合わせる。

空になった皿を両手で持ってキッチンに運ぶ。流しの手前に置かれた台に乗り、皿を流しに入れる。

ふと——麗奈はキッチンの周りを眺める。

いつもこのキッチンにて、麗奈の両親は料理を作っている。二人の料理は、隣に住むタイガーおばさんが通いつめるほどにおいしい。

そんな料理を作る両親の背中を、麗奈はずっと見てきた。

「パパもママも料理上手いんだから、そのムスメのアタシだって料理はできるもん」

麗奈の瞳が燃える。

彼女は両親へのお礼に、二人に料理を作ること考えたのだ。

「よしっ！作るぞー、おー！」

麗奈は右腕を高く振り上げ、台所を再び見回す——っと、笑顔に陰りが帯び、がつくりとうなだれる。

「れいな——料理の作り方、わかんない……」

調理方がわからないという、根本的な問題に行き当たってしまう。材料があっても意味はない。

今にも涙が溢れんばかりに麗奈の瞳を濡らす。

「あつ——」

涙が流れ出す直前、彼女の眼に炊飯ジャーが映る。

「——おにぎり……おにぎりなら作れる！」

再び目を輝かせ、掌を握りしめる。

「ここから、レイナのしえふへの道の始まりなのらー」

○

「——まったく、なんで僕みたいな気品ある大人がガキの面倒を見なきゃならないんだ」

「あら兄さん、そのわりには顔がニヤけていますよ——ワカメおじちゃん」

「桜あ！お前がその名で呼ぶなー！」

桜とその兄である間桐慎二は二人並んで衛宮邸に向かっていた。

前日、士郎から麗奈の面倒を見てくれと頼まれたものの、二人とも昼ごろは用事があったので、夕方になったところでそれを終え、麗奈の所へ向かっているのだ。

空を射す夕焼けが徐々に埋もれ、まもなく夜の黒に染まりかかろうとしている。

「衛宮も人使いが荒いよね。夜まで出かけるからって、自分の娘を僕たちに預けるなんて——僕が父親なら、どこに行くときだって一緒に連れて行くさ」

「……兄さんって意外に子煩悩ですよねぇ」

慎二は麗奈のことが気に入っているのか、彼女をいたく可愛がっている。

一方の麗奈も、慎二を『ワカメおじちゃん』と呼んで懐いている。口では嫌々言いながらも、慎二は麗奈と会えるのを楽しみにしていた。

しばらくして、二人は衛宮邸の前に着く。荘厳さと奥ゆかしさを同時に感じさせる、静かなたたずまい。

何年と変わらぬ屋敷の異変に、二人はすぐ気付く。

「なんか煙りが出ってますね……」

「それに——なんか焦げ臭いぞ」

「もしかしたら火事かも。早く入りましょう!」

言うやいなや、桜はすぐさま衛宮邸の中に入り、慎二も一歩遅れてそれに続く。玄関に入り、奥へと進む。

「——ッ!？」

焼ける異臭がキッチンから漂う。

脚を素早く踏み出し、居間を通ってキッチンに入る。

「——麗奈ちゃん!？」

キッチンの真ん中で倒れている麗奈に桜は駆け寄る。彼女の身体をそっと抱き上げる。気を失っていた。

「麗奈ちゃん——大丈夫!？麗奈ちゃん!」

桜は彼女の身体を揺する。

「——うーん……」

か細い声とともに、麗奈の意識が戻る。

「……桜お姉ちゃん?」

薄目を開いた麗奈を見てホッと息をつく桜。

「なっ——なんじゃこりゃー!？」

兄の声に、麗奈に集中していた意識が拡散する。

「——っ！」

そこで桜も、目の前の惨状に気がつく。

——まるでこのキッチンの中でだけ台風が吹き荒れたかのような光景。

調理器具のほぼ全てが破損。中には原型すら留めていないものも。
冷蔵庫の中身が辺りにぶちまけられ、キッチンが不快な色調に染め
「コントラスト」
上げられている。

啞然とする二人。

「ねえ、麗奈ちゃん。いったい何があったの？」

桜の問いに、麗奈は目を潤ませる。

「うわぁーん！」

幼い麗奈の泣き声が、惨場と化したキッチンにむなしく響き渡った。

○

——鬼の形相。

そんな表情で、自宅に戻った凜はキッチンを睨んでいた。
同じく自宅に戻っていた土郎はあぐらをかきながら、そんな凜の様

子に苦笑を浮かべる。

麗奈は目に涙を溜めながら、ガシツと父の腕にしがみつく。

——ゆっくりと振り向く凜。

目が合った麗奈は恐怖のあまり、父の腕に顔をうずめて泣き始める。

「泣いたって無駄だからね、麗奈。何よこれ？まるで戦場跡地じゃない！どうしたらこうなるのよ！？」

怒りの咆哮がこだまする。

「まあまあ姉さん。麗奈ちゃん姉さんたちのためにおにぎりを作ろうとしたんだから、それ以上怒らなくても——」

「あまい、桜！キッチンの修繕費がどれだけ掛かると思ってるのよ！——一気に家計が傾くわよ」

「ははっ——衛宮夫人。あんまり怒りすぎると皺ができるぜ」

「うるさいワカメ。黙ってるワカメ。その髪引き抜いてワカメサラダにするわよワカメ」

「ワカメワカメって何回も言ってるじゃねえ！」

「まあ凜、そこまでしておけて。麗奈だってなにも悪さしようとしたわけじゃないし、俺達のためにやろうとしたことなんだから、今回は許してあげよう」

士郎の説得に、凜は深々とため息を吐く。

「まったく……あんたもあまいんだから」

凜の言葉に、麗奈は父の腕から顔を離す。

「だけど麗奈。パパも一つ、お前に怒らなきゃいけないことがある」
言いながら士郎は、片方の腕で麗奈の頭に軽くチョップで叩く。

麗奈は父の突然の行動に呆けてしまう。

「パパやママのために料理しようとしてくれたことはすごく嬉しいよ。でもね——キッチンには火の元が危ない。今回はキッチンだけだからよかったけど、もし家が火事になって、麗奈が死んじゃったら、パパもママもすごく悲しい」

優しく、麗奈の頭を撫でる。

「あんまりパパとママを心配させるようなことをしちゃダメだぞ」

士郎の言葉に、麗奈はしばらく呆然としていたが、やがて小さく頷く。

「……ごめんなさい、パパ」

士郎は麗奈の謝罪に笑顔で返す。

麗奈は父の腕から手を離し、トコトコと母の前まで歩く。

「ごめんなさい、ママ」

それから桜や慎二の方にも振り向く。

「桜お姉ちゃんも、ワカメおじちゃんもごめんなさい」

真剣に謝る麗奈を見て、彼女の身体を凜がギュウと抱きしめる。

「まったく……あんたには勝てないわ」

「ママ……苦しいよ、にやう」

二人のやり取りに、にこやかな笑みを浮かべながら士郎は立ち上がる。

「よし——今日は外で寿司でも食べに行くか」

「おスシ！わーい」

はしゃぐ麗奈の笑顔を見て、士郎は彼女の頭をまた優しく撫でた。

○

か細い寝息をたてて、すやすやと眠る麗奈。

そんな彼女の髪を、士郎は優しくかきあげる。

「しかし何なのかしらね——擬似聖杯」

彼の背後の襖に寄り掛かる凜がつぶやく。すでに桜と慎二は自宅に戻っており、部屋には三人だけ。

「魔術協会あちらがわにも詳細がわからない以上、俺達にもわかりっこないさ」

二人は先程、魔術協会から呼び出しを受け、秋葉原支部に向かったのだ。

そこで旧知であるロードエルメロイ？世ことウェイバー・ベルベツトと再会した。

彼によると、どうやら冬木にてわずかではあるがマナの流に乱れが生じているとのこと。

この乱れは、規模は違うものの、聖杯が生成される時の乱れと酷似しており、新しく聖杯が生成されるのではと警戒されている。

——前回の聖杯戦争にて、士郎のサーヴァントであるセイバーによって聖杯はこの世から消えた。

さらに大元である大聖杯も凜とエルメロイの二人によって解体されて、聖杯の生成は不可能のはずだ。

にも関わらず、新たな聖杯が誕生するかもしれない。

協会は仮にこの聖杯を『擬似聖杯』と呼び、現冬木市の管理人である凜と士郎に厳重警戒を言い渡したのだ。

「もう二度とあんな悲劇は起こさせない」

「わかってるわ。一応、次の休みに霊脈の流れを調べてみる」

「聖杯戦争がまた起きれば、嫌が応にでも麗奈が巻き込まれる。それだけは、絶対に避けよう」

「……どうしたの？そんな改めるようなことを言っ

「いや……なんでもない。俺達もそろそろ寝ようか」

士郎の穏やかな声に、凜は言い得ぬ不安を感じ取った。

そんな凜の不安をよそに、木々は静かに風に吹かれ、木の葉を揺らす。

士郎が家を出たのは、それから数週間後のことだった。

外伝 unlimited broken kitchen (後書き)

ミニ外伝でした

こんな感じで今後も小休止的な感じでたまに外伝を挟んでいこうと思います

では次回から本編に戻ります

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6738w/>

Fate/after

2011年12月2日19時57分発行